

伊坂城跡（第3次）発掘調査報告

2012（平成24）年

三重県埋蔵文化財センター



I区全景（北東から）



II区全景（北から）



S A 501全景 (東から)



S A 501断割断面 (南東から)

伊坂城跡（第3次）発掘調査報告

2012（平成24）年

三重県埋蔵文化財センター

序

四日市市域を含む北勢地域の戦国時代は、伊勢長島（現桑名市）の願証寺を本拠とした一向一揆のほか、「国人層」と呼ばれる戦国大名までは成長していない地域の有力者層が複数盤拠し、互いに牽制しあったり、時には連合しながら、当地を治めていました。16世紀後半、尾張から興った織田信長は、天下統一を目指す過程で隣国の伊勢支配も目論み、永禄10（1567）年に美濃を攻略した後、北勢地域へも侵攻を開始しました。

今回、報告を行いました伊坂城跡も、こうした国人領主によって築かれたとみられる戦国時代の城跡で、過去の調査で城の土塁の外側には多くの屋敷地があることがわかっています。城下への集住化は織豊期を経て江戸時代に完成する都市形態ですが、今回報告する地区も、こうした城外に並ぶ屋敷地群の一画にあり、数多くの戦国時代の生活に関わる遺構・遺物が確認されています。

今回の発掘調査は新名神自動車道建設に伴うものですが、今後、城跡本体の一部も調査を予定しております。ささやかではありますが、本書がこの地域の歩んできた歴史の営みを鮮やかに切り取って甦らせ、地域の大切な学術財のひとつとして末永くご活用願えれば幸いです。

発掘調査にあたりましては地元の方々をはじめ、関係各位から多大なご協力とご配慮を頂きました。文末ではございますが、心からお礼申し上げます。

平成24年3月

三重県埋蔵文化財センター
所長 河北 秀実

例 言

- 1 本書は、近畿自動車道名古屋神戸線（四日市JCT～亀山西 JCT）建設事業に伴う伊坂城跡（第3次）の発掘調査報告書である。
- 2 調査成果は、下記概報で一部を報告しているが、今後は正報告である本書を参照されたい。
三重県埋蔵文化財センター『近畿自動車道名古屋神戸線（四日市 JCT～亀山西 JCT）建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報Ⅰ 伊坂窯跡・伊坂遺跡（第5次）・伊坂城跡（第3次）』2010年
- 3 調査地は三重県四日市市伊坂町字古屋敷に位置する。
- 4 発掘調査は、原因者である中日本高速道路株式会社の依頼を受け、三重県が受託して行った。
- 5 調査の体制は下記のとおりである。

調査主体 三重県教育委員会

[現地調査 平成21年度]

調査担当 三重県埋蔵文化財センター 調査研究Ⅱ課

主査 小濱学 船越重伸 杉野直也

主事 前野謙一

土工委託 安西工業株式会社

航空測量 日本海航測株式会社

調査期間 平成21年7月29日～平成22年1月29日

[平成22・23年度整理作業]

整理担当 三重県埋蔵文化財センター 調査研究Ⅱ課

主幹 穂積裕昌

主査 杉野直也 岩脇成人 鈴木規之

主事 東谷洋平

技師 櫻井拓馬

保存処理委託（鉄製品）（財）元興寺文化財研究所

- 6 本書の執筆は上記の整理担当が分担し、文責は各節の文末に記載した。全体の編集は櫻井があたった。
- 7 発掘調査および整理作業に際しては、地元の方々をはじめ、下記の方々や機関等に御指導・御協力を賜った。記して感謝したい。
伊藤徳也、清水政宏、竹田憲司、中井均、中野晴久、堀木真美子、滋賀県教育委員会、(財)滋賀県文化財保護協会、(公益)愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター、四日市市教育委員会（敬称略、組織名称は当時）。
- 8 調査図面・写真・出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターが保管している。ご活用願いたい。

凡 例

- 1 本書では、国土地理院発行の1：25,000地形図「菰野」「桑名」、四日市市発行の1：2,500都市計画図などの地図類を用いた。
- 2 標高は東京湾平均海水面（T.P.）を基準とした。
- 3 伊坂城跡の調査では、過去の調査との整合を図るため日本測地系を用いている（詳細は第Ⅱ章参照）。方位は第Ⅵ座標系の座標北（磁気偏角は7.0°）で示した。
- 4 土色の標記は、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』（日本色研事業株式会社、1967年初版）に拠った。
- 5 本書で用いる遺構略号は以下のとおりである。
SH：竪穴住居 SB：掘立柱建物 SA：土塁・柵 SK：土坑 SD：溝 Pit：柱穴
- 6 遺物実測図の縮尺は1/4に統一した。
- 7 註は各節の文末に付し、参考文献も註に記した。
- 8 遺構一覧表、遺物観察表は巻末に付した。
- 9 写真図版中の遺物に付した番号は、各遺物の報告番号と対応している。また、遺物写真の縮尺は統一していない。

目次

巻頭図版
序
例言・凡例

第Ⅰ章 前言	1
第1節 位置と環境	1
第2節 調査に至る経緯	3
第3節 既往の調査	3
第Ⅱ章 発掘調査の方法	7
第1節 調査の方法	7
第2節 調査の経過	7
第3節 文化財保護法等にかかる諸通知	9
第4節 調査地の微地形と基本層序	9
第Ⅲ章 遺構	14
第1節 検出遺構の概要	14
第2節 古代以前（古墳時代～古代）の遺構	14
第3節 中世の遺構	21
第Ⅳ章 遺物	47
第1節 出土遺物の概要	47
第2節 古代以前（古墳時代～古代）の遺物	48
第3節 中世の遺物	50
第Ⅴ章 総括	59
第1節 伊坂城跡における本調査地の位置	59
第2節 伊坂城の改修をめぐって	60
第3節 出土遺物の特徴	63
第4節 今後の課題	64
遺構一覧表	65
遺物観察表	67

巻末図版

図目次

第1図	周辺遺跡分布図	1	第23図	集石土坑	37
第2図	新名神路線上遺跡位置図	4	第24図	その他の土坑①	38
第3図	既往の調査位置図	6	第25図	その他の土坑②	39
第4図	調査区グリッド図	8	第26図	その他の土坑③	40
第5図	土層の位置と調査地のエレベーション	10	第27図	その他の土坑④	41
第6図	土層図①	10	第28図	溝・区画①	42
第7図	土層図②	11	第29図	溝・区画②	43
第8図	土層図③	12	第30図	溝・区画③	44
第9図	土層図④	13	第31図	溝・区画④	45
第10図	遺構全体図	15	第32図	土塁と虎口	46
第11図	I区遺構平面図	17	第33図	出土遺物実測図①	49
第12図	II区遺構平面図	19	第34図	出土遺物実測図②	50
第13図	古墳時代～古代の遺構	20	第35図	出土遺物実測図③	51
第14図	掘立柱建物・柵①	28	第36図	出土遺物実測図④	52
第15図	掘立柱建物・柵②	29	第37図	出土遺物実測図⑤	53
第16図	掘立柱建物・柵③	30	第38図	出土遺物実測図⑥	54
第17図	掘立柱建物・柵④	31	第39図	出土遺物実測図⑦	55
第18図	掘立柱建物・柵⑤	32	第40図	出土遺物実測図⑧	56
第19図	掘立柱建物・柵⑥	33	第41図	出土遺物実測図⑨	57
第20図	掘立柱建物・柵⑦	34	第42図	伊坂城跡調査全体図	61
第21図	掘立柱建物・柵⑧	35	第43図	常滑形態分類図	63
第22図	方形土坑	36	第44図	常滑真焼・赤物の比率	64

表目次

第1表	近畿自動車道名古屋神戸線埋蔵文化財 発掘調査経過表	5
第2表	常滑甕・片口鉢の変遷表	64
第3表	遺構一覧表	65
第4表	遺物観察表	68

巻頭図版目次

巻頭図版1 (調査区遠景)	
I区全景 (北東から)	
II区全景 (北から)	

巻頭図版2 (土塁)	
S A501全景 (東から)	
S A501断割断面 (南東から)	

卷末図版目次

- ・写真図版1 (調査前風景)
 - 調査前風景 (北側斜面、北東から)
 - 調査前風景 (I区、中央高まりは土塁)
- ・写真図版2 (調査地遠景)
 - 伊坂城跡全景 (東から、右奥の高まりが主郭)
 - 調査地全景 (西から、伊勢湾を望む)
- ・写真図版3 (調査区遠景)
 - I区全景 (北から)
 - II区全景 (北西から)
- ・写真図版4 (調査区全景①)
 - I区全景 (上が北東)
 - 区画A (上が西)
- ・写真図版5 (調査区全景②)
 - 区画B (上が東)
 - II区全景 (区画C・D、上が西)
- ・写真図版6 (古代以前の遺構① 竪穴住居)
 - S H546・586 (北から)
 - S K574 (S H546竈、北から)
- ・写真図版7 (古代以前の遺構② 竪穴住居)
 - S H579 (南東から)
 - S H584 (北から)
- ・写真図版8 (中世の遺構① 北側斜面・登り口)
 - 北側斜面・土塁全景 (北から)
 - 北側斜面・登り口 (北から)
- ・写真図版9 (中世の遺構② 土塁)
 - S A501全景 (東から)
 - S A501断割断面 (南東から)
- ・写真図版10 (掘立柱建物・屋内土坑)
 - S K554・S B630 (東から)
 - S K517 (北から)
- ・写真図版11 (中世の遺構④ 方形土坑)
 - S K593 (北西から)
 - S K612 (西から)
 - S K617 (北西から)
 - S K551 (北から)
- ・写真図版12 (中世の遺構⑤ 集石土坑)
 - S K520 (東から)
 - S K553 (南から)
 - S K603 (南から)
- S K622 (北から)
- S K613 (西から)
- ・写真図版13 (中世の遺構⑥ その他の土坑)
 - S K502 (南から)
 - S K502断面 (西から)
 - S K527 (南から)
 - S K531 (西から)
 - S K533 (西から)
- ・写真図版14 (中世の遺構⑦ その他の土坑)
 - S K539 (西から)
 - S K550 (東から)
 - S K563 (北から)
 - S K611 (北西から)
 - S K593・594・619・620 (北から)
- ・写真図版15 (中世の遺構⑧ 堀割)
 - S D575 (南から)
 - S D575遠景 (南から)
- ・写真図版16 (中世の遺構⑨ 溝)
 - S D545 (西から)
 - S D570断面 (東から)
 - S D545断面 (西から)
 - S D607断面 (東から)
 - S D538 (東から)
- ・写真図版17 (出土遺物①)
 - 出土遺物
 - 2・4・5・9・10・11・13・14・16・19・25
- ・写真図版18 (出土遺物②)
 - 出土遺物
 - 24・26・28・30・31・40・45・47~49・54・55
- ・写真図版19 (出土遺物③)
 - 出土遺物
 - 58・60・62・63・67・68・72・76
- ・写真図版20 (出土遺物④)
 - 出土遺物
 - 71・77・78・81・84・88・97・99
- ・写真図版21 (出土遺物⑤)
 - 出土遺物
 - 101・106・107・109・112~115・122

・写真図版22 (出土遺物⑥)

出土遺物

124・130・135～137・139・142～144・146・
149

・写真図版23 (出土遺物⑦)

出土遺物 150～155

・写真図版24 (出土遺物⑧)

出土遺物

61・161・162・165・168・170・172・173・176・
177

・写真図版25 (出土遺物⑨)

出土遺物

178～180・S K 550関連・184・188・199・212

・写真図版26 (出土遺物⑩)

出土遺物

73・74・98・121・189・200・203・218・220・
231～234

第I章 前言

第1節 位置と環境

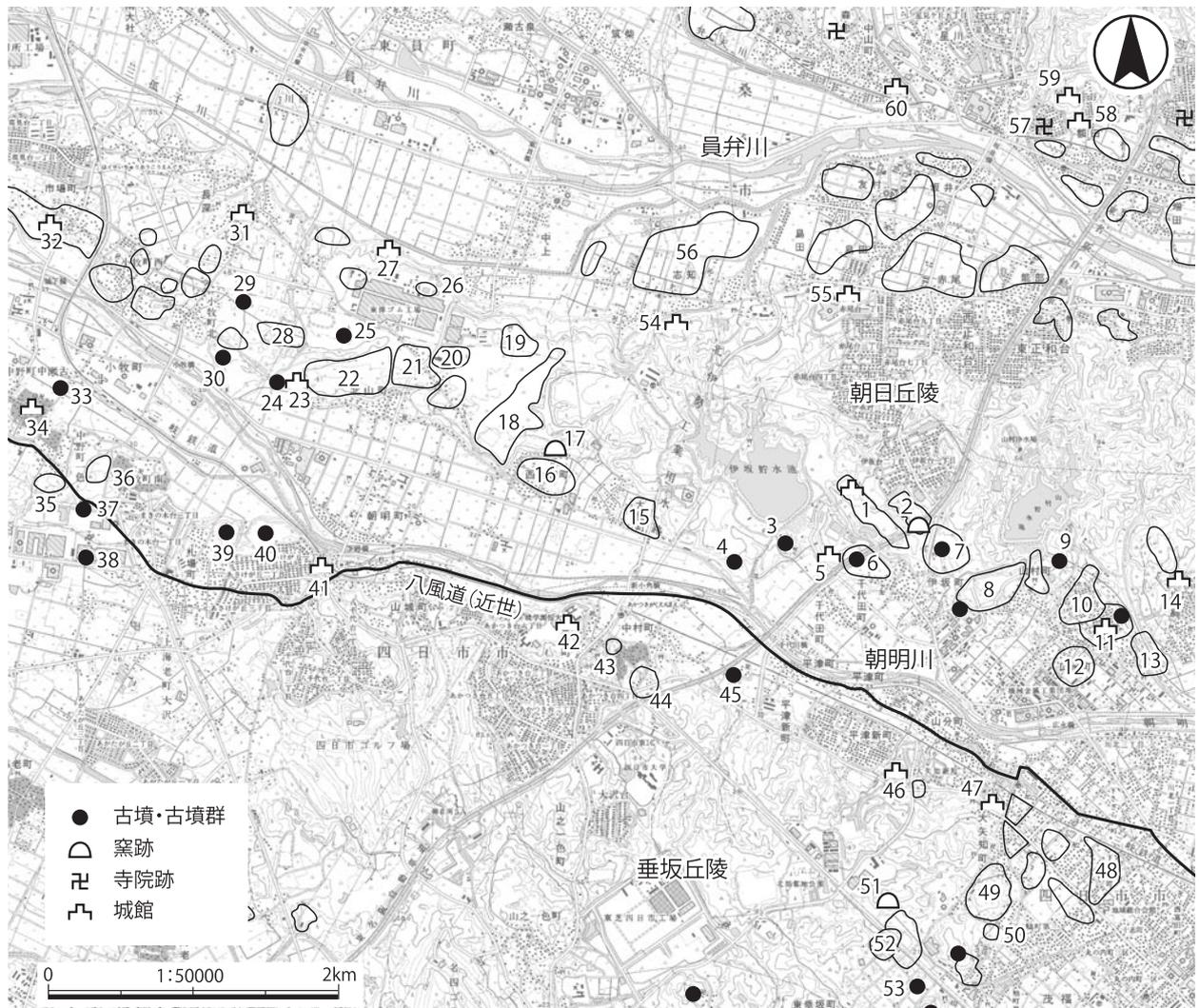
①歴史的・地理的環境（第1図）

伊坂城跡は、三重県の北勢地方、四日市市伊坂町字丸内から古屋敷にかけて所在する戦国時代の城館である（第1図）。当地の歴史的・地理的環境についてはかつて詳述したところであり¹⁾、また中世に関しては伊坂城跡の前回調査報告書（以後、文中では前報告書と呼ぶ）が極めて詳しいので²⁾、そ

れらに拠りつつ概略を述べることにしたい。

北勢地方はいわゆる近畿三角帯の東縁に位置し、西を鈴鹿・養老山地、東を伊勢湾によって画されている。鈴鹿山地からは員弁川・朝明川・三滝川などの河川が伊勢湾に向かって注ぎ込んでいる。

当地は朝明川の左岸、朝日丘陵から派生する小丘陵の尾根上にあたる。この朝日丘陵は、奄芸層群と



1. 伊坂城跡
2. 伊坂遺跡・伊坂窯跡
3. 浄ヶ坊古墳群
4. 広古墳群
5. 西ノ広城跡
6. 西ヶ広遺跡・松山古墳
7. 菟上遺跡
8. 山村遺跡
9. 金塚遺跡
10. 城ノ谷遺跡
11. 広永城跡
12. 間ノ田遺跡
13. 辻子遺跡
14. 埋縄城跡
15. 鐘撞遺跡
16. 西辻遺跡
17. 北ノ山古窯
18. 北山C遺跡
19. 野中遺跡
20. 黒土遺跡
21. 北山A遺跡
22. 中野山遺跡
23. 北山城跡
24. 居林古墳群
25. 筆ヶ崎古墳群
26. 西山遺跡
27. 花屋城跡
28. 小牧北遺跡
29. 若宮古墳群
30. 門ノ上古墳群
31. 善正寺城跡
32. 市場城跡
33. 鏡塚古墳
34. 中野城跡
35. 中野平古遺跡
36. 小牧南遺跡
37. 高山古墳
38. 大沢古墳
39. 持光寺山古墳群
40. 鶯谷古墳群
41. 源治山城跡
42. 萱生城跡
43. 桶尻谷中世墓
44. 中村遺跡
45. 八幡古墳
46. 大矢知城跡
47. 大矢知陣屋跡
48. 下ノ宮遺跡
49. 久留倍遺跡
50. 大矢知山畑遺跡
51. 鳩浦古窯
52. 山奥遺跡
53. 死人谷横穴墓群
54. 志知城跡
55. 島田城跡
56. 志知南浦遺跡
57. 額田廃寺
58. 額田城跡
59. 高塚の墟城跡
60. 星川城跡

第1図 周辺遺跡分布図（1：50000）

よばれる淡水性の湖底堆積物で、桑名・四日市断層の活動により隆起している。丘陵・段丘面と現河道・谷底平野との間には明瞭な段丘崖がみられ、現在の土地利用上の境界となっている。

朝明川兩岸の丘陵や段丘上は、完新世以降、中世に至るまでの主要な人間活動の場であり、多くの遺跡が認められる。とりわけ、集落は段丘上や平坦な丘陵頂部に集中しており、朝明川の氾濫を避けられる安定した土地を選地していると推測される。一方、起伏に富んだ丘陵斜面には、主に古墳群や中世城館が多く所在するという遺跡分布上の特徴がある。しかし、朝明川の氾濫原については、遺跡の所在が明らかでない。

さて、伊坂城跡に関連する、15・16世紀の北勢における物資流通・陸海交通の中心は、「十楽津」と称された桑名であり、この桑名と近江を結ぶ短捷路として重視されたのが、朝明川に沿って八風峠を越え、近江八日市へと至る八風道であった。交通の要衝としての繁栄を享受した在地の国人衆は、十ヶ所人数とよばれる室町幕府の奉公衆として、あるいは一揆により結合し、当地の実質的な支配にあたった。伊坂城主と伝えられる伊坂（春日部）氏は、北方一揆の一員として文献に名がみえる。彼ら国人衆の拠点が、朝明川の兩岸に所在する城館群であった。

しかし、永禄10年（1567）の織田信長侵攻によって国人衆の結合は解体を余儀なくされ、伊坂城も永禄11（1568）年に滅し、信長に帰順したと伝えられる。八風道も、江戸時代の東海道・中山道の整備等によって次第に衰微していった。

②伊坂城跡近辺の環境

埋蔵文化財包蔵地としての伊坂城跡の範囲は、小丘陵のほぼ全体に及んでおり、尾根上の平坦地（標高約60～80m）と周辺低地との比高差は約20～40mある。北西・北東・南西の三方が谷で画される自然の要害で、尾根の最奥部には高さ約2.5mの土塁に囲まれた主郭や物見櫓台などの主要な防御施設がある。一方、主郭より南東側の尾根筋（丘陵平坦面）には、所々土塁や堀切を伴いながら、複数の曲輪（屋敷地）が連綿と形成されている。

伊坂城跡の北東、谷を挟んだ対岸の丘陵上には伊坂遺跡・伊坂窯跡（2）が所在しており、伊坂遺跡

では古墳時代の竪穴住居、伊坂窯跡では古代の瓦陶兼業窯が確認された。この伊坂遺跡の東側の谷筋は、開発により宅地化しているが、かつては朝日丘陵を横断して伊坂村と赤尾村（桑名市）を結び、員弁・多度へ至る生活道であった。四日市市伊坂町周辺における近世以降の集落は、谷と低地の合流点付近を選地しているが、伊坂遺跡や伊坂城跡の立地もまた、このような交通上の利便性が関係しているのだろう。

③近年の主要な調査

前報告書刊行以降の調査（報告書が刊行されたものも含む）として特筆されるのは、やはり新名神・東海環状自動車道建設に伴う調査であろう³⁾。これまで、旧朝明郡域において縄文時代以前の遺跡は明確でなかったが、平成23年度に実施した四日市市中野山遺跡（22）の発掘調査で、縄文時代早期の炉穴や竪穴住居などが多数確認され、広範囲に遺構・遺物が分布する状況が明らかになった。早期の煙道付炉穴・集石炉の総数は60基以上に及び、東海地方でも有数の炉穴調査事例として注目される。また散発的ながら、縄文中・後期の遺構も確認されている。中野山遺跡は古代の集落としても特筆され、隣接する北山A遺跡（21）、筆ヶ崎古墳群（25）とともに古代の遺跡群として評価される。

一方、伊坂城跡に関わる中世後期の発掘調査成果は少ないが、北勢地域でも徐々に調査例が蓄積されつつある。四日市市西ヶ広遺跡（6）⁴⁾、四日市市久留倍遺跡（49）、桑名市志知南浦遺跡（56）⁵⁾で中世後期の遺構や遺物が確認された。

（櫻井）

註

- 1) 三重県埋蔵文化財センター『伊坂窯跡・伊坂遺跡（第5次）発掘調査報告』2011年。
- 2) 三重県埋蔵文化財センター『伊坂城跡発掘調査報告』2003年。
- 3) 平成24年度に概報を刊行する予定である。
- 4) 三重県埋蔵文化財センター『西ヶ広遺跡（第3・4次）発掘調査報告』2006年。
- 5) 三重県埋蔵文化財センター『志知南浦遺跡発掘調査報告』2008年。

第2節 調査に至る経緯

近畿自動車道名古屋神戸線（新名神高速道路）は、名古屋市と神戸市を結ぶ総延長約175kmの高速道路であり、交通量の増加に伴い慢性的な交通渋滞にあえぐ名神高速道路の代替路線として建設が進められている。

三重県教育委員会と中日本高速道路株式会社名古屋支社四日市工事事務所は、平成21（2009）年2月24日付で、事業地内に存在する埋蔵文化財の取扱い及び発掘調査の実施方法について協定書を取り交わし、以後の調査にあたってきた。そして用地買収状況や工期等の関係から、四日市JCTループ内の遺跡発掘調査を優先的に行うことが決定され、平成21年度は伊坂遺跡（第5次）、伊坂城跡（第3次）の発掘調査を実施することとなった（第1図・第1表）。このうち、伊坂遺跡（伊坂窯跡）に関してはすべての現地調査を終了し、発掘調査報告書を刊行済みである¹⁾。

なお、平成22年度には、新たに計画された鈴鹿PA建設予定地周辺の詳細分布調査を行い、折子遺

跡・高ノ瀬遺跡の2ヶ所を埋蔵文化財包蔵地（遺物散布地）として登録した。また、遺跡発見の事務手続き等を進めるうち、路線内に所在する遺跡の登録名称に誤りが認められたため、平成19（2007）年に作成した路線内の埋蔵文化財一覧²⁾を改訂し、平成23（2011）年5月に関係機関に配布した³⁾。この結果、計画路線内の遺跡数は22ヶ所となった。

（櫻井）

註

1) 詳細は、三重県埋蔵文化財センター『伊坂窯跡・伊坂遺跡（第5次）発掘調査報告』2011年、を参照のこと。

2) 三重県教育委員会・三重県埋蔵文化財センター『近畿自動車道名古屋神戸線（新名神）四日市JCT～亀山西JCT建設予定地内埋蔵文化財一覧Ⅳ』2007年。

3) 三重県教育委員会・三重県埋蔵文化財センター『近畿自動車道名古屋神戸線（新名神）四日市JCT～亀山西JCT建設予定地内埋蔵文化財一覧Ⅴ』2011年。

第3節 既往の調査

①発掘調査以前

伊坂城跡は江戸時代から調査・研究が行われ、『桑名御領分古城跡之図』に古城図があるほか、『勢陽雑記』『三国地誌』などの地誌類で取り上げられてきた。本格的な中世城館としての調査は、三重県教育委員会による中世城館悉皆調査に始まり¹⁾、以後、『四日市市史』²⁾や伊藤徳也氏³⁾による縄張り調査によってその様相が明らかにされてきた。伊坂城跡は保存状態もよく、主郭の周辺には、大規模な土塁や虎口、井戸跡などがよく残っている。

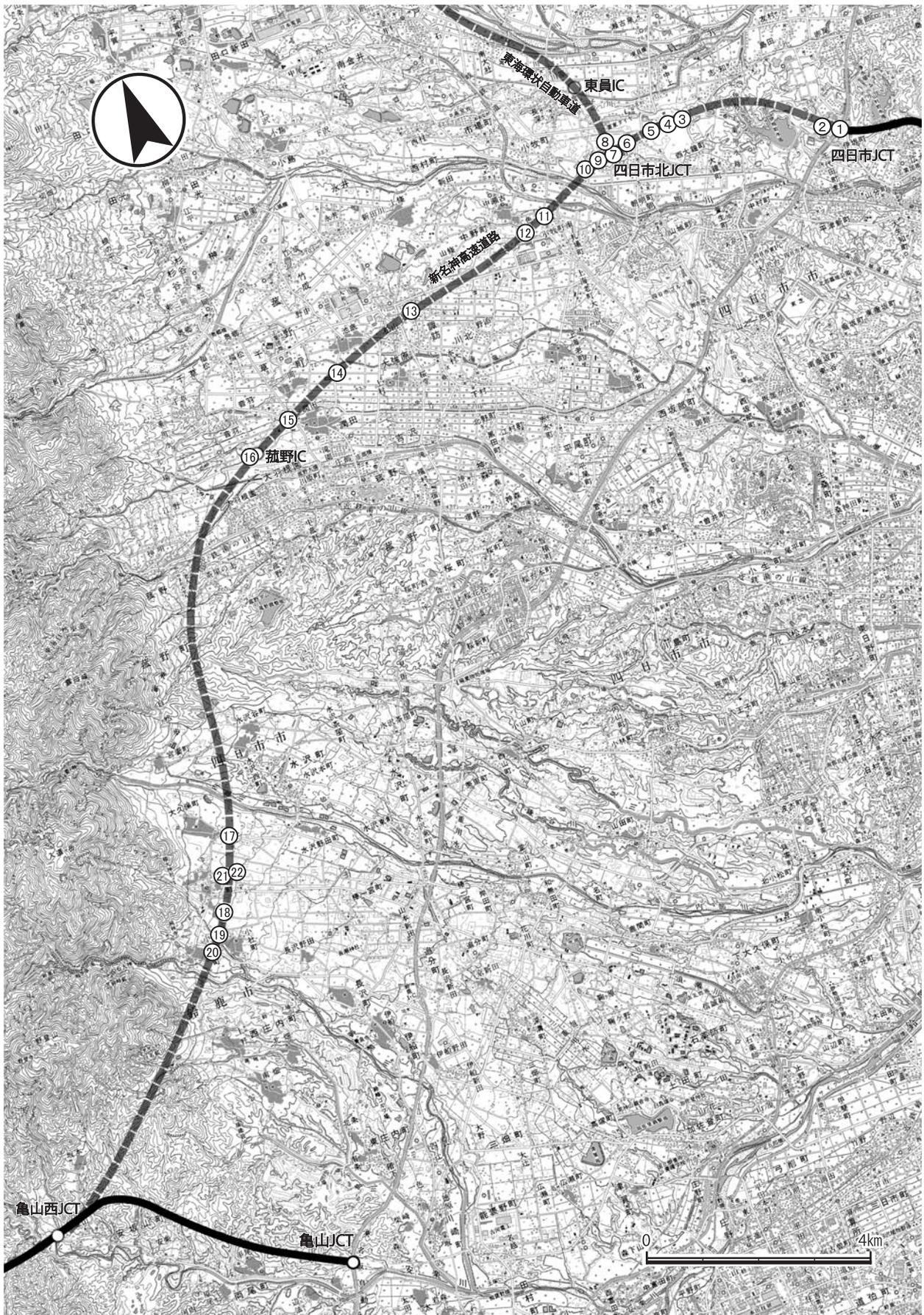
これらの縄張り図は、近世の古城図に基づき、伊坂城跡の主要な曲輪、すなわち主郭や櫓、明瞭な切岸など、地表に遺構が残存する範囲を対象として作成されており、防御施設としての性格が明瞭な範囲を城域として図化したものであった。すでに北勢地域には、保々西城など、複数の屋敷地が密集して土造りの城に付属することが知られていたが、伊坂城が同様の構造をとるとする認識はなかったのである。

その一方で、市史によると、伊坂城外の丘陵端部（旧：古屋敷遺跡）には、正法寺という中世寺院の所在が推測されており、土取り工事の際に古瀬戸の蔵骨器や石塔などが出土したと記されている。こうした墓域または集落部分と伊坂城の主要曲輪との関係が課題となってきた。

②発掘調査（1・2次）の成果

まさにその部分を対象とした発掘調査となったのが、第二名神高速道路の建設事業に伴う伊坂城跡の調査である。平成9年度に事業地内の測量調査、平成11・12年度に第1・2次の発掘調査を行った⁴⁾。その結果、尾根上を縦貫する道路状遺構と、溝や段状の地形で画された17の区画（屋敷地）において、戦国時代から安土桃山時代の掘立柱建物が78棟確認された。

出土遺物は、羽釜や皿などの土師器のほか、瀬戸美濃製品、常滑製品、貿易陶磁、石製品など15世紀末から16世紀前半にかけての遺物が主に出土し



第2図 新名神路線上遺跡位置図 (1 : 100000、遺跡番号は第1表と対応)

第1表 近畿自動車道名古屋神戸線（四日市JCT～亀山西JCT）埋蔵文化財発掘調査経過表

No.	遺跡名	所在地	種別	事業地内面積		平成20年度		平成21年度		平成22年度		遺跡別調査 合計面積	概要
				第1次調査 本調査	第1次調査 本調査	第1次調査 本調査	第1次調査 本調査	第1次調査 本調査	第1次調査 本調査				
1	伊坂遺跡 ・伊坂森跡	四日市市伊坂町	集落跡 ・生産遺構	3,950	42	2,870	42	3,428	平成21年度で調査終了。奈良時代の竪穴と古墳時代の前期の集落跡を確認。				
2	伊坂城跡	四日市市伊坂町	城館跡	25,000	558	4,490	940	5,430	中世の掘立柱建物や区画溝を確認。古墳時代～奈良時代の竪穴住居も確認。 土師器・須恵器等の散布している状況を確認。				
3	北山C遺跡	四日市市西大嶺 町	集落跡	7,500					現況は雑木林。周囲の遺跡の立地、地形、須恵器などが表採されていることなどから、古墳時代以降の遺跡である可能性が高い。				
4	野中遺跡	四日市市北山町	包蔵地	13,000					現況は雑木林。周囲の遺跡の立地、地形、須恵器などが表採されていることなどから、古墳時代以降の遺跡である可能性が高い。				
5	黒土遺跡	四日市市北山町	包蔵地	11,000			580	580	飛鳥～奈良時代の集落跡を確認。				
6	北山A遺跡	四日市市北山町	集落跡	19,000			950	950	飛鳥～奈良時代の集落跡を確認。弥生時代の遺構もわずかに認められる。				
7	中野山遺跡	四日市市北山町	集落跡	51,000			1,530	1,530	古墳9基が確認されている。墳丘の削平された古墳が存在する可能性もあるため、平坦面の調査も必要。				
8	筆ヶ崎古墳群	四日市市小牧町	古墳	23,000			地形測量		土塁、堀切等の施設が良好に残存。				
9	北山城跡	四日市市北山町	城館跡	16,000					確認されている墓の古墳は事業地外だが、周辺に墳丘の削平された古墳が存在する可能性がある。				
10	居林古墳群	四日市市北山町	古墳	—					中世の土師器や陶器類が散布している。地形等からも遺構・遺物が残存する可能性が高い。				
11	小牧南遺跡	四日市市小牧町	包蔵地	15,000					中世の遺物が散布している状況を確認。				
12	中野平古遺跡	四日市市中野町	包蔵地	6,000					古墳の可能性のあるものは1基。墳丘は大部分が削平されている。近世～近代とみられるマンボ（地下式水路）を確認。				
13	野添御坂山古墳	菟野町川北	古墳	1,000					中世～近世の陶磁器片が散布している状況を確認。				
14	椋ノ木遺跡	菟野町池底	散布地	14,000					縄文～中世までの遺物が散布している状況を確認。				
15	大久保遺跡	菟野町潤田	集落跡	11,000					サヌカイトの石鏃、剥片が濃密に散布している状況を確認。近世～近代とみられるマンボ（地下式水路）を確認。				
16	鈴山遺跡	菟野町音羽	散布地	8,000					現況は畑地。石鏃、土師器片が散布する状況を確認。				
17	大松遺跡	鈴鹿市大久保町	包蔵地	2,100					現況は茶畑。中世の土師器、陶器片が散布する状況を確認。				
18	東荒野遺跡	鈴鹿市山本町	包蔵地	4,900					井戸状の遺構（マンボの息抜きもある）や中世の五輪塔を確認。				
19	小社遺跡	鈴鹿市小社町	包蔵地	12,000					中世の土師器・陶器類が散布する状況を確認。				
20	釜垣内遺跡	鈴鹿市小岐須町	包蔵地	30,000					平成22年度分布調査で新規発見。				
21	高ノ瀬遺跡	鈴鹿市山本町	包蔵地	33,600			分布調査		現況は茶畑。中世土器片が散布する状況を確認。				
22	折子遺跡	鈴鹿市山本町	包蔵地	13,500			分布調査		現況は茶畑。中世土器片が散布する状況を確認。				
年度別調査合計面積				320,550	第1次調査 本調査	42	3,060	42	(表中の数値の単位はすべて㎡)				
					本調査	558	940	7,918					
					調査合計	600	4,000	7,960					

ている。とくに当該期の常滑焼としては珍しく片口鉢が一定量出土することで注目され、常滑焼の編年にも一石を投じることとなった。

これらの成果は、通常の低地部の発掘調査では得難い16世紀の集落に関わる知見をもたらしている。このように、伊坂城跡は高い防御性を備えた土造りの城館として注目されるだけでなく、当地域では貴重な中世末期の集落遺跡として重要である。

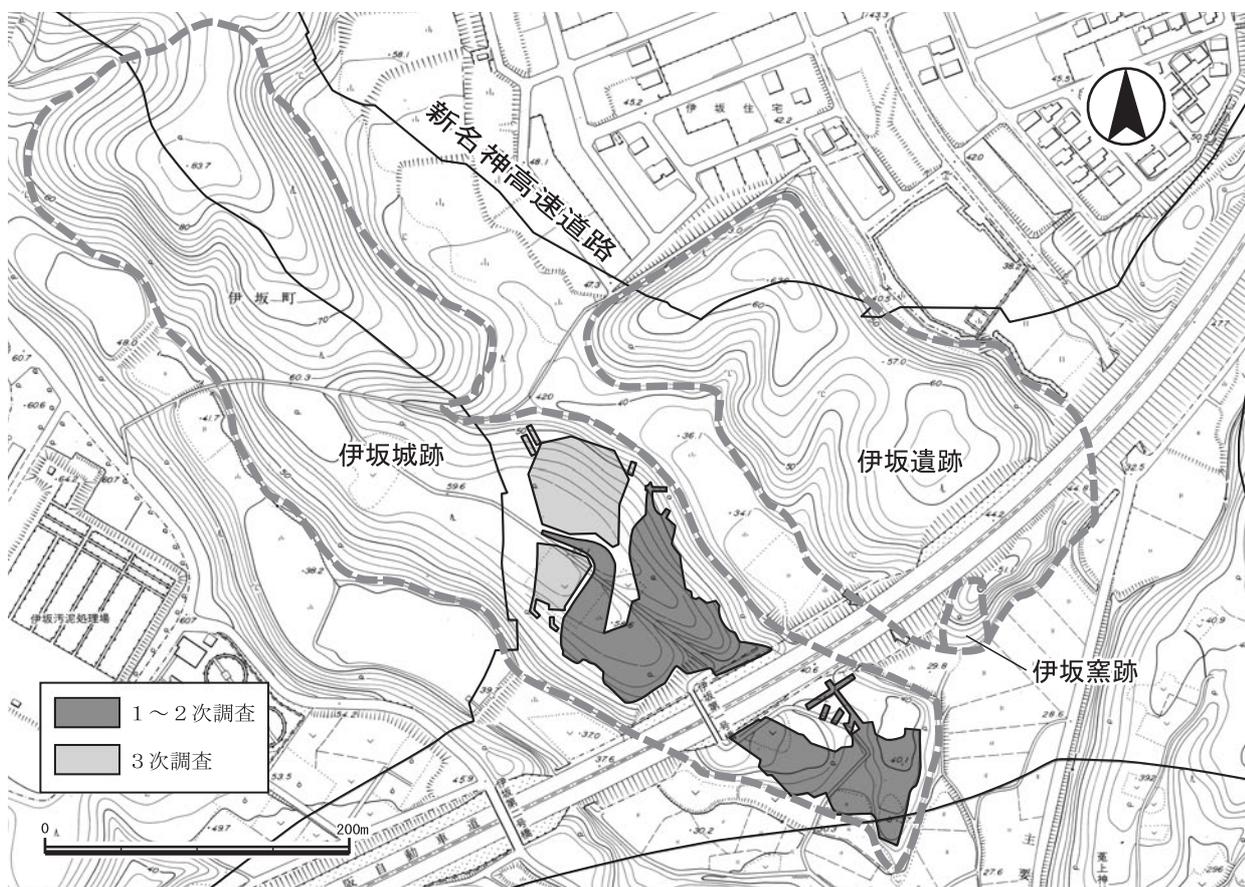
③ 3次調査以降

3次調査は2次調査地の隣接地であり、丘陵の平坦面を対象とする最後の調査となる。平成22年度には、伊坂城の主郭が所在する丘陵北西部の用地買収が進展したことから、この一部の斜面を対象として第4次調査を実施した⁵⁾。当該調査以降、伊坂城主郭周辺の発掘調査が本格化していくことになる。3次調査までの丘陵平坦面における遺構・遺物の様相と、主郭周辺のそれとの比較検討が今後大きな課題となろう。

(櫻井)

註

- 1) 三重県教育委員会『三重の中世城館』1976年。
- 2) 四日市市「伊坂城跡」『四日市市史』第三巻、1993年。
- 3) 伊藤徳也「北伊勢における中世城郭の現況」『研究紀要』第6号、三重県埋蔵文化財センター、1997年ほか。
- 4) 三重県埋蔵文化財センター『伊坂城跡発掘調査報告』2003年。
- 5) 第4次調査の成果については、平成24年度に概報を刊行する予定である。



第3図 既往の調査地位置図 (1 : 5000)

第Ⅱ章 発掘調査の方法

第1節 調査の方法

①調査区の設定

今回の調査地は、主郭から約400m東方にあたる部分で、平成12年度に行われた第2次調査の西側隣接地である。標高は約59m、主郭との比高差は約20mである。調査面積は、合計4,490㎡である。

発掘調査は、道路計画路線内にあたる丘陵平坦面の全面を対象とし、里道を挟んで南北2箇所の調査区を設定して実施した。丘陵斜面には帯郭などの遺構の有無と、切岸の形状を確認するための小トレンチを設定したが、遺構は確認されなかった。

運土の都合上、掘削は北側斜面より開始し、順次南側へと進めた。調査当時は、南側から便宜的にA～C区と名づけ、3分割して調査にあたっているが、本書中では調査地を分断する里道以北をⅠ区、以南をⅡ区と呼称している。

平面直角座標系は1・2次調査との整合をはかるため、日本測地系を採用した。また、調査区内のグリッド分割方法は既往の調査にならい、X=106,500、Y=57,000を原点とした100m四方を大地区とし、その中を4m四方の小地区に分割した(第4図)。その際、東西を1～25、南北をa～yに25分割し、大・小地区とも、北西隅を基点とした地区名を付与した。遺物の取り上げにはこのグリッドを

用いている。

②検出・掘削

表土から遺構面までの堆積土を重機(バックホー)で除去し、遺構検出・掘削は人力で行った。土塁の断ち割りや掘削においては重機を補助的に用いた。

③記録・図化

遺構番号はピットを除き、全てに通し番号を付与した。なお、報告書作成にあたり、遺構番号の加除・訂正を行ったが、原則として調査時の番号をそのまま用いている。ピットの遺構番号は、当センターの調査標準に従い、小地区ごとの通し番号としているが、掘立柱建物を構成するピットについては、別に番号を付与した(例：S B625-P 1)。これらの結果、先に刊行した発掘調査概報とは遺構名称が変わったものがある。

遺構実測は航空写真測量と調査員による手測りを併用した。個別の遺構平面図・断面図は原則1/20で作成し、適宜その他の縮尺を適用した。

遺構写真は4×5in判の白黒ネガ・カラーリバーサルで撮影し、補助的に35mm判やデジタルカメラを用いた。また、遺物撮影にはブローニー判・デジタルカメラを用いた。

(櫻井)

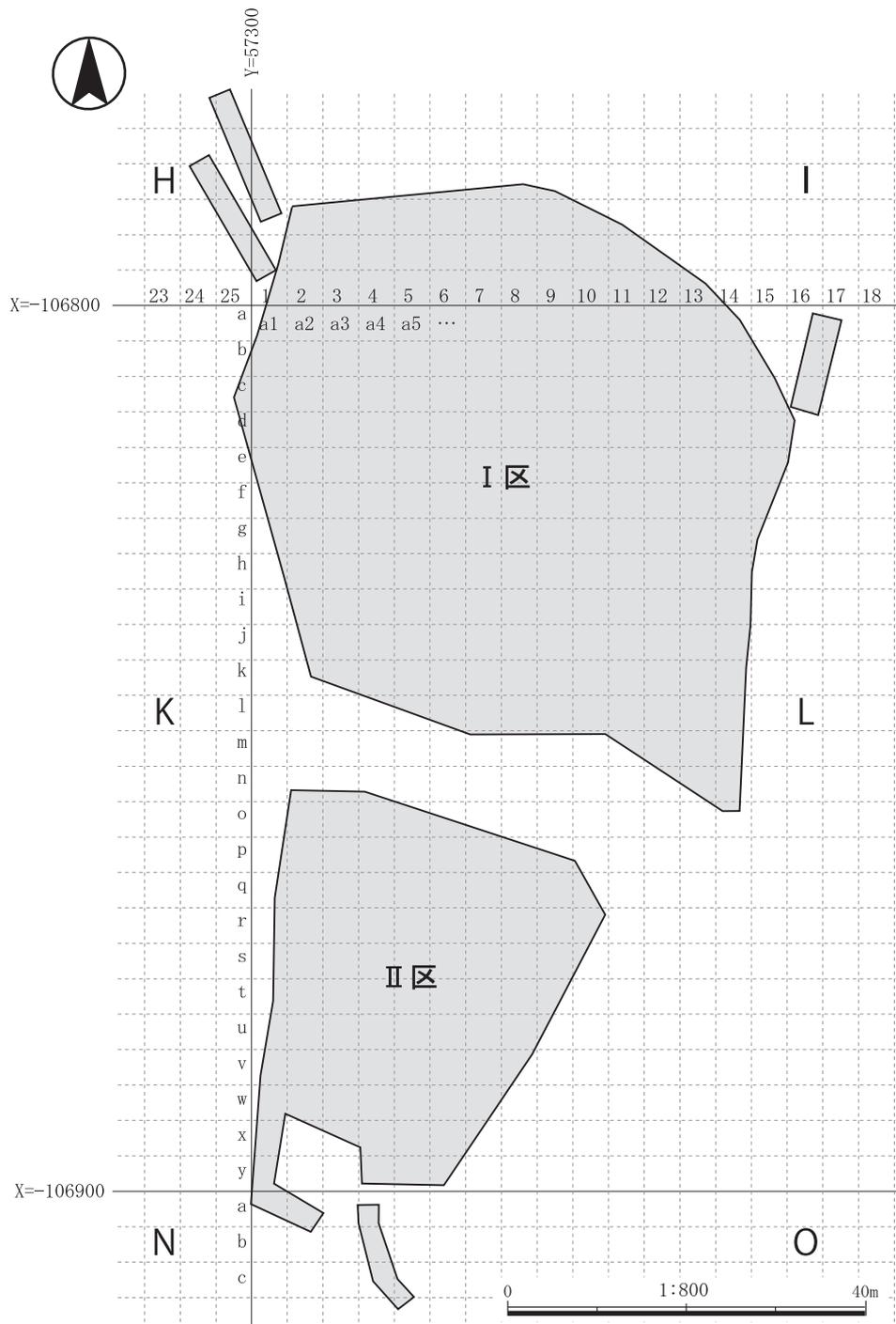
第2節 調査の経過

調査期間は、平成21年7月19日～平成22年1月29日である。以下に調査日誌(抄)を記す。

・平成21年

7月19日 調査準備開始
8月17日 Ⅰ区事前測量
24日 Ⅰ区調査前写真撮影
26日 Ⅰ区範囲確認トレンチ掘削
27日 Ⅰ区北側斜面の表土掘削開始
9月3日 範囲確認トレンチ調査
Ⅰ区北側表土掘削終了
8日 土塁(S A501)の断ち割り

10日 Ⅰ区北側遺構検出
14日 S A501の下層遺構を確認
16日 空測、写真撮影
17日 Ⅰ区南側の調査区設定
29日 S A501除去、Ⅰ区南側表土掘削
10月1日 表土掘削と併行し遺構検出
7～8日 台風18号襲来。北側斜面が崩壊する
9日 復旧作業
13日 遺構掘削が本格化
11月5日 Ⅰ区南側の空撮・測量
6日 Ⅰ区の補足調査



第4図 調査区グリッド図 (1 : 800)

- 24日 II 区の調査区設定
調査前写真撮影
- 30日 II 区範囲確認トレンチ掘削
- 12月 1日 II 区の表土掘削開始
- 6日 II 区北側の旧里道を掘り下げる
- 7日 II 区遺構検出
- 8日 II 区遺構掘削開始
- 18日 II 区の空撮・測量
- 22日 II 区の補足調査
- 28日 年内の作業終了

・平成22年

- 1月 4日 補足調査終了
- 5日 資機材撤去
- 29日 現地引渡し、調査完了

③普及公開活動

現地調査終了後、発掘調査成果の周知を図るため、発掘調査成果説明会や発掘調査ニュースの刊行等の普及公開活動を行った。

・発掘調査成果説明会

平成22年 3月 7日

於：四日市市八郷地区市民センター

・刊行物

発掘調査ニュース「新あさけのいにしへ」No.1、平成22年 3月

『埋蔵文化財発掘調査概報 I 伊坂窯跡・伊坂遺跡（第5次）・伊坂城跡（第3次）』平成22年 7月

(岩脇)

第3節 文化財保護法等にかかる諸通知

本発掘調査に伴う法規上の手続きは以下の通りである。

①文化財保護法第94条に基づく三重県文化財保護条例第48条第1項（土木工事等のための発掘に関する通知）

・平成21年 5月15日付、中高名支四工第213号（県教育長あて中日本高速道路株式会社名古屋支社四日市工事事務所長通知）

②文化財保護法第99条第1項（発掘調査の着手報

告）

・平成21年 7月30日付、教埋第171号（県教育長あて三重県埋蔵文化財センター所長報告）

③文化財保護法第100条第2項（文化財の発見・認定通知）

・平成22年 2月22日付、教委第12-4414号（四日市北警察署長あて県教育長通知）

第4節 調査地の微地形と基本層序

①調査地の微地形

当地は調査前、畑地や果樹園として利用されており、伊坂城主郭周辺に比べて平坦な地形が広がっていた。調査地全域のエレベーション図を示す（第5図）。

I区・II区ともに丘陵上はほぼ平坦で、わずかに土塁や里道の痕跡が起伏を加えているに過ぎない。丘陵頂部と周辺低地の高低差は約20mである。丘陵斜面の傾斜は、北側で約30°、南側で約20°を測る。

②基本層序（第6～9図）

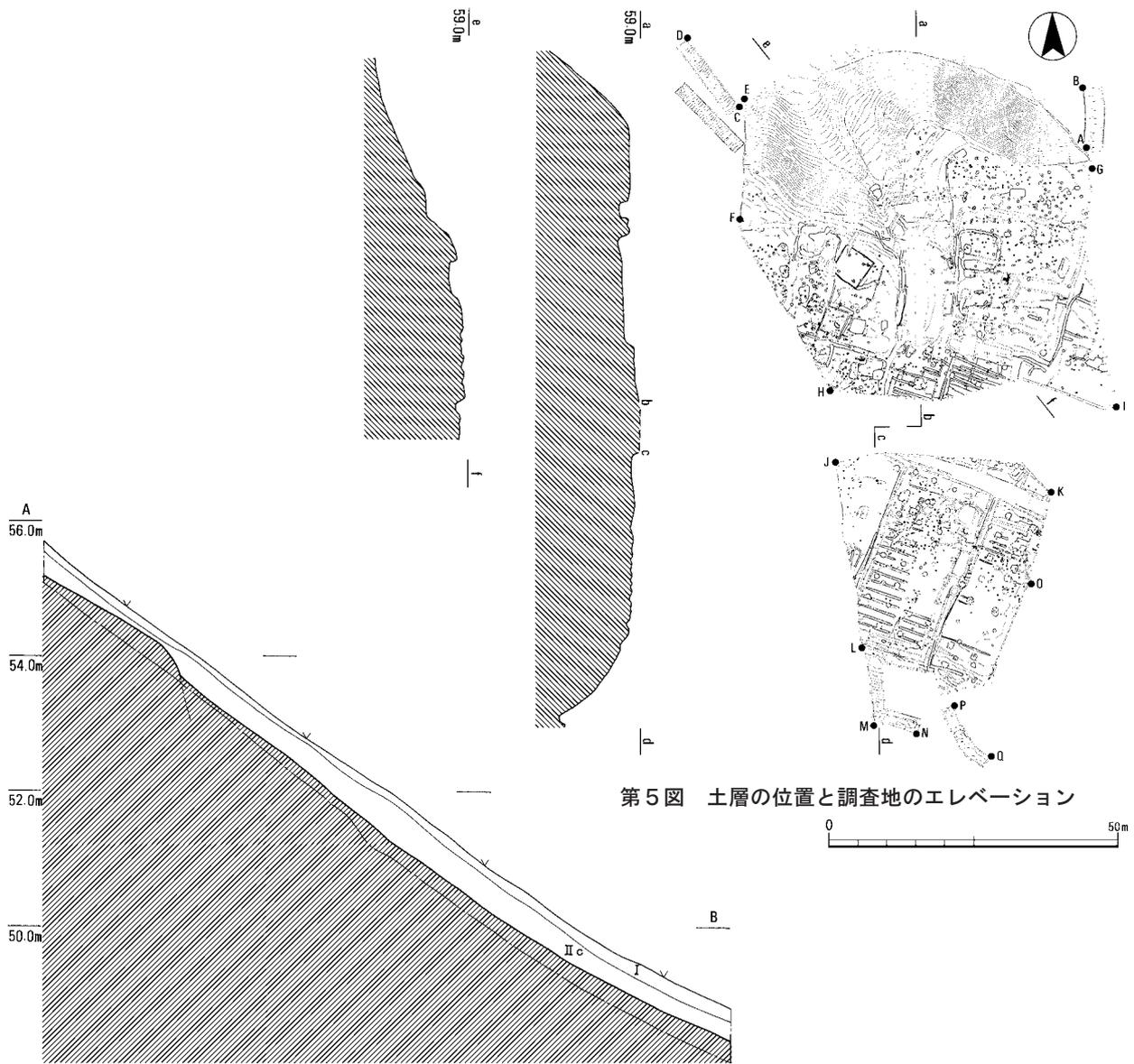
層序は現代耕作土または腐葉土（I層）の下に、旧耕土や遺物包含層（II層）がみられ、現地表下約50cmで当地の地山（黄褐色～赤褐色粘質土）に達

する。北勢地方の丘陵は、奄芸層群とよばれる淡水性の湖底堆積物で構成されているが、これは第三紀における東海湖の形成に伴うものである。地山の赤褐色粘土層や砂礫層には、花崗岩の風化によって生じた微細な長石粒を多く含んでいる。

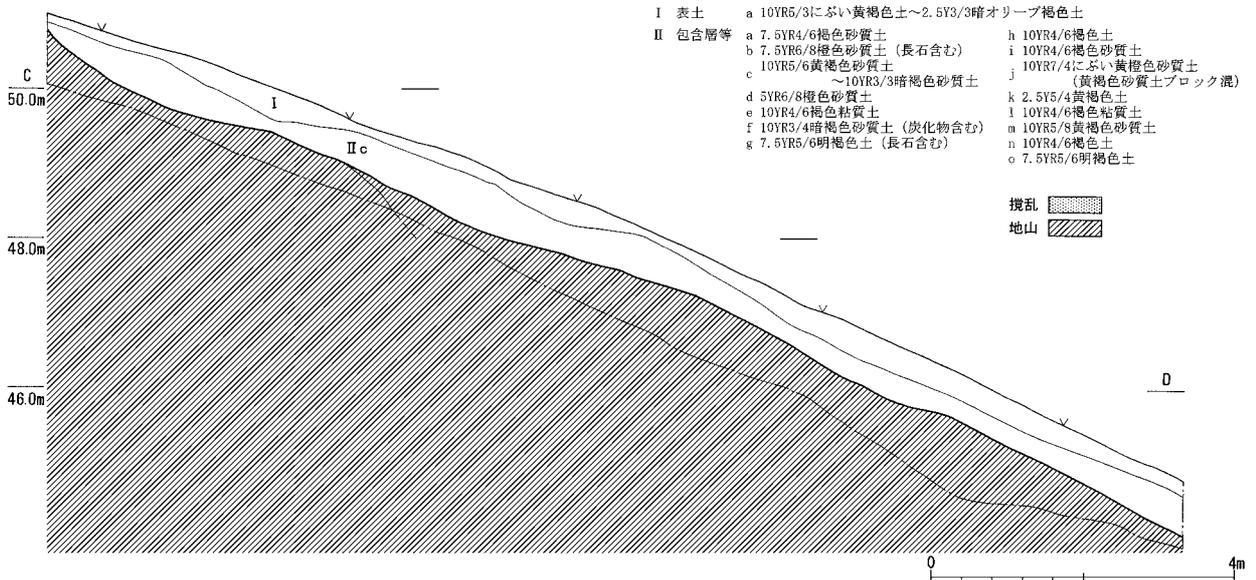
遺構面までの深度は、I区で20～30cm、II区で最深50～60cmを測る。I区ではほぼ表土直下で遺構が検出できるが、II区では表土下に旧耕土や遺物包含層がみられる。これは中世以降、当地で畑作が連続と続いたためのもので、中世の遺構は大きく削平を受けていた。

いずれの調査区においても、古墳時代から中世の遺構は、すべて地山上で検出した。

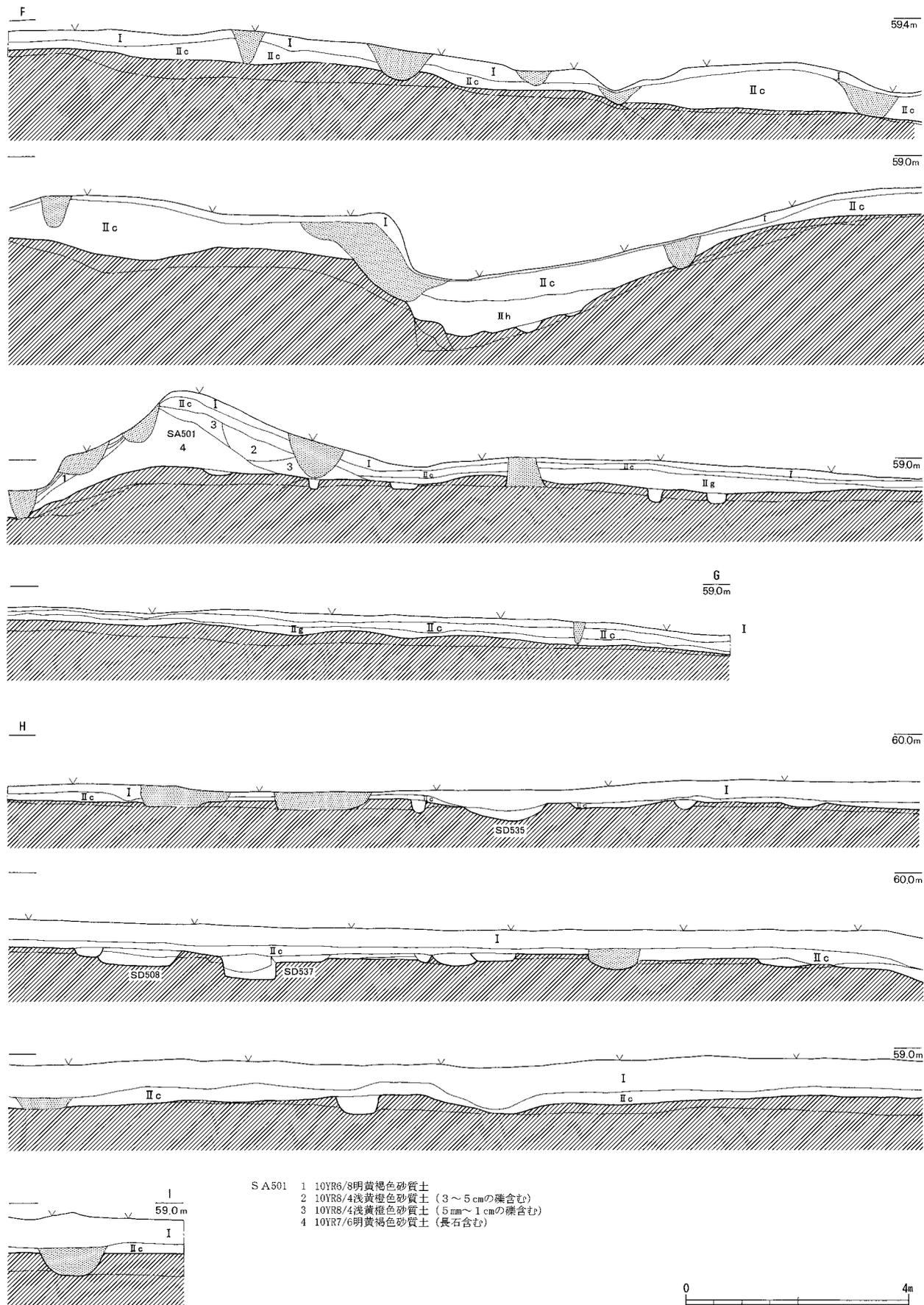
(櫻井)



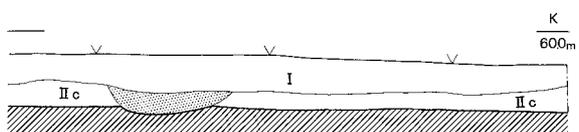
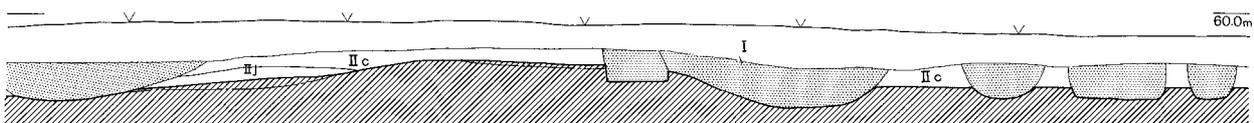
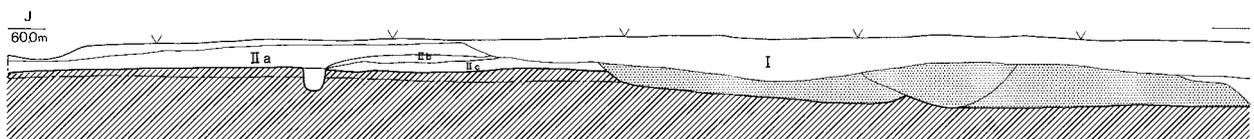
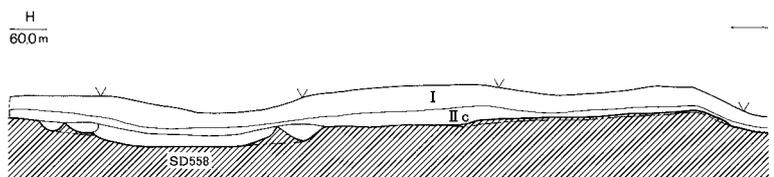
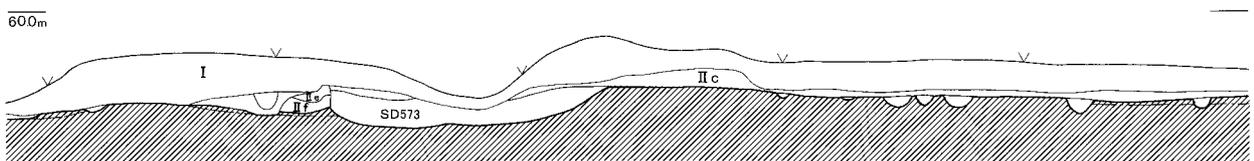
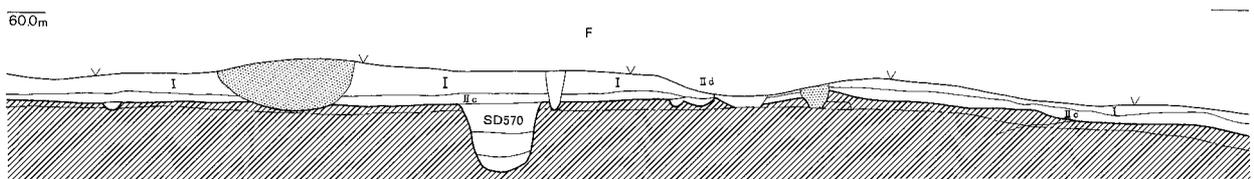
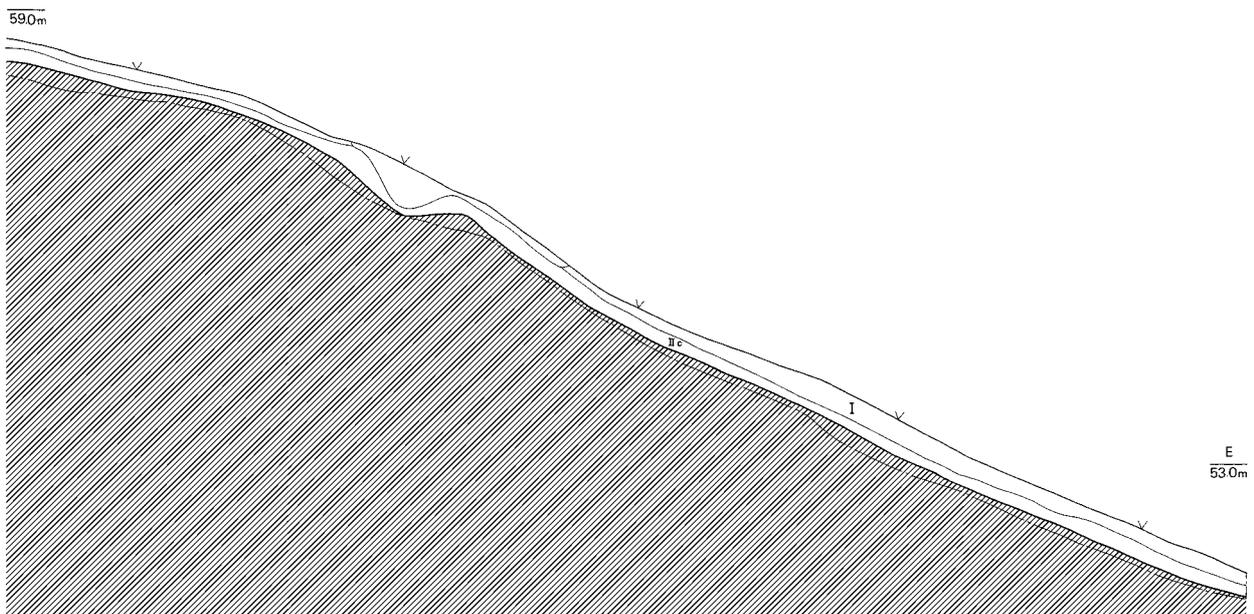
第5図 土層の位置と調査地のエレベーション



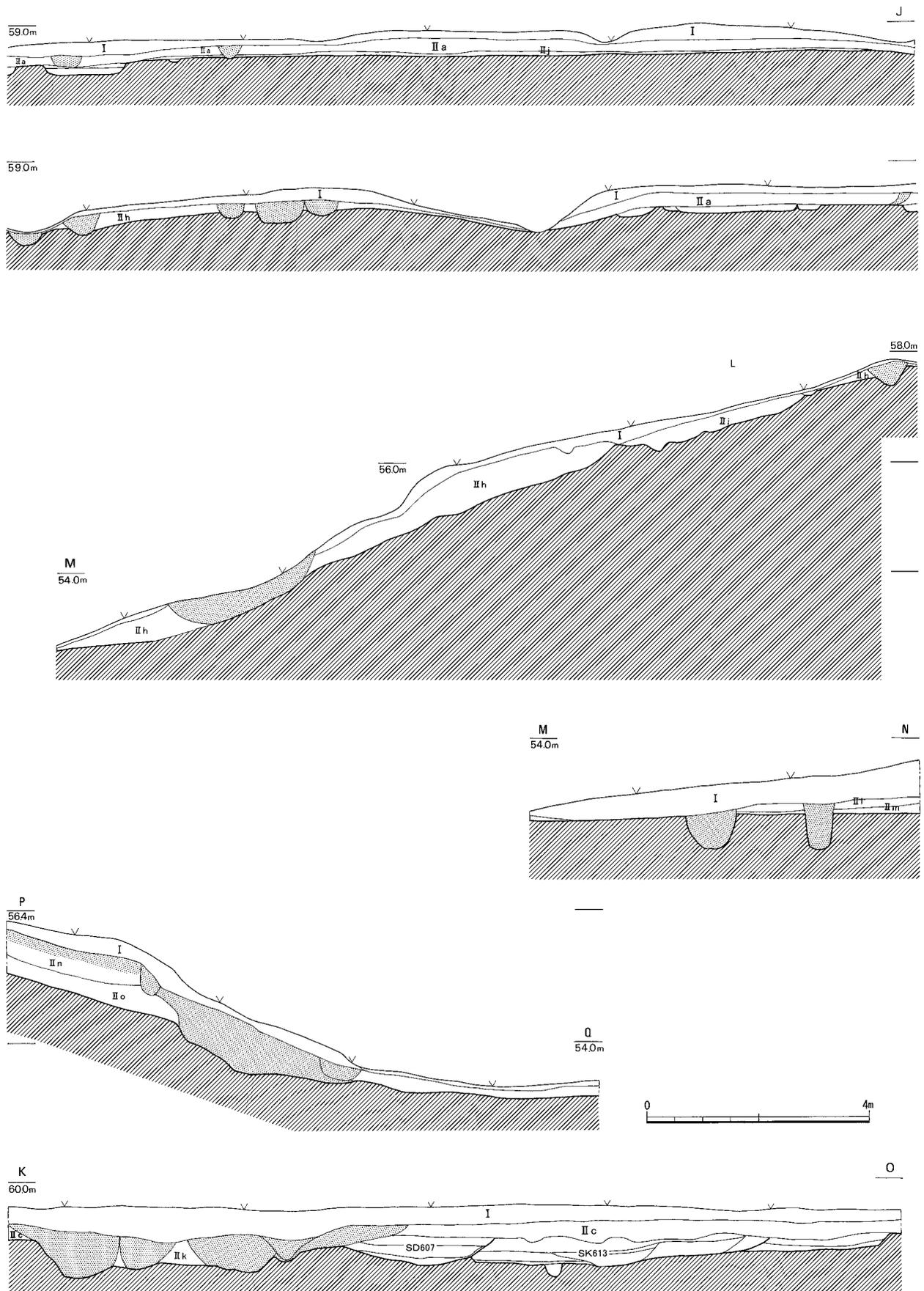
第6図 土層図① (1:100)



第7図 土層図② (1:100)



第8図 土層図③ (1:100)



第9图 土层图④ (1:100)

第三章 遺構

第1節 検出遺構の概要

今回の調査においては、古墳時代から戦国（安土桃山）時代に至る各時代の遺構を多数検出した。

主な遺構は古墳時代前期・後期と戦国時代のものである。古代や鎌倉期の遺物も散見されるが、確実に当該期のものと判断できる遺構はない。唯一、I区北側のS B624は、規模や柱穴の配置などから古代の総柱建物の可能性があるものの、埋土から中世の土器が得られているという調査時の所見に従い、中世の建物とした。

なお、近世の遺構については特筆すべきものがなく、遺物の量も希薄であったので、すべて攪乱として処理している。また、II区では畑作に伴う素掘溝が多数検出されたが、遺構の切り合い関係や断面観察の結果、明らかに中世の遺構よりも後の所産であると判断されたため、これも攪乱（近世～近代の耕作跡）として処理し、本書では取り上げていない。

（櫻井）

第2節 古代以前（古墳時代～古代）の遺構

古墳時代の竪穴住居4棟、土坑2基、溝数条を検出した。当該期の遺構は、I区の西側に散在しており、調査区全体に均一に分布しているわけではない。本遺跡の北側に位置する伊坂遺跡でも、古墳時代前期の住居がわずかにみられ、同様の単位集団ごとの分散的な居住パターンを示していると考えられる。

①竪穴住居（第13図、写真図版6・7）

・S H546

東西4.4m、南北5.0m、床面積22.0㎡の方形プランで、南側に竈を伴う。壁周溝の切り合いから、S H586より後出する遺構である。埋土から6～7世紀の土師器甕、須恵器杯・鉢・長頸壺・甕が出土したほか、S H586からの混入遺物（古墳時代前期）がみられた。

建物の南側には竈S K574を伴う。竈の両袖は地山を削り出している。

・S H586

東西8.0m×南北4.7mの長方形プランの竪穴住居と推定される。ただし、S H546と重複するため、南西隅の壁周溝は確認できなかった。東西の幅が広いことから、あるいは2棟の正方形の竪穴住居が重複している可能性もあろう。埋土から古墳時代前期の土師器甕・高杯・壺などが出土した。

・S H579

I区西側で検出した東西6.0m×南北5.9m、床

面積35.4㎡の正方形プランをとる竪穴住居である。壁周溝・支柱穴4基を検出した。埋土から土師器甕、須恵器小片などが出土した。

・S H584

I区中央付近で検出した南北6.2mの方形プランの竪穴住居である。S D575によって西側の大半を失うが、壁周溝の一部と支柱穴2基を検出した。遺物は出土していない。

②土坑（第13図）

・S K549

I区南西隅に位置する長辺1.7m、短辺1.4m、深さ10cmの長方形の土坑である。土師器甕片、鉄滓が出土した。

・S K569

S H586の西側に位置する不整形の土坑で、長辺3.0m×短辺2.0m、深さ10cmを測る。古墳時代の土師器、須恵器高杯の脚部片等が出土した。

③溝

・S D616

II区で検出した浅い溝で、土師器壺片が出土した。

・S D577・S D580（第28図）

ともにS H579周辺にある細い溝で、幅約30cm、深さ10～20cmを測る。土師器・須恵器片がわずかに出土した。

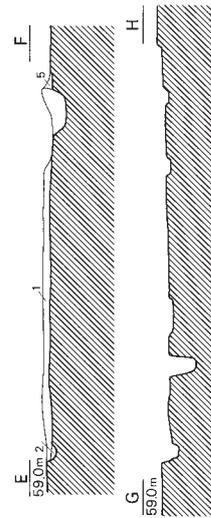
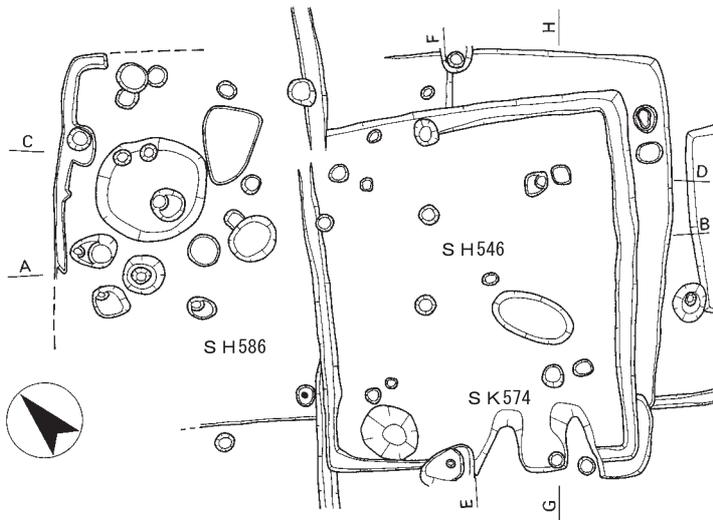
（東谷）



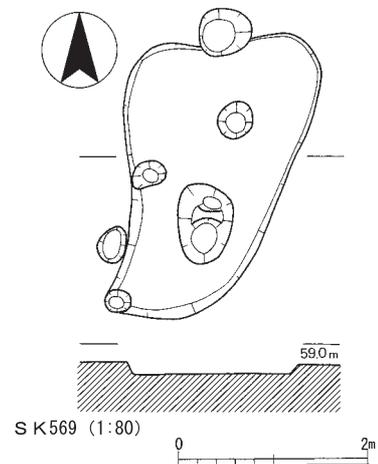
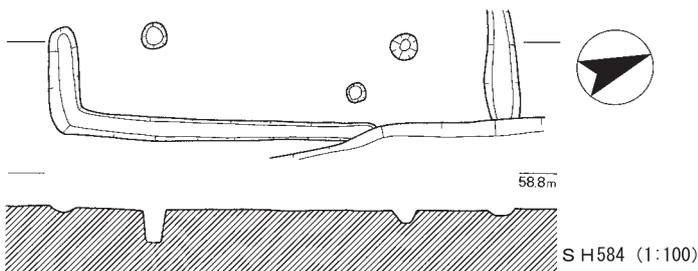
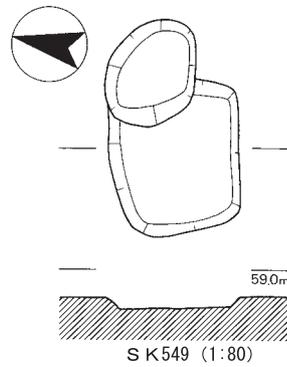
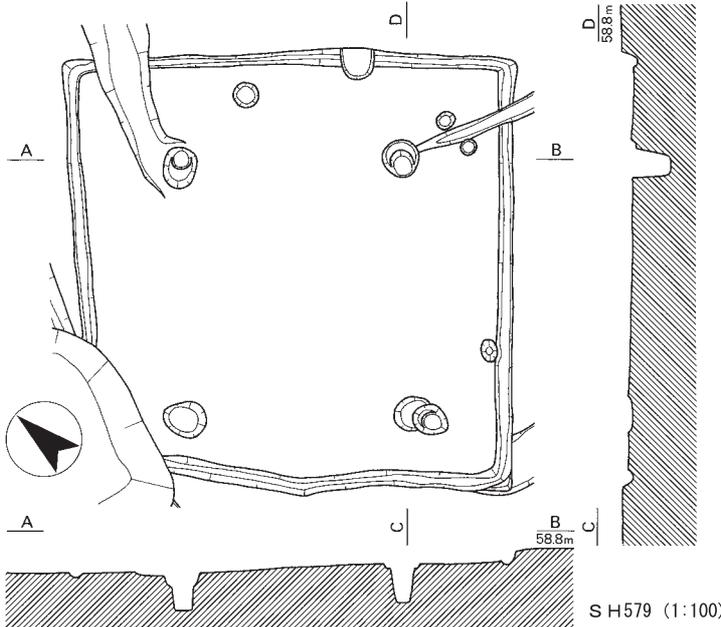
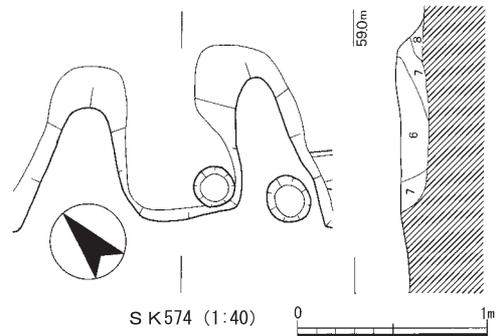
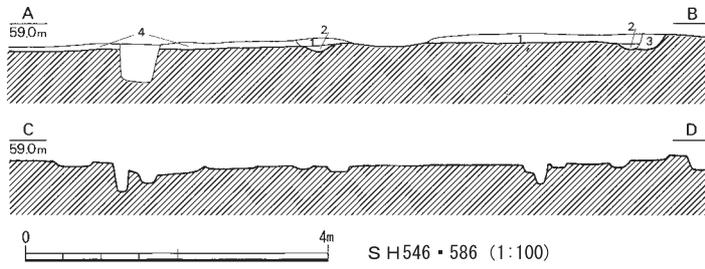
第10図 遺構全体図 (1 : 400)



第12图 II区遺構平面圖 (1:200)



- 1 10YR6/3にぶい黄橙色土
- 2 2.5Y3/2黒褐色粘質土
- 3 2.5Y6/4にぶい黄褐色粘質土
- 4 7.5YR6/3にぶい褐色土 (炭化物含む)
- 5 2.5Y4/2暗灰黄色土 (炭化物含む)
- 6 7.5YR4/3褐色土 (炭化物含む)
- 7 10YR3/4暗褐色土 (炭化物含む)
- 8 2.5Y4/3オリブ褐色土



第13図 古墳時代～古代の遺構

第3節 中世の遺構

古代以前と異なり、中世の遺構は濃密な分布を示している。ほとんどが瀬戸美濃藤澤編年の古瀬戸Ⅳ～大窯2期までを中心とする時期のものであることから、いずれも中世の伊坂城に関連する遺構であると考えられる。

さて、第1・2次調査の結果、丘陵尾根の平坦面には、土塁や溝、段状の地形などで区画された屋敷地が多数所在することが判明している。本調査地でもこのような区画が複数確認され、屋敷地が広がっていることが知られるのであるが、区画の中には、やや規模が小さく屋敷地とは別の性格が考えられるものや、前回付与した区画と重複するものがある。こうしたことから、本次調査では区画名にアルファベットを用い、前回調査の区画名とは区別することにした（区画A～D）。

I区北側は谷地形から丘陵上の平坦面へと上る登り口があり、その先に道状遺構（SD575）と土塁（SA501）によって構成される虎口がある。遺構は、この周辺に広がる屋敷地に形成されている。

①掘立柱建物・柵（第14～21図）

掘立柱建物14棟、柵7条を確認した。

建物・柵の主軸は、東西にのびる丘陵の地形に即した東西・南北方向（SB625・630・631など）を志向するものが多く、やや軸を振るものもある（SB626など）。

・SB624（第14図）

I区北東で検出した3×3間の総柱建物である。建物主軸はN-30°-Eで、柱間寸法は4尺相当。建物の規模や柱穴の配置は古代の建物を思わせるが、柱穴から中世の羽釜・土師器片が出土していることから当該期の建物とした。SD567に先行する遺構である。

・SB625（第14図）

SB624と重複する、梁間3×桁行6間の総柱建物である。N-78°-Wに主軸をとる東西棟で、柱間寸法は4尺または6尺相当。建物の南東隅に方形の土坑（SK517）があり、屋内土坑であろう。規模・構造などから主屋であるとみられるが、周囲の区画溝とは方位や位置が調和しない。SD567より後出

の遺構である。

出土遺物は、P1から瀬戸播鉢や砥石・石臼片などの石製品がまとまって出土した。

・SB626（第15図）

I区北東に位置し、SB625と重複する建物である。2×3間の建物で、主軸はN-17°-Wと、やや軸が他の建物と異なる。柱間寸法は6尺または7尺である。P1から常滑鉢の底部片が出土した。

・SB627（第15図）

土塁SA501除去後に確認した、2×2間の小規模な建物である。主軸はN-13°-Eで、柱間寸法は7尺相当。P1より常滑壺が出土した。土塁に先行し、区画（屋敷地）の変遷を知る上で重要な遺構である。

・SB628（第15図）

I区の中央に位置する2×3間の建物である。主軸をN-26°-Eにとり、柱間寸法は6尺または7尺を測る。P1から常滑壺が出土した。

・SB629（第16図）

I区西端で確認した3×3間の建物である。東側に庇を有する。主軸はN-52°-Wで、柱間寸法は6尺相当である。

・SB631（第16図）

I区の南西に位置する3×3間の建物である。西側に庇がとりつく。主軸はN-62°Wの東西棟で、柱間寸法は6尺、庇は4尺を測る。方形土坑SK551は、この建物に伴う遺構である可能性もある。

・SB656（第16図）

I区北西に位置する桁行3間以上の建物または柵である。主軸をN-29°-Eにとる。柱間寸法は6尺相当である。

・SB630（第17図）

I区南側、SB631の北に位置する3×4間の建物である。主軸をN-65°-Wにとる東西棟で、柱間寸法は6尺または7尺を測る。関連施設として、建物南東外に方形の土坑SK554がある。SK554を囲む柱穴の並びは建物のそれと合致しておらず、本土坑は屋内土坑というより、SB630に付属する小屋などであろう。

S B630は、規模が比較的大きく、屋内土坑を伴うことから主屋的な性格が想定でき、周辺の区画溝の主軸や位置ともよく合致している。

・ S A636 (第17図)

I区南東端に位置するL字状の柵である。建物の可能性もあるが、柱間寸法が一定でないことから柵に含めた。主軸はN-36°-E、調査区内で延長7.1mを測る。

・ S B632 (第18図)

I区南側、S B631東隣に位置する2×4間の建物。主軸はN-61°-W(東西棟)、柱間寸法は5尺または6尺で、東側の間だけ柱間が広い。SK513・SK514は本建物の付属施設の可能性がある。

・ S B633 (第18図)

S B632と重複する3×3間以上の建物である。北側に庇がとりつく。主軸をN-61°-Wにとる東西棟で、柱間寸法は5尺または6尺を測る。当建物はSD575の掘削に先行する建物であり、屋敷地の変遷を考える上で重要な建物である。

・ S A637 (第18図)

S B625に重複する柵もしくは建物で、延長11.8mを測る。主軸はN-77°-Wで、S B625とよく合致する。

・ S B634 (第19図)

II区の北側に位置する梁間2間×桁行4間の建物である。主軸はN-31°-Eで、柱間寸法は6～8尺を測る。

・ S B635 (第19図)

S B634と重複する2×4間の建物である。主軸がN-68°-Wの東西棟で、柱間寸法は6尺または7尺を測る。

・ S B643 (第19図)

S B634・635と重複する。S B635の建替え建物か。主軸はN-68°-Wの東西棟である。

・ S A638 (第20図)

I区の北端に位置し、曲輪の外縁に沿ってコの字形にめぐる柵である。主軸をN-65°-Wの東西にとり、SD567との関連をうかがわせる。柱間寸法は、8尺相当である。土塁S A501に先行する遺構であり注目される。

・ S A639・640 (第20図)

SD529の内側に位置する柵で、主軸をN-25°-Wにとる。南北方向の2条の柵としたが、あるいは複数の建物に復元できるかもしれない。

・ S A641・642 (第21図)

S B630・631と重複し、鉤形に屈折する柵である。主軸はN-28°-Eで、柱間寸法は一定でなくバラつきがある。

(櫻井)

②土坑(第22～27図)

遺構の形状や出土遺物の内容から、大きく3分し記述する。

a: 方形土坑(第22図、写真図版11)

規模が比較的大きく、平面形が方形を呈する土坑である。掘立柱建物の屋内土坑とは異なり、建物から独立しているものが多く、柱穴や壁周溝を伴うとみられるものがある。1・2次調査では方形の土坑の四隅に柱穴を伴っており、これらも同様のものであると推測される。東日本に類例が集中する方形竪穴建物のような小規模な建物・施設を含んでいる可能性があるだろう。

・ S K528

I区の南東で検出した長さ2.7m、幅2.3mの長方形の土坑である。深さ45cmを測る。

・ S K551

I区の南側で検出した、長さ4.6m、幅3.3mの長方形の土坑である。深さ20cmを測る。長軸方向に2間分の柱穴が確認できるが、S B631に伴うものであるかもしれない。また、遺構の外縁には、竪穴住居の壁周溝のような溝がみられ、壁に板を立てていた可能性がある。瀬戸美濃天目茶碗等が出土した。

・ S K593

II区の東側で検出した、長さ2.8m以上、幅2.2mの隅丸方形の土坑である。深さ40cmを測る。埋土から、常滑甕・瀬戸美濃播鉢が出土した。

・ S K612

II区の北側で検出した、長さ3.6m、幅3.4mの長方形の土坑である。深さ30cmを測る。瀬戸美濃播鉢や常滑甕、天目茶碗を転用した加工円盤などが出土している。

・ S K617

II 区の北側で検出した、長辺3.0m、短辺2.2mの長方形の土坑である。深さ10cmを測る。長軸上に3つの柱穴が確認されたことから、簡易な小屋などの可能性があろう。埋土から土師器の羽釜などが出土した。

(鈴木)

b：集石土坑（第23図、写真図版12）

礫や石塔の残欠がまとまって出土したものを集石土坑とした。土壙墓や墳墓等の下部施設であると推測されるが、個々の遺構の性格は明らかにしがたい。

I 区で2基、II 区で3基を検出した。

・ S K 520

長辺2.0m、短辺1.6m、深さ30cmの土坑である。I 区の西側で検出した。切り合い関係は S D 582→ S K 585→ S K 520 の順である。10～30cm程の礫が多く出土したほか、土師器皿が出土した。

・ S K 553

I 区の西側で検出した長辺1.7m、短辺1.4m、深さ40cmの土坑である。S K 551と重複し、切り合い関係から本遺構の方が新しい。10～30cm程の礫が半円状に組まれていた。埋土から天目茶碗、石臼が出土した。

・ S K 603

II 区の中央で検出した長辺1.5m、短辺1.3m、深さ40cmの土坑である。10～30cm程の礫が集中しみられた。土師器皿、瀬戸美濃播鉢、青磁碗などが出土した。

・ S K 613

II 区の東端で検出した大型の浅い土坑である。南側で列状に積まれた礫が確認された。土坑の一部が調査区外にあるため、全体の大きさなどは不明であるが、第2次調査で検出された道路遺構の延長部分である可能性がある。常滑甕や羽釜片等が出土した。

本土坑のすぐ北隣の S X 655でも集石が検出されたが、これとは明らかに異なる積み方をしている。

・ S K 622

II 区の中央で検出した長辺0.9m、短辺0.8m、深さ30cmの土坑である。埋土から礫とともに、五輪塔の火輪2基が出土した。

(東谷)

C：その他の土坑（第24～27図）

・ S K 502（第24図、写真図版13）

I 区北東、S A 501下層で検出した長さ2.1m、幅1.3m、深さ26cmの長方形の土坑である。形状や大きさなどから土壙墓の可能性があろう。完形に近い瀬戸美濃皿が裏返しで出土した。

・ S K 513（第24図）

長辺2.2m、短辺1.6m、深さ20cmの長方形の土坑。I 区南側で検出した。S K 514と重複し、切り合い関係から S K 514の方が新しい。瀬戸美濃播鉢、土師器片等が出土した。

・ S K 514（第24図）

長辺2.6m、短辺2.2m、深さ28cmの土坑である。I 地区南側で検出した。S K 513と重複し、切り合い関係は前述の通りである。土師器、羽釜の小片が出土した。

・ S K 515

I 区東側で検出した幅0.8～2.0m、長さ2.0m、深さ8cmの南北に細長くのびる土坑で、南端部分でやや東向きに屈曲する。本遺構は土坑に含めているが、区画Bを構成する S D 529の延長部分の可能性もある。埋土から天目茶碗が出土した。

・ S K 517（第14図、写真図版10）

S B 625の南東隅に位置する方形の土坑である。一辺約3.3m、深さは最大で40cmを測る。埋土から羽釜片等が出土した。

・ S K 519（第24図）

I 区北東で検出した長辺2.8m、短辺2.0m、深さ12cmの長方形の土坑である。土師器皿が出土した。

・ S K 523

I 区東南で検出した長辺1.4m、短辺90cm、深さ30cmの楕円形の土坑。鉄釘が出土した。

・ S K 524（第24図）

I 区中央で検出した長辺90cm、短辺70cm、深さ30cmの土坑である。S K 525、S K 526、S D 538と重複し、切り合い関係は S D 538→ S K 526→ S K 524 の順、また S K 525→ S K 524 の順である。羽釜が出土した。

・ S K 525（第24図）

一辺0.4mの方形の土坑である。I 区中央で検出した。S K 524、S K 526と重複する。土師器皿が出土した。

・ S K 526 (第24図)

I区中央で検出した、長辺1.9m、短辺1.2m、深さ3cmの土坑である。S K 524、S K 525、S D 538と重複する。常滑甕、土師器片等が出土した。

・ S K 527 (第24図、写真図版13)

I区東側で検出した、長辺1.8m、短辺0.8m、深さ22cmの楕円形土坑である。土師器皿、羽釜、常滑壺・鉢などが出土した。このうち土師器皿の出土量が他の遺構に比べて多く、やや特殊な性格が想定される。

・ S K 531 (第24図、写真図版13)

長辺1.9m、短辺0.9m、深さ10cmの楕円形の土坑である。I区中央で検出した。S D 532→S K 531の順に切り合う。土師器皿、天目茶碗が出土した。

・ S K 533 (第24図、写真図版13)

長辺1.9m、短辺1.6m、深さ46cmの方形の土坑である。I区中央で検出し、S K 534→S K 533の順に切り合う。土師器皿、羽釜、常滑甕・鉢が出土した。

・ S K 534 (第24図)

I区中央、S B 628の西隣で検出した、楕円状に細長くのびる土坑で、深さ14cmを測る。北側をS K 533に切られている。土師器皿が出土した。

・ S K 539 (第25図、写真図版14)

長辺1.6m、短辺0.9m、深さ20cmの土坑である。I区南東、S D 529の底面で検出した。常滑鉢・甕、羽釜が出土した。

・ S K 542 (第25図)

I区中央で検出した長辺1.3m、短辺0.9m、深さ8cmの土坑である。羽釜が出土した。

・ S K 548 (第25図)

I区西北で検出した、長辺3.2m、短辺2.0m、深さ12cmの不整形の土坑である。羽釜、常滑甕片が出土した。

・ S K 550 (第25図、写真図版14)

長辺1.1m、短辺0.6m、深さ20cmの楕円形の土坑である。遺物実測図は示していないが、埋土中には被熱した花崗岩礫(金床石か)や鉄片、鉄塊系遺物(成形中の鉄釘か)が付着したサス入りの焼土塊(写真図版25)が含まれており、炉壁を伴う鍛冶関連遺構であるとみられる。

・ S K 552 (第25図)

I区南西で検出し、長辺2.0m、短辺1.9m、深さ15cmの土坑である。S K 551と重複し、S K 552の方が新しい。その位置から、S B 631に関連する可能性もある。羽釜、瀬戸美濃灰釉皿、染付皿が出土した。

・ S K 554 (第17図、写真図版10)

S B 630の南東隅に位置する一辺約2.5m、深さ15cmの方形土坑である。埋土から常滑甕・片口鉢がまとまって出土した。

・ S K 560 (第25図)

長辺3.6m、短辺3.0m、深さ20cmの不整形の土坑である。I区西側で検出した。羽釜、瀬戸美濃播鉢、平瓦が出土した。

・ S K 563 (第25図、写真図版14)

長辺3.1m、短辺2.0m、深さ34cmの長方形の土坑である。I区西側で検出した。瀬戸美濃皿等が出土した。

・ S K 564 (第25図)

長辺2.8m、短辺1.1m、深さ22cmの楕円形の土坑である。I区南西で検出した。瀬戸美濃香炉等が出土した。

・ S K 566 (第25図)

長辺2.0m、短辺1.4m、深さ43cmの土坑である。I区中央で検出し、S B 628の柱穴と重複する。切り合い関係から、S K 566→S B 628の順に掘削されている。加工円盤が出土した。

・ S K 581 (第26図)

長辺1.8m、短辺1.3m、深さ30cmの長方形の土坑である。I区中央で検出し、S D 538と切り合っている。S K 581の方が新しい。土師器皿が出土した。

・ S K 585 (第26図)

長辺3.6m、短辺1.8m、深さ70cmの土坑である。S D 582、S K 520と切り合い、S D 582→S K 585→S K 520の順に新しい。天目茶碗等が出土した。

・ S K 594 (第27図、写真図版14)

長辺1.9m、短辺1.2m、深さ24cmの長方形の土坑である。II区の東側で検出した。S K 593、S K 619などと重複している。切り合い関係から、S K 593→S K 594の順に新しい。S K 619との切り合いは、攪乱により不明である。瀬戸美濃端反皿等が

出土した。

・ S K 602 (第26図)

長辺2.0m、短辺1.6m、深さ46cmの土坑である。II区の中央で検出した。S D 588と重複し、S D 602の方が新しい。茶臼、瀬戸美濃播鉢、天目茶碗、常滑鉢、丸瓦、平瓦等が出土した。

・ S K 606 (第26図)

長辺1.1m、短辺0.8m、深さ10cmの土坑である。II区の北側で検出した。底面に被熱した礫が10個ほど充填されていた。瀬戸美濃徳利が出土した。

・ S K 609 (第26図)

長辺1.4m、短辺0.8m、深さ30cmの楕円形の土坑である。II区の東側で検出した。位置からS K 619と関連する可能性もある。瀬戸美濃灰釉皿が出土した。

・ S K 611 (第26図、写真図版14)

II区、S B 635近辺に位置する楕円形の土坑である。径2.3m、深さ20cmを測る。

・ S K 615 (第27図)

長辺1.2m、短辺1.1m、深さ14cmの方形の土坑である。II区の北側で検出した。位置から、S B 634と関連する可能性もある。丸瓦、常滑甕が出土した。

・ S K 618 (第27図)

長辺2.4m、短辺1.8m、深さ10cmの土坑である。II区北西で検出した。常滑甕等が出土。

・ S K 619 (第27図、写真図版14)

II区の東側で検出した深さ30cm程の土坑である。遺構の重複が激しいため、大きさ、形などは不明。切り合い関係は、S K 593→S K 619、S K 619→S K 620の順に新しい。

・ S K 620 (第27図、写真図版14)

II区の東側で検出した深さ25cm程の土坑。攪乱や他の遺構との重複のため、形、大きさなどは不明である。切り合い関係はS K 619→S K 620、S K 621→S K 620の順に新しい。埋土から砥石が出土した。

・ S K 657 (第27図)

長辺1.9m、短辺1.0m、深さ12cmの長方形の土坑である。II区北西で検出した。出土遺物はなかった。

(東谷)

③溝と区画 (第28～31図)

溝や土塁などによって構成された区画である。これらは概ね屋敷地とみられるが、一部に性格を異にすると考えられるものがある。また、土塁(S A 501)との前後関係から、区画の時期的な変遷をうかがうことが可能である。

区画溝の多くは南北方向でN-35°-Eを志向し、朝明川周辺の平野にみられる条里型地割(N-45°-E)とは方位を違えている。伊坂城における区画の形成は、丘陵の形状や丘陵を貫通する道路遺構に規制されていたことがうかがえる。以下、区画の概要と区画溝について記す。

a : 区画A (第29図、写真図版4)

I区西側に位置する区画で、S D 572、S D 535、S D 644、S D 576、S D 573によって囲まれる。本区画の一辺の長さは約20mを測る。南西にはS B 630が所在するが、この屋敷地の主屋であろう。なお、S D 572の南側には、S B 631等を含む別の屋敷地が確認できる。

・ S D 572

東西方向の浅い溝である。規模は延長15.5m、最大幅1.1m、深さ10cmを測る。東端がS D 535に合流している。

・ S D 535

南北方向の浅い溝で、延長13.3m、幅0.8m、深さ7cmを測る。北端はS D 575・S D 644へと接続する。遺物は出土しなかった。

・ S D 644

南北方向の細長い溝で、延長20.7m、最大幅50cm、深さ約14cmを測る。遺物は出土しなかった。

・ S D 576

S D 573の北側をめぐる細長い溝で、延長23m、最大幅90cm、深さ約15cmを測る。土師器皿等が出土した。

・ S D 573 (第28図)

I地区の西側にある南北方向のやや深い溝である。調査区内で延長8.7m、幅1.4m、深さ20cmを測る。北端がS D 576とつながっている。埋土から土師器皿が出土した。

b : 区画B (第30図、写真図版5)

I区東側の区画である。S D 529、S D 540、S D 567で囲まれ、さらに南側を道状遺構S D 545で画

される。また、東側（S A636周辺）とは段差で仕切られており、壇状の区画となっている。

区画の規模は区画Aとほぼ同等である。区画内部にはS B625・S B628などの建物があるが、S B625は区画溝埋没後の遺構であり、主軸方位も区画溝と大きく異なる。本区画で特筆すべきは、集石土坑（S K520）を始めとする方形の土坑（土壌墓か）が多く見られる点や、中央を横断する道状遺構S D582、方形にめぐる溝S D538の存在である。これら遺構の主軸方向は区画溝とも調和的で、S D538を中世墳墓の周溝と仮定すれば、宗教的な色彩の強い区画であるとの推測が可能であろう。また、区画溝には土塁の築造前に機能していたものがあり、土塁の整備に伴って当区画も再編を余儀なくされ、屋敷地化したと考えられる。

・ S D529

コ字状にめぐる溝で、延長39.5m、幅1.6m、深さ10cmを測る。埋土から土師器片、瀬戸美濃片等が出土した。

・ S D540（第28図）

東西方向の溝で、延長4.5m、幅80cm、深さ25cmを測る。埋土から常滑鉢が出土した。

・ S D567

東西方向の深い溝である。調査区内で延長26m、最大幅1.8m、深さ25cmを測る。遺物はない。

・ S D538（写真図版16）

方形にめぐる浅い溝である。一辺約7m、四周の総延長23.5m、幅80cm、深さ20cmを測る。埋土から土師器片等が出土した。墳墓の周溝などの可能性が考えられるが、卒塔婆などの出土はないため、推測の域を出るものではない。

・ S D582（第28図）

東西方向の幅広い溝で、延長10.5m、最大幅2.3m、深さ35cmを測る。SD575などと同様の道状遺構であろう。埋土から土師器、瀬戸美濃播鉢が出土した。

・ S D536（第28図）

延長6.6m、幅80cm、深さ70cmを測る溝である。埋土から瀬戸美濃天目茶碗が出土した。

c：区画C・D（第31図、写真図版5）

II区に位置し、S D614、S D607、S D599、S D588、S D596で構成される区画である。S D

588以西を区画C、以東をDとした。この両区画は、前回調査地の小トレンチで確認した「区画17」に相当する。主要な遺構にはS B634・S B643、S B635があり、SB634がこの区画の主屋となろう。

当区画の北端には、丘陵上を横断する道状遺構が存在したとみられるが、現在の里道と重複しており大きく削平されていた。

・ S D588

南北方向の細長い溝で、延長65m、幅50cm、深さ10cmを測る。埋土から常滑鉢、羽釜、瀬戸美濃天目茶碗等が出土した。

・ S D596

南北方向の浅い溝で、延長4.0m、最大幅50cm、深さ10cmを測る。埋土から瀬戸美濃天目茶碗を転用した加工円盤が出土した。

・ S D599

南北方向の細長い溝で、延長19m、最大幅65cm、深さ15cmを測る。埋土から土師器皿、茶釜、常滑甕、瀬戸美濃天目茶碗等が出土した。

・ S D607

東西方向のやや深い溝で、延長21m、幅1.8m、深さ40cmを測る。埋土から瀬戸美濃播鉢、天目茶碗等が出土した。

・ S D614

S D599の延長上に位置する小規模な溝で、延長2.5m、幅40cm、深さ10cmを測る。

（岩脇・鈴木）

d：その他の溝

・ S D518（第28図）

I区の北側にある南北方向の細長い溝で、土塁の下層で検出した。延長16m、幅50cm、深さ20cmを測る。南端が屈曲しS D575につながっている。土師器羽釜等が出土した。

・ S D521（第30図）

I区の南東にある南北方向の細長い溝で、延長16m、幅50cm、深さ10cmを測る。

・ S D532（第28図）

I区の中央にある東西方向の溝で、延長4.0m、幅40cm、深さ30cmを測る。埋土から土師器皿が出土した。

・ S D537（第28図）

I 区の南側にある南北方向の浅い溝で、調査区内で延長4.9m、最大幅70cm、深さ10cmを測る。S B632・633を画する区画溝であろう。

・ S D541 (第28図)

I 区の東側にある南北方向の浅い溝で、延長3.2m、幅80cm、深さ25cmを測る。埋土から常滑、瀬戸美濃天目茶碗等が出土した。

・ S D558 (第28図)

I 区南西にある不定形な溝状遺構で、延長6.0m、幅1.3m、深さ10cmを測る。

・ S D559 (第28図)

I 区西側にある東西方向の浅い溝である。調査区内で延長3.7m、幅35cm、深さ5cmを測る。

・ S D570 (第28図、写真図版16)

I 区の西側にある東西方向の深い溝である。調査区内で延長9.0m、幅90cm、深さ65cmを測る。埋土から土師器皿、瀬戸美濃播鉢、天目茶碗が出土した。

・ S D591 (第31図)

II 区の南側にある東西方向の溝で、延長8.6m、幅80cm、深さ25cmを測る。埋土から土師器片、常滑甕・鉢、瀬戸美濃御皿等が出土した。

・ S D608 (第31図)

II 区の西側、S B634付近にある浅い溝で、延長9.0m、幅1.1m、深さ10cmを測る。埋土から土師器片等が出土した。

・ S D652 (第31図)

II 区の西側にある南北方向の浅い溝である。調査区内で延長9.5m、最大幅60cm、深さ10cmを測る。

(岩脇)

④土塁・虎口・登り口 (第32図、写真図版8・9)

I 区北側は小規模な谷が入り込み、斜面の傾斜が比較的緩やかであることから、丘陵上へ至る通路・登り口として利用されている。この出入り口の防御施設として、切通し状の虎口や土塁、帯郭状の平坦面が備えられている。

虎口は、土塁 S A501・S D575で構成され、城域外へ向かって2回屈折する、いわゆる「2折・0空間」のタイプのものである。また、S A501の西側には、切岸によって帯郭状の平坦面を作出し、土塁との組み合わせで登り口への侵入者を迎撃する構えをなしている。この結果、区画Bは横矢を効かせ

るように北側に張り出している。

なお、既刊の概報では、虎口を有効に機能させるため、S A501と同様の土塁が区画A北側に位置していたと推測している(「想定土塁」)が、明確な根拠をもって土塁を想定することは困難であろう。

土塁築造以前の遺構には、掘立柱建物・柵・土坑(土壇墓か)等がある。このうち、S K502からは瀬戸美濃大窯2期の灰釉皿が出土しており、土塁の築造時期は当該期以降に求められる。16世紀後半における屋敷地の改変を示すものであり、非常に重要な成果であるといえよう。また、S B633は、S D575に先行する掘立柱建物であるとみられ、虎口の整備に伴う区画の再編があったことを物語る。

・ S A501 (写真図版9)

延長21.4m、幅7.2m、高さ80cmを測る土塁である。調査時には、幅4mほどの平坦面をもつ低い高まりとなっていた。後世の削平により、土塁本来の高さは失われているとみられるが、あるいは、この低平さを活かし、土塁頂部を迎撃拠点とする帯曲輪としての役割を備えていたのかも知れない。土塁の盛土は地山起源の砂質土で、これを数層積み重ねて築造している。なお、土塁上の柵や土塁に伴う雨落ち溝などの付属施設は認められなかった。

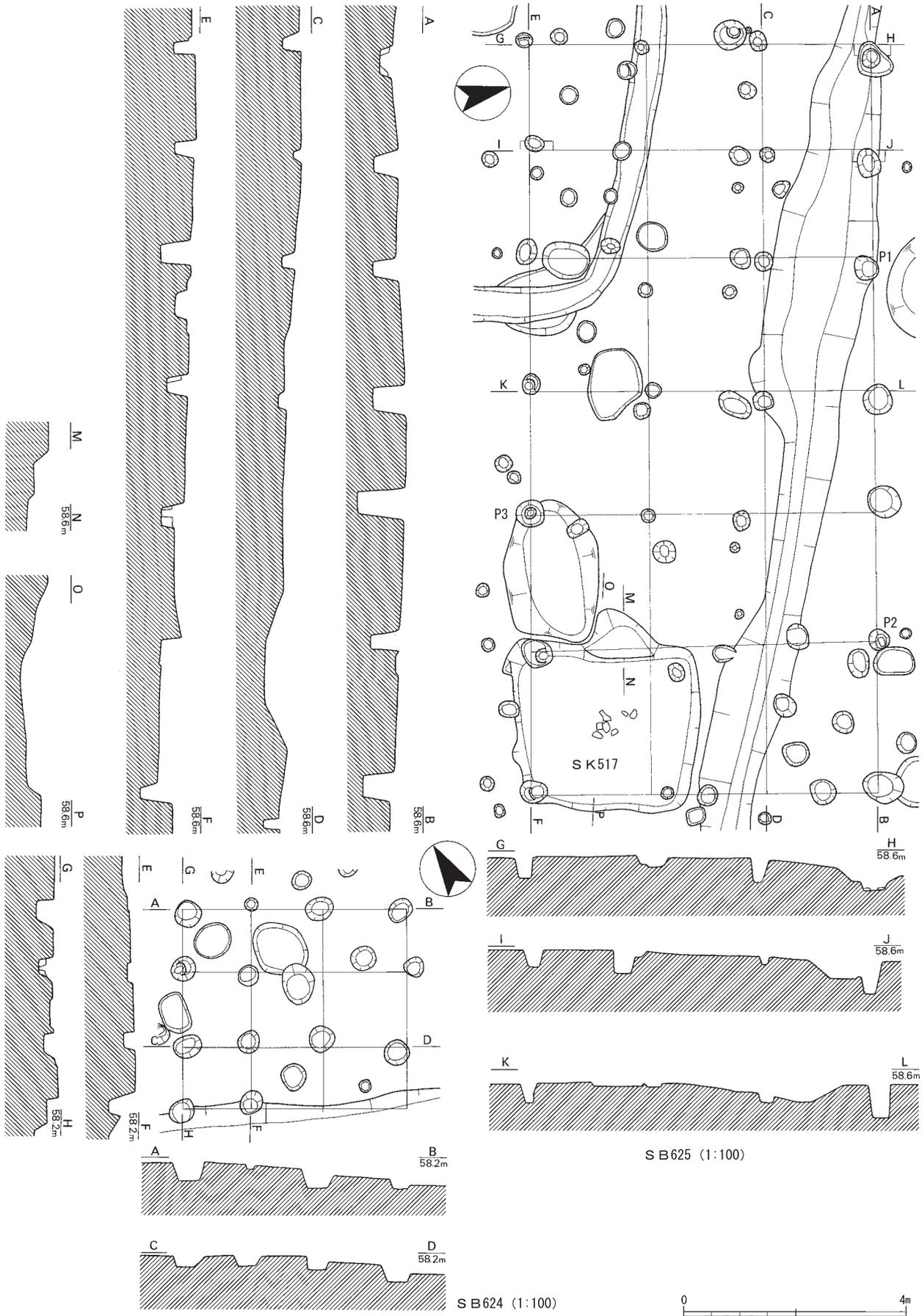
・ S D575 (写真図版15)

I 区の中央を縦断する切り通し状の通路である。延長20m、最大幅5.0m、深さ90cmを測る。南側へ進むにつれて次第に浅くなる。北端は鉤形に屈曲し、斜面登り口へ至ると急激に横幅が狭くなる。埋土から16世紀前半の染付皿、瀬戸美濃播鉢等が出土した。

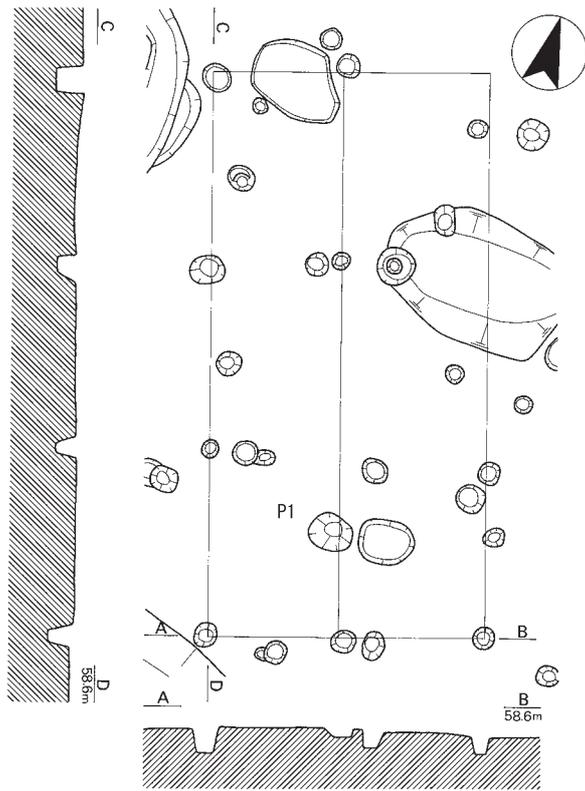
・ S D545 (第28図、写真図版16)

I 区の南東にある東西方向の切り通しで、延長18.2m、幅4m、深さ80cmを測る。西側はS D575と合流せず途切れている。東側は徐々に狭く浅くなり、I 区の南東(S A636方面)へ向かい消失する。埋土から土師器皿・羽釜、瀬戸美濃播鉢、常滑甕等が出土した。

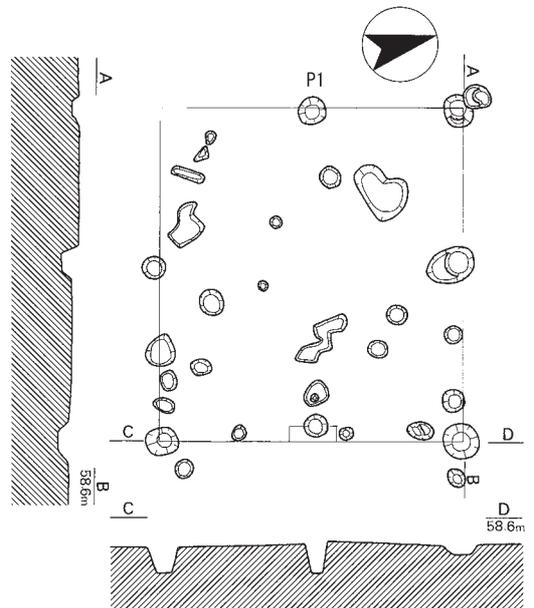
(櫻井)



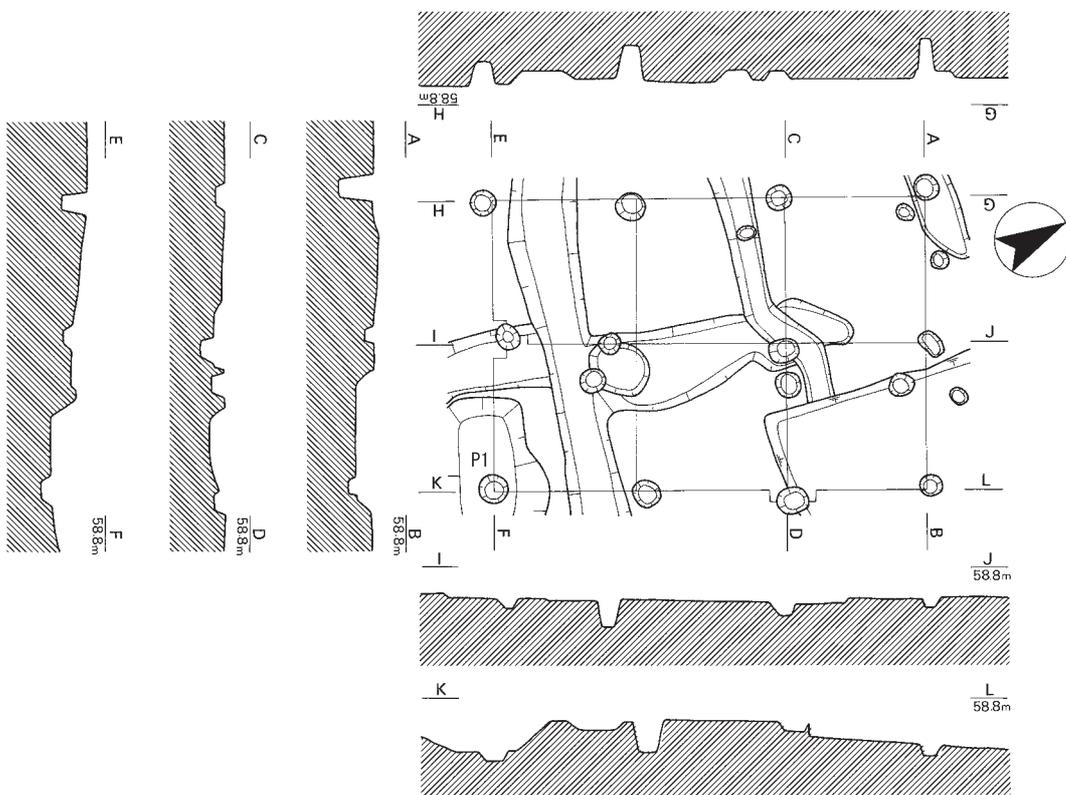
第14図 掘立柱建物・柵①



SB626 (1:100)



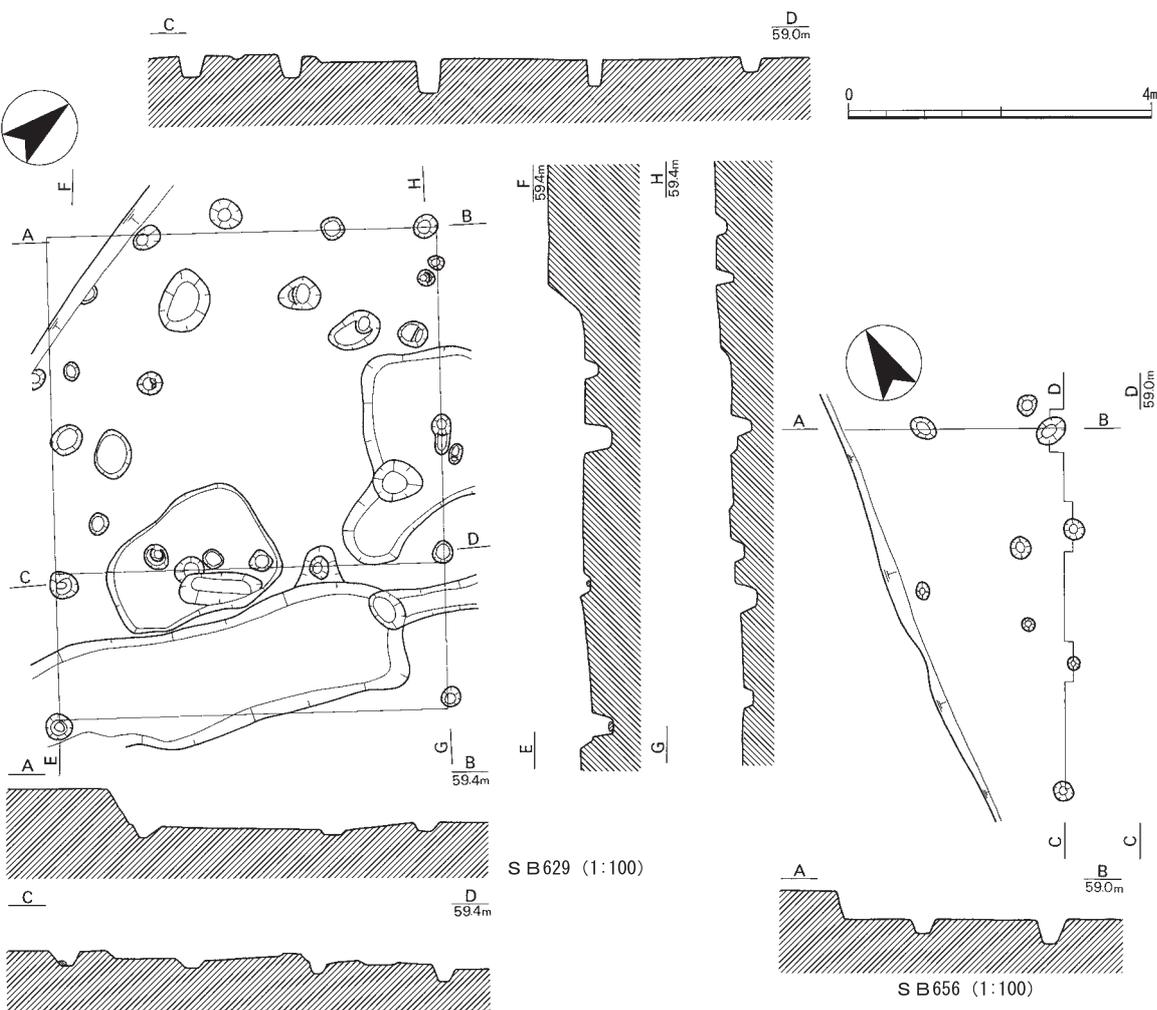
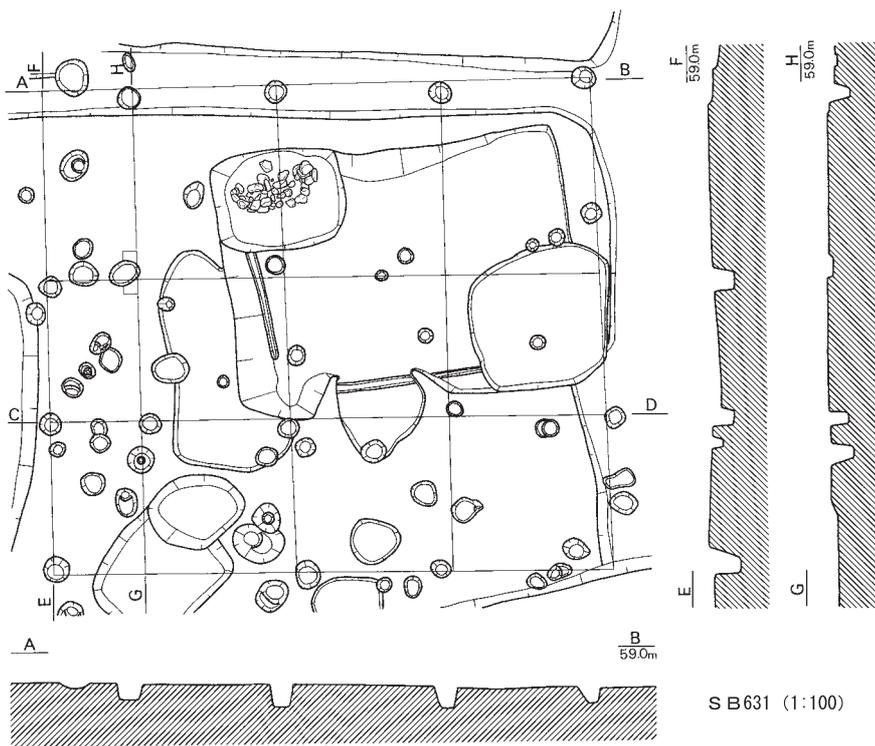
SB627 (1:100)



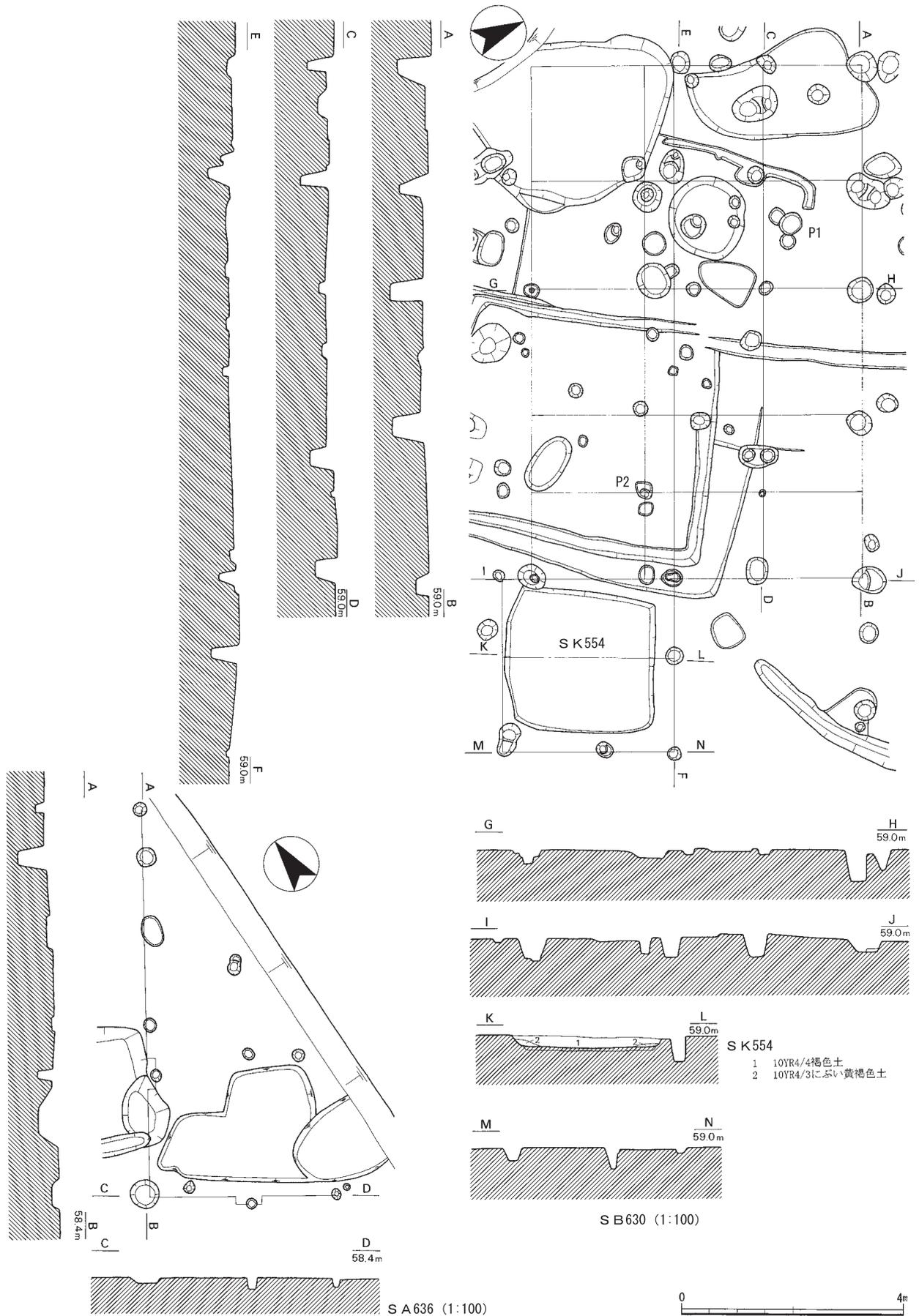
SB628 (1:100)



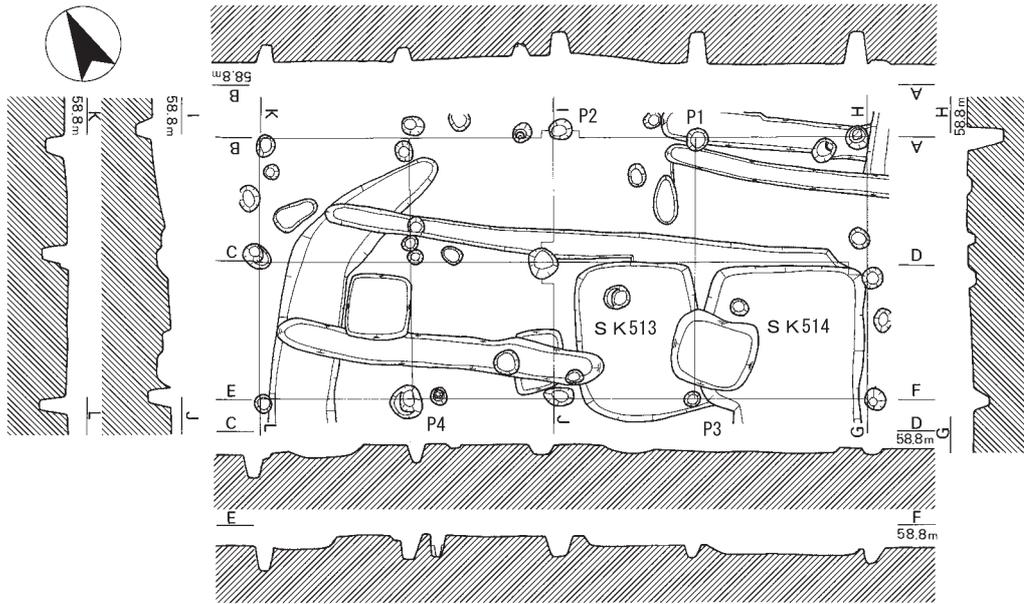
第15図 掘立柱建物・柵②



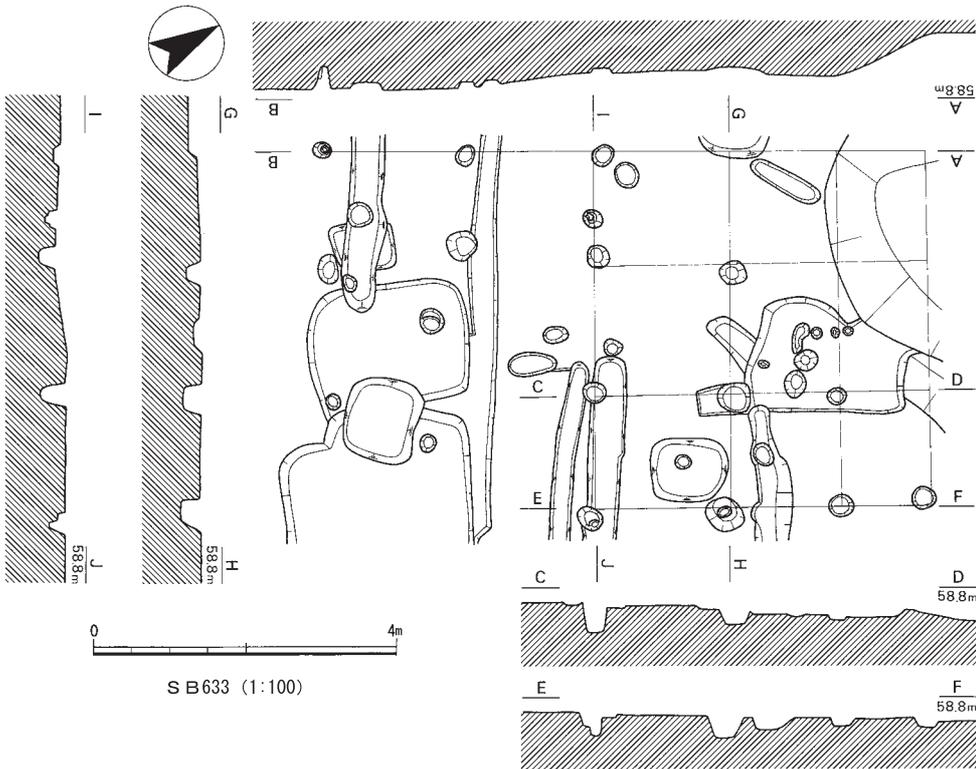
第16図 掘立柱建物・柵③



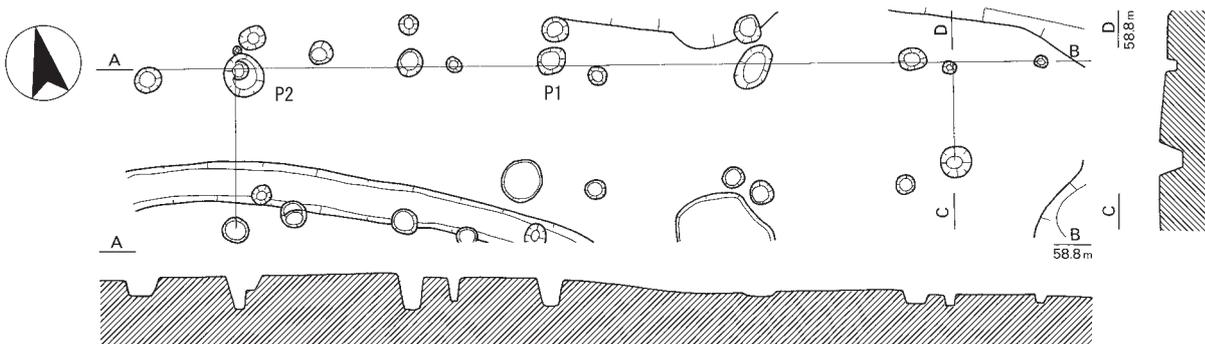
第17図 掘立柱建物・柵④



SB632 (1:100)

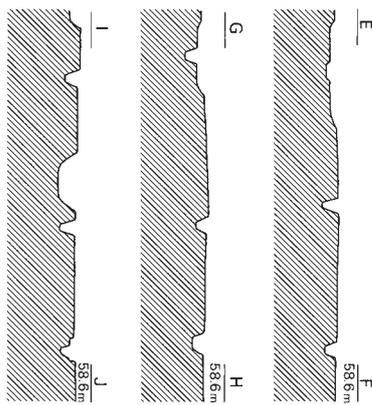


SB633 (1:100)

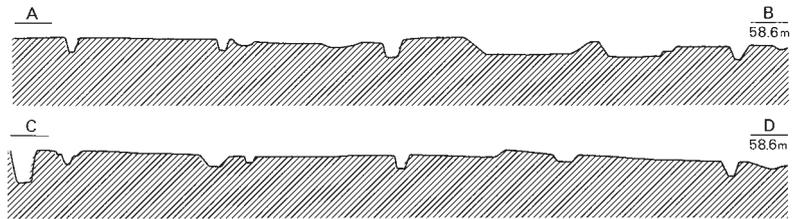
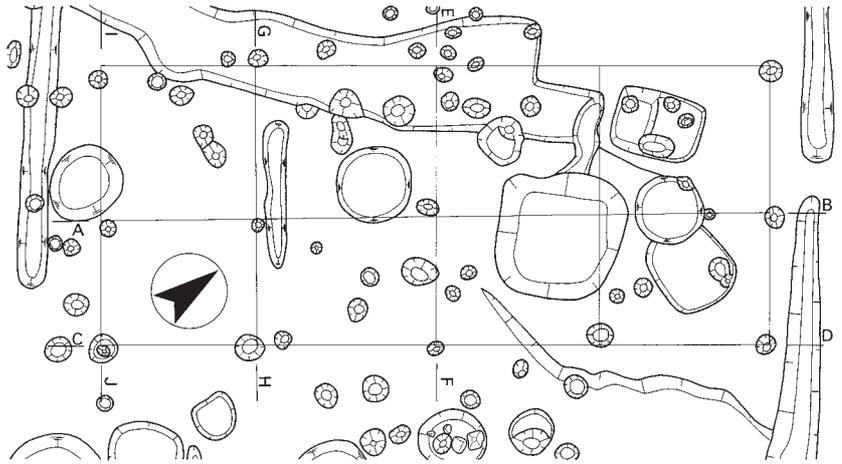


SA637 (1:100)

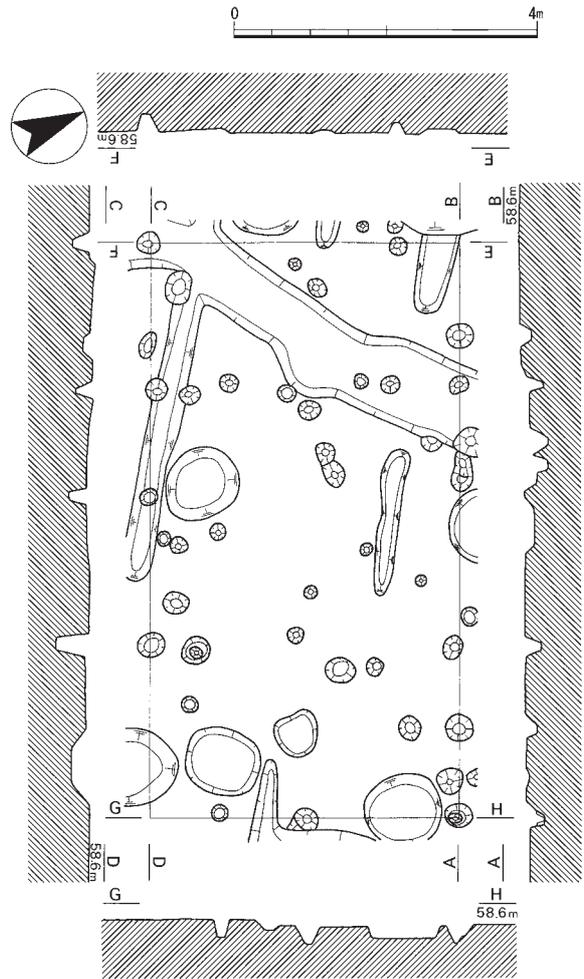
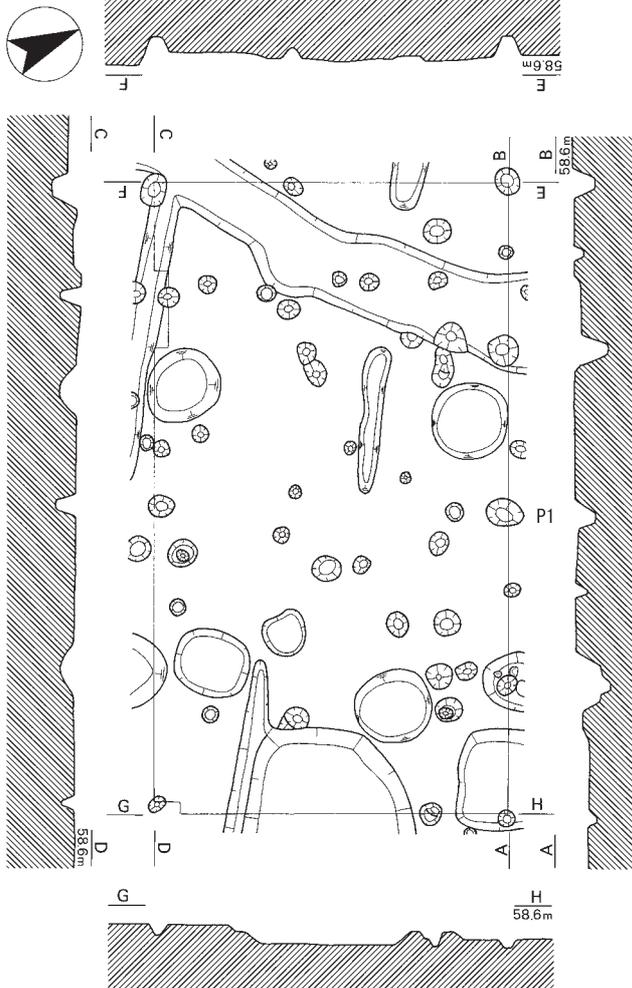
第18図 掘立柱建物・柵⑤



S B 634 (1:100)

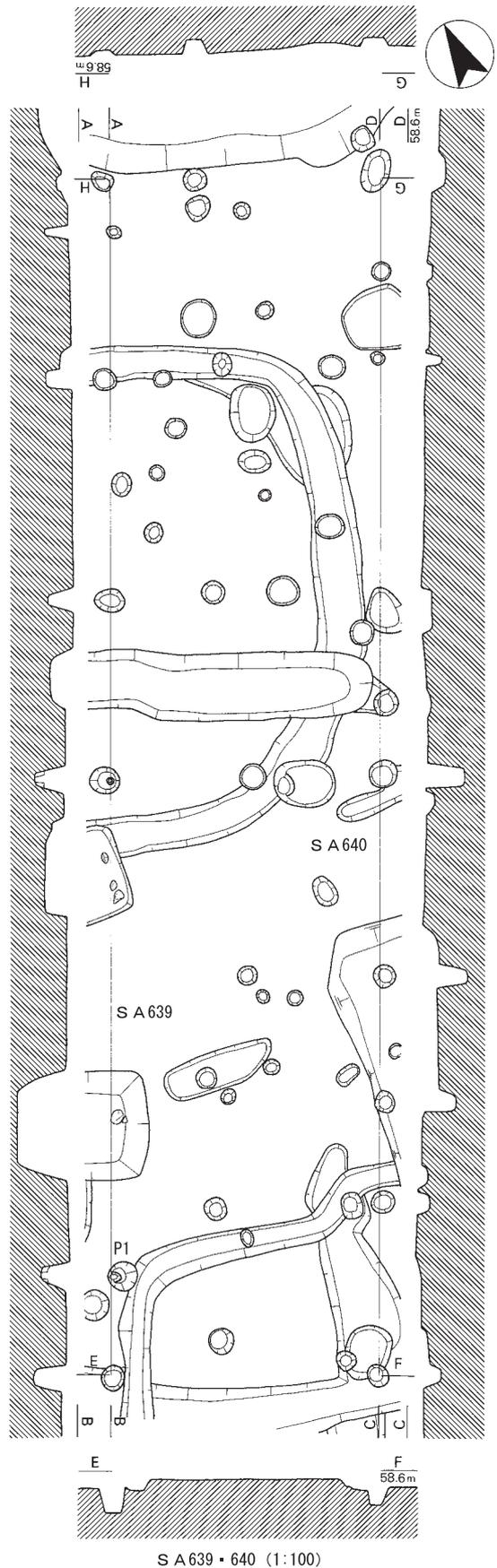
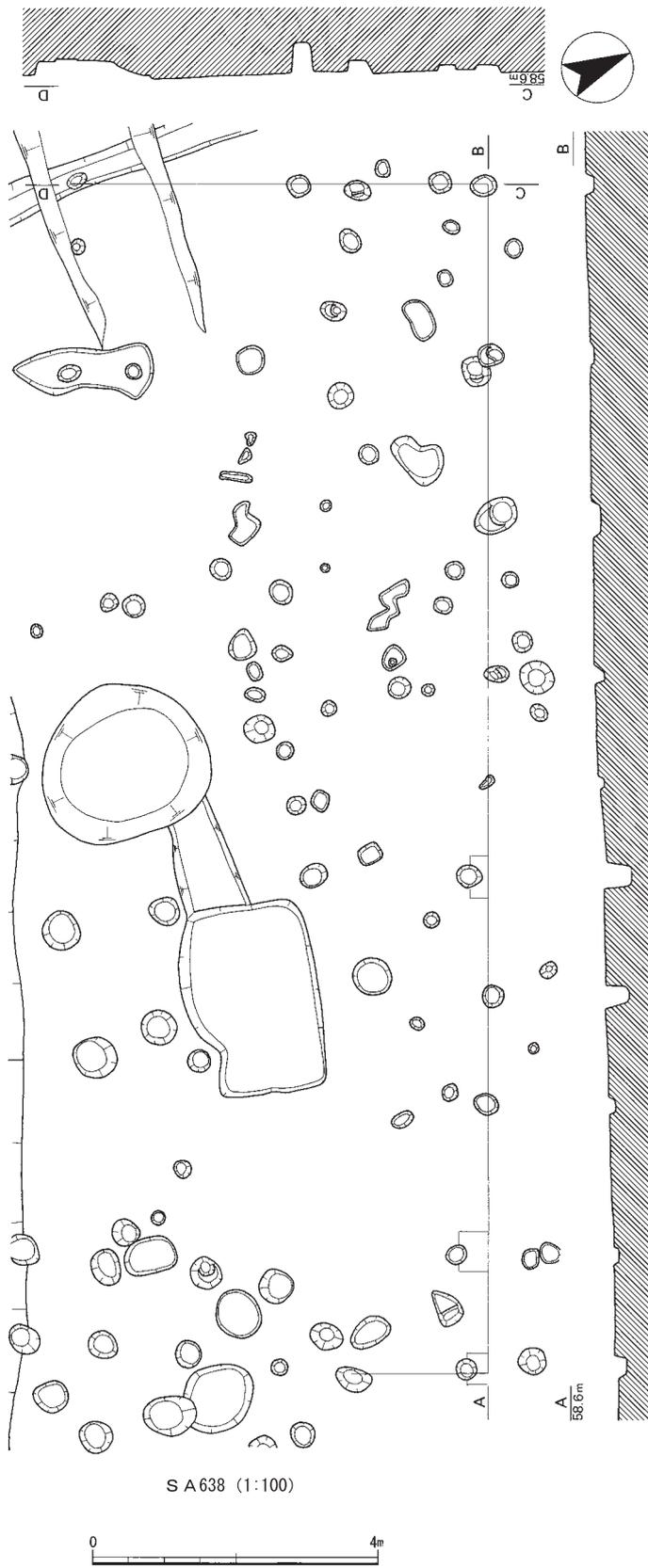


S B 635 (1:100)

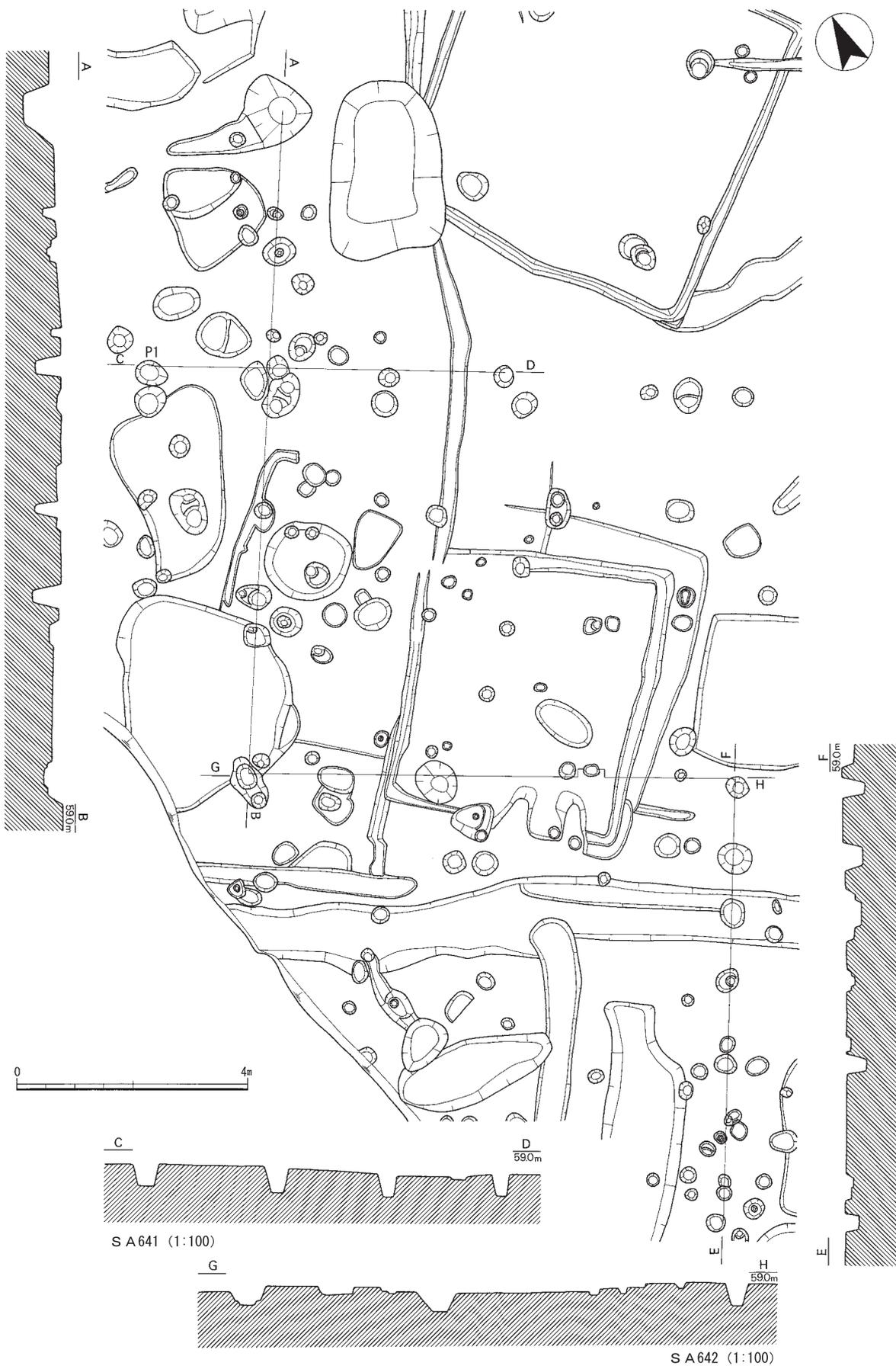


S B 643 (1:100)

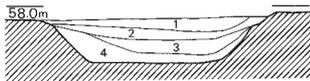
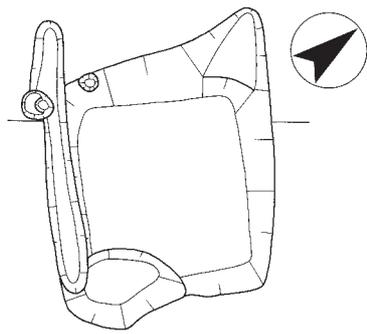
第19図 掘立柱建物・柵⑥



第20図 掘立柱建物・柵⑦

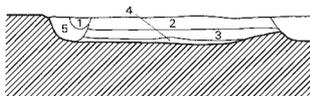
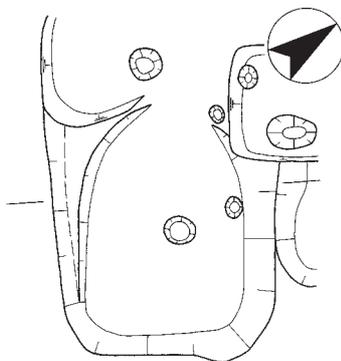


第21図 掘立柱建物・柵⑧



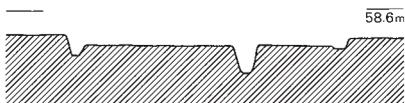
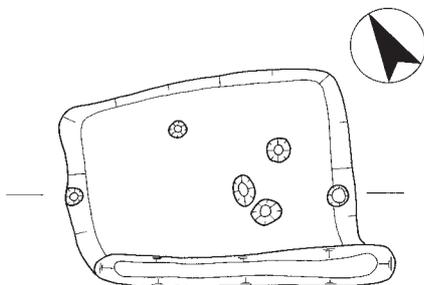
- 1 7.5YR5/6明褐色砂質土 (長石含む)
- 2 10YR5/6黄褐色砂質土
- 3 10YR5/8黄褐色砂質土
- 4 10YR5/4にぶい黄褐色砂質土

S K 528 (1:80)

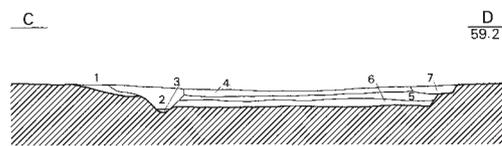
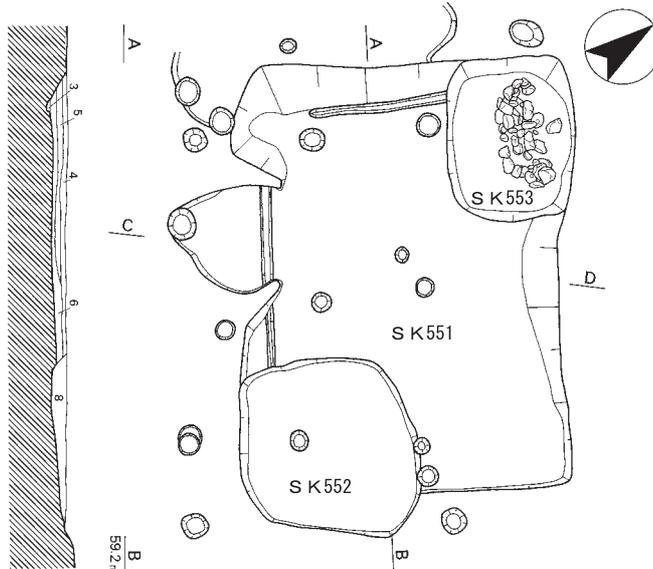


- 1 2.5Y6/2灰黄色粘質土
- 2 7.5YR4/4褐色砂質土 (明褐色砂質土ブロック混)
- 3 10YR5/6明黄褐色砂質土
- 4 10YR3/1黒褐色粘質土
- 5 2.5Y5/4黄褐色砂質土 (炭化物含む)

S K 593 (1:80)

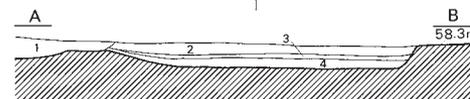
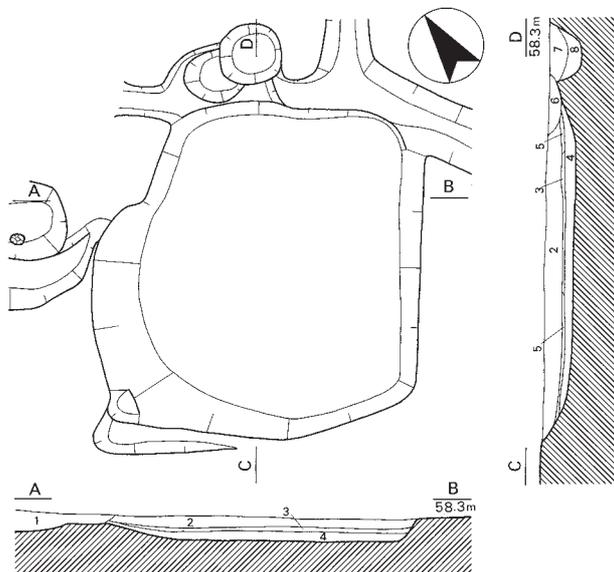


S K 617 (1:80)



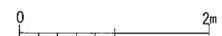
- 1 7.5YR4/2灰褐色土
- 2 7.5YR4/3褐色土 (炭化物含む)
- 3 2.5Y5/2暗灰黄色土
- 4 5Y4/2灰オリーブ色土
- 5 5Y5/2灰オリーブ色土 (鉄分多い)
- 6 5Y5/1灰色土
- 7 7.5YR4/4褐色土
- 8 10YR5/4にぶい黄褐色土

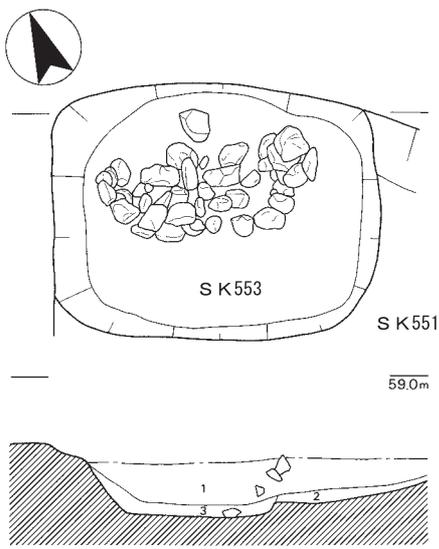
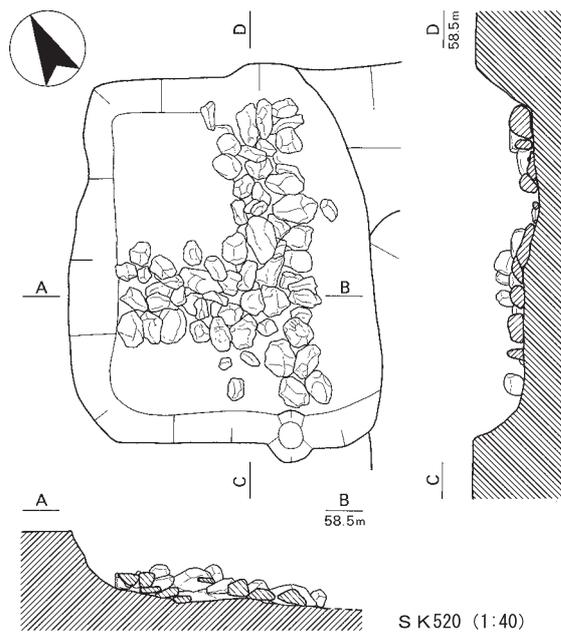
S K 551 (1:80)



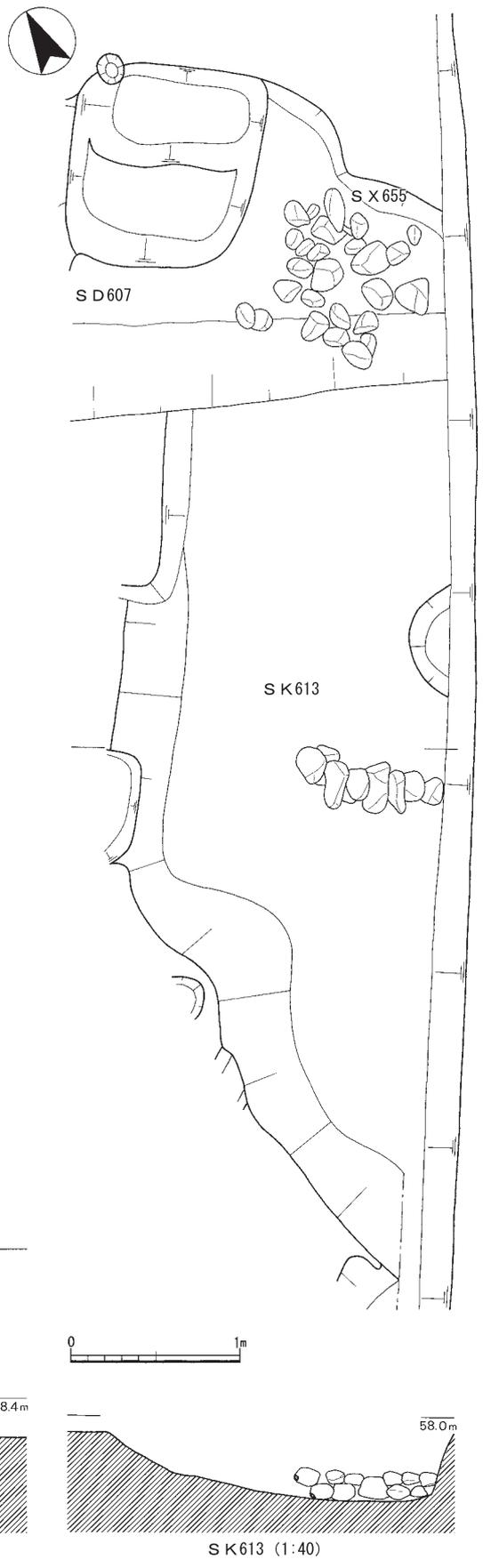
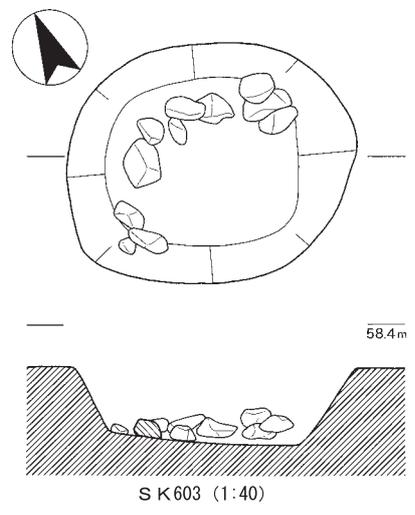
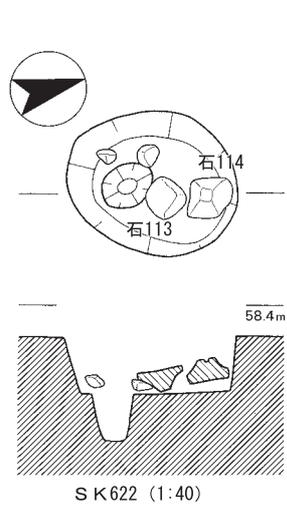
- 1 10YR4/6褐色土 (長石含む)
- 2 10YR4/6褐色土
- 3 10YR5/4にぶい黄褐色土
- 4 10YR4/4褐色土
- 5 10YR2/2黒褐色土
- 6 10YR4/6褐色土 (長石含む)
- 7 10YR4/4褐色土
- 8 10YR4/4褐色土 (砂が多い)

S K 612 (1:80)

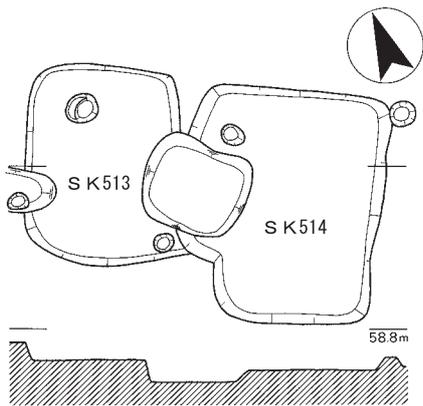




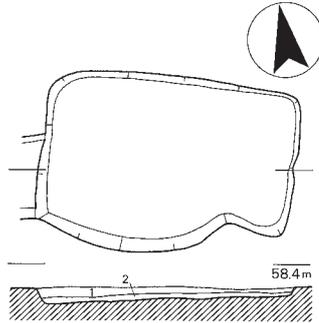
- 1 7.5YR4/4褐色土
- 2 5Y5/2灰オリーブ色土
- 3 7.5YR5/4にぶい褐色土



第23図 集石土坑

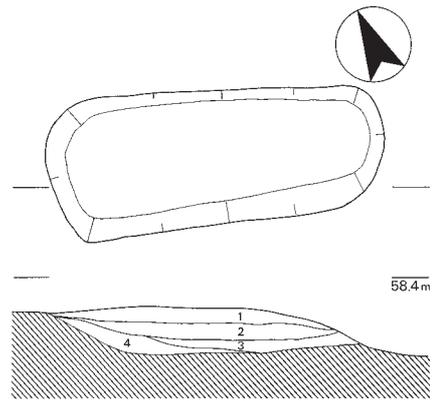


S K 513・514 (1:80)



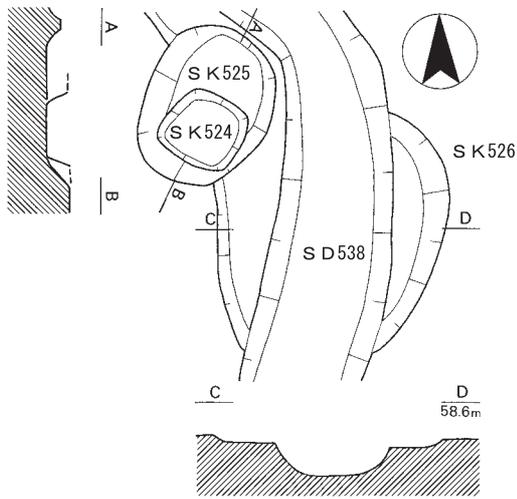
S K 519 (1:80)

- 1 10YR5/6黄褐色砂質土
- 2 10YR5/8黄褐色砂質土 (にぶい黄褐色砂質土混)

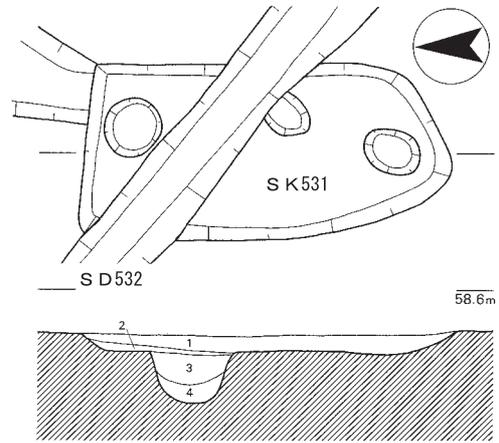


S K 527 (1:40)

- 1 10YR6/6明黄褐色砂質土
- 2 10YR5/6黄褐色砂質土
- 3 10YR4/6褐色砂質土
- 4 10YR5/8黄褐色砂質土 (長石含む)

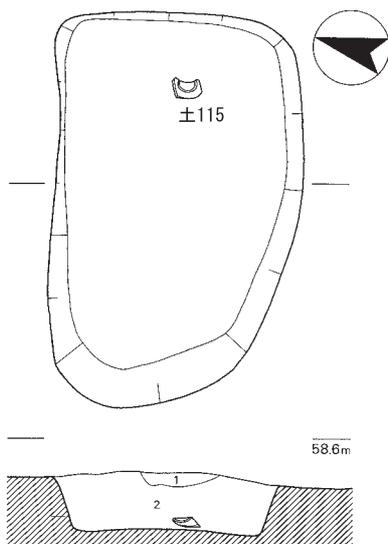


S K 524・525・526 (1:40)



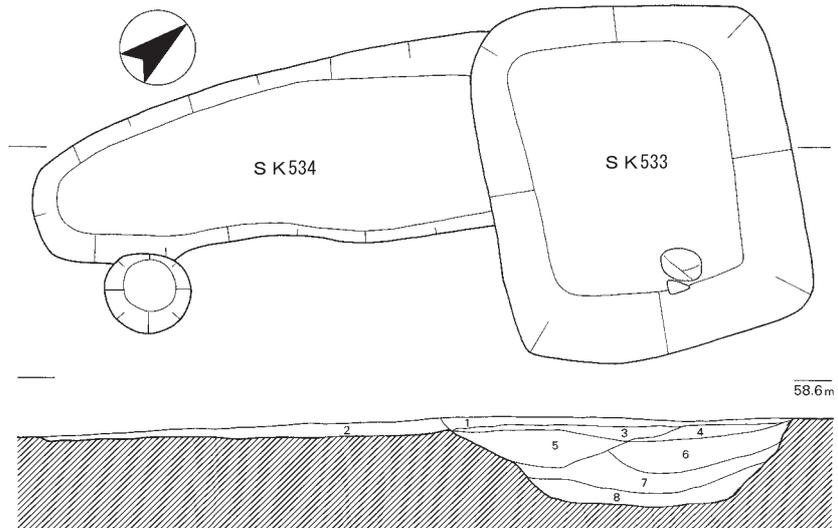
S K 531 (1:40)

- 1 10YR6/6明黄褐色砂質土
- 2 10YR5/6黄褐色砂質土
- 3 7.5YR6/6橙色砂質土 (長石含む)
- 4 7.5YR7/8黄褐色砂質土 (長石含む)



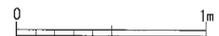
S K 502 (1:40)

- 1 10YR5/8黄褐色砂質土
- 2 10YR5/6黄褐色砂質土 (長石含む)

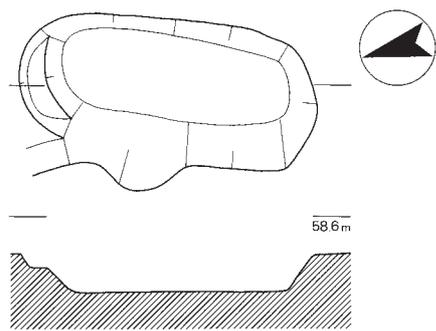


S K 533・S K 534 (1:40)

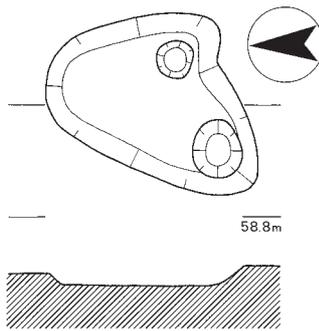
- 1 10YR6/8明黄褐色砂質土
- 2 10YR6/6明黄褐色砂質土
- 3 10YR5/6黄褐色砂質土
- 4 7.5YR5/6明褐色砂質土
- 5 7.5YR4/4褐色砂質土
- 6 10YR5/6黄褐色砂質土 (長石含む)
- 7 10YR5/4にぶい黄褐色砂質土
- 8 10YR6/6明黄褐色砂質土 (長石含む)



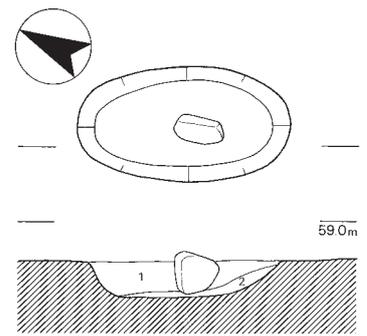
第24図 その他の土坑①



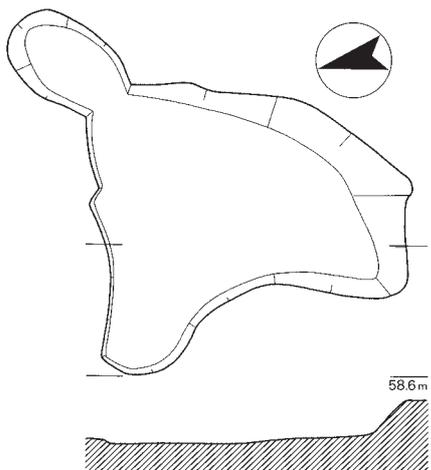
S K539 (1:40)



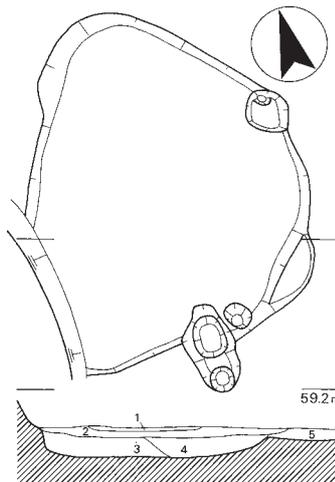
S K542 (1:40)



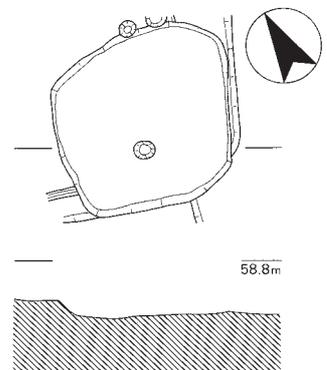
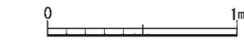
1 5YR4/1褐色土 (焼土ブロック、炭化物含む)
2 10YR4/1褐色土 (焼土ブロック、炭化物含む)
S K550 (1:40)



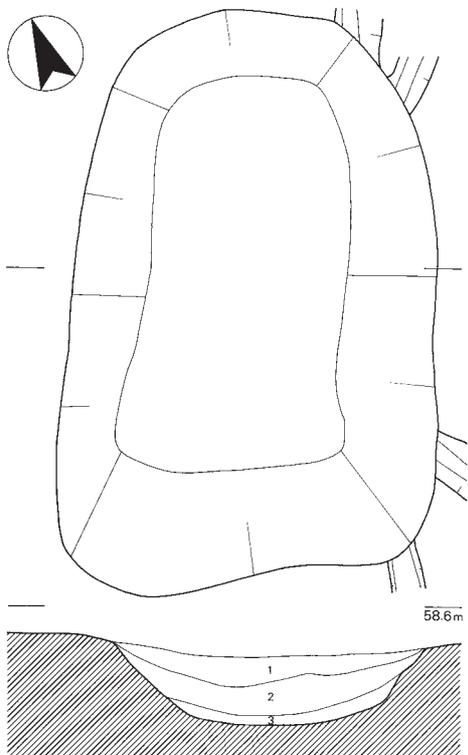
S K548 (1:80)



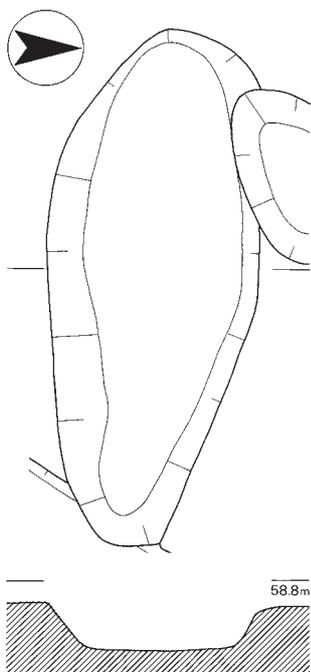
1 10YR6/8明黄褐色砂質土
2 10YR4/4褐色砂質土
3 10YR4/8にぶい黄褐色砂質土
4 10YR5/8黄褐色砂質土 (オリーブ灰褐色砂質土混)
5 10YR3/3暗褐色砂質土
S K560 (1:80)



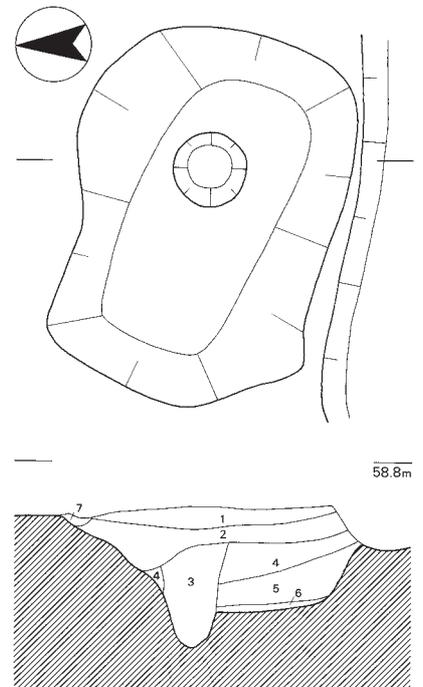
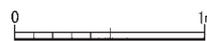
S K552 (1:80)



1 10YR4/4褐色砂質土
2 2.5Y4/6オリーブ褐色砂質土 (褐色砂質土まばらに混)
3 2.5Y5/3黄褐色砂質土
S K563 (1:40)



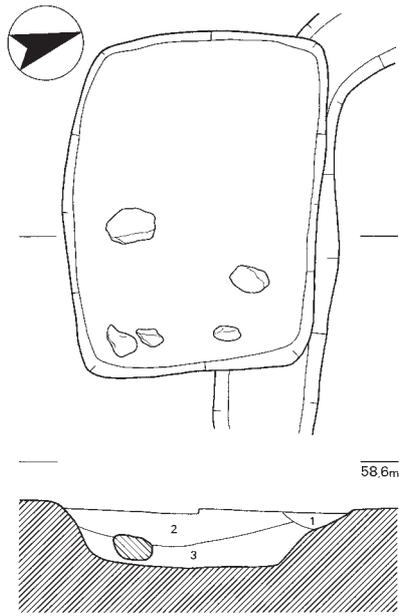
S K564 (1:40)



1 10YR4/6褐色砂質土
2 10YR6/8明黄褐色砂質土
3 2.5YR5/6黄褐色砂質土
4 10YR5/6黄褐色砂質土
5 10YR6/6明黄褐色砂質土
6 7.5YR6/8橙色砂質土
7 10YR6/6明黄褐色砂質土 (明赤褐色砂質土混)
S K566 (1:40)

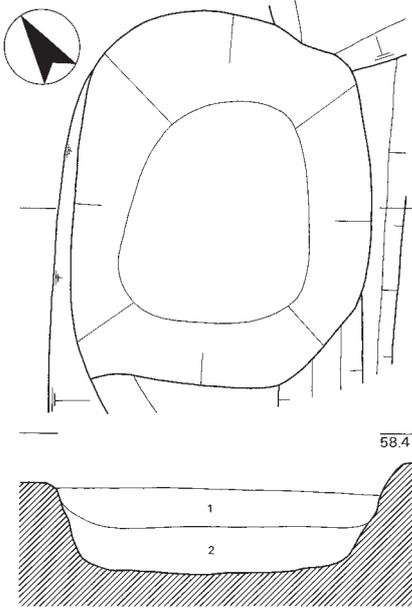
S K566 (1:40)

第25図 その他の土坑②



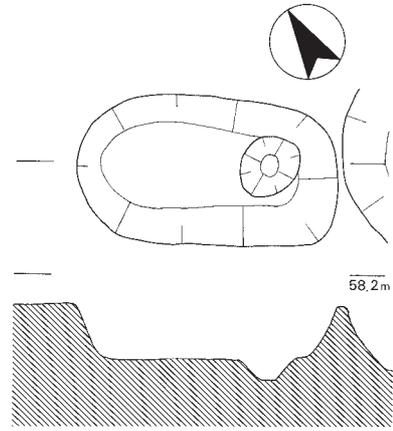
- 1 10YR5/6黄褐色砂質土 (長石含む)
- 2 10YR5/4にぶい黄褐色砂質土 (2mm位の礫含む)
- 3 10YR4/4褐色砂質土

S K 581 (1:40)

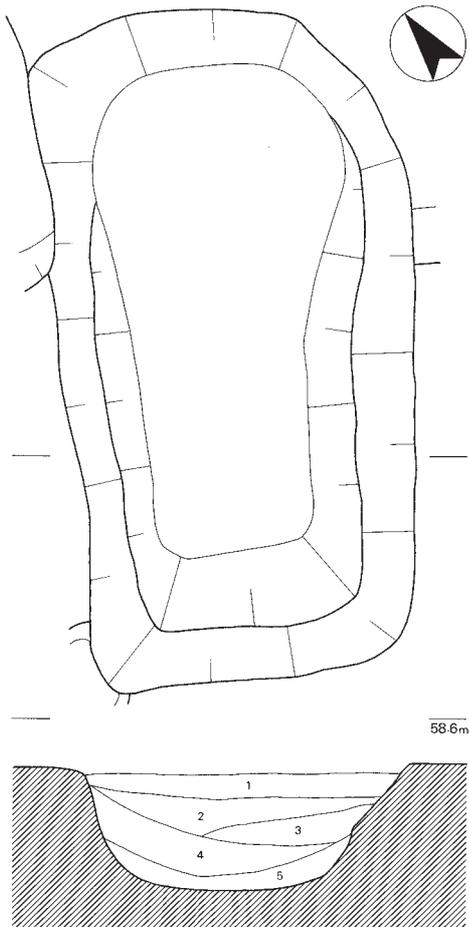


- 1 10YR4/4褐色土 (黄褐色砂質土ブロック混)
- 2 10YR4/4褐色土 (にぶい黄褐色粘質土若干混)

S K 602 (1:40)

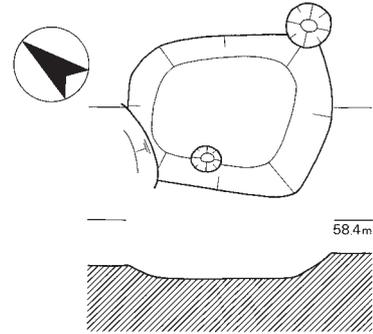


S K 609 (1:40)

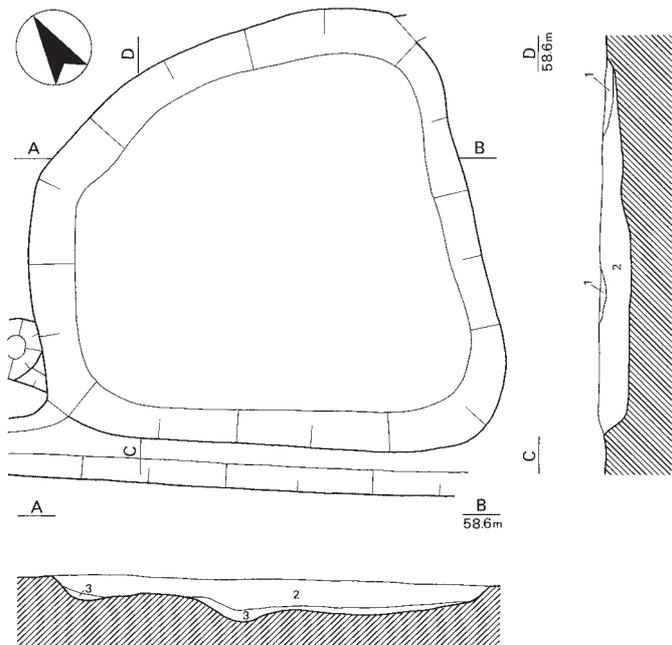


- 1 10YR6/6明黄褐色砂質土 (長石含む)
- 2 10YR5/6黄褐色砂質土 (長石含む)
- 3 7.5YR5/6明褐色砂質土
- 4 10YR5/3にぶい黄褐色砂質土 (黄褐色砂質土ブロック混)
- 5 10YR4/6褐色砂質土

S K 585 (1:40)



S K 606 (1:40)

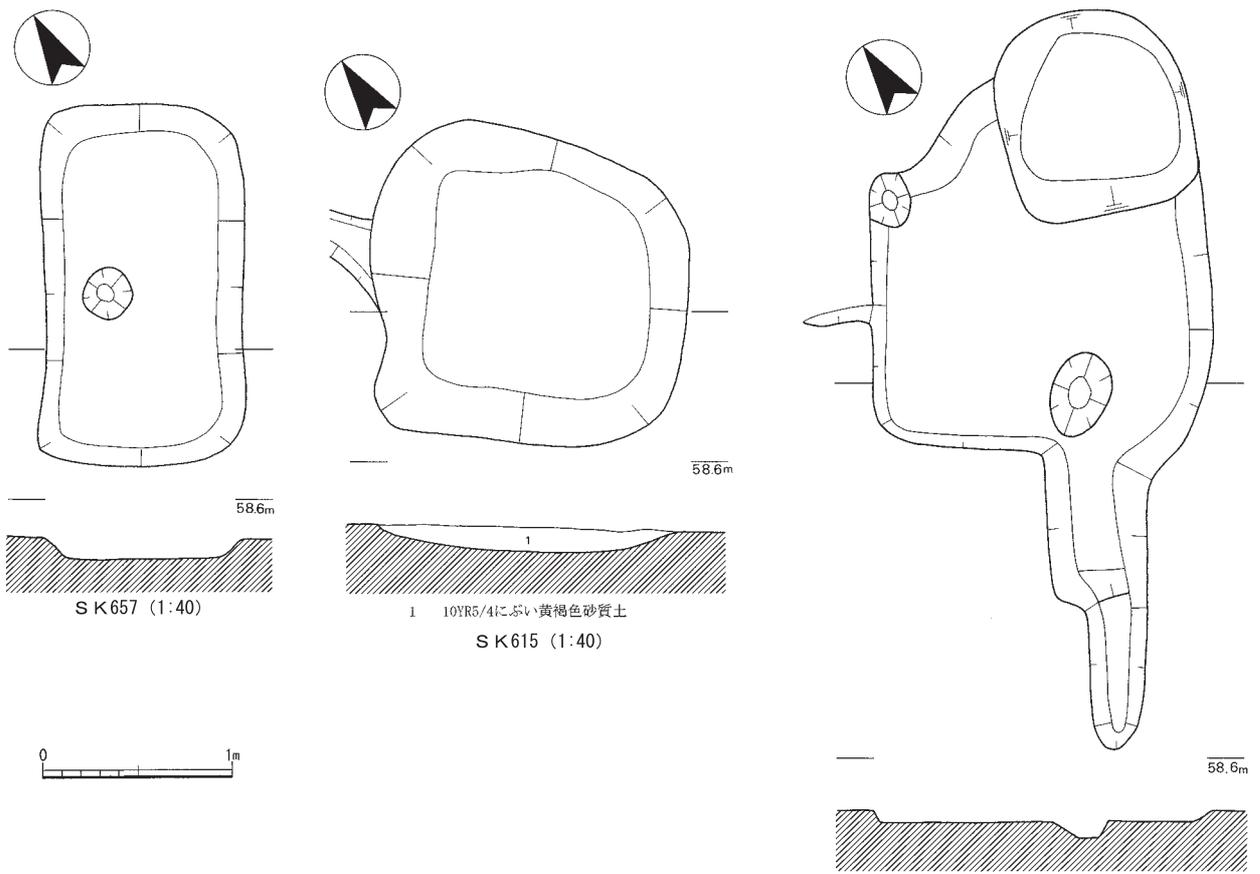


- 1 7.5YR5/8黄褐色土
- 2 10YR4/6褐色土 (2~3mmの長石含む)
- 3 10YR4/3にぶい黄褐色土

S K 611 (1:40)



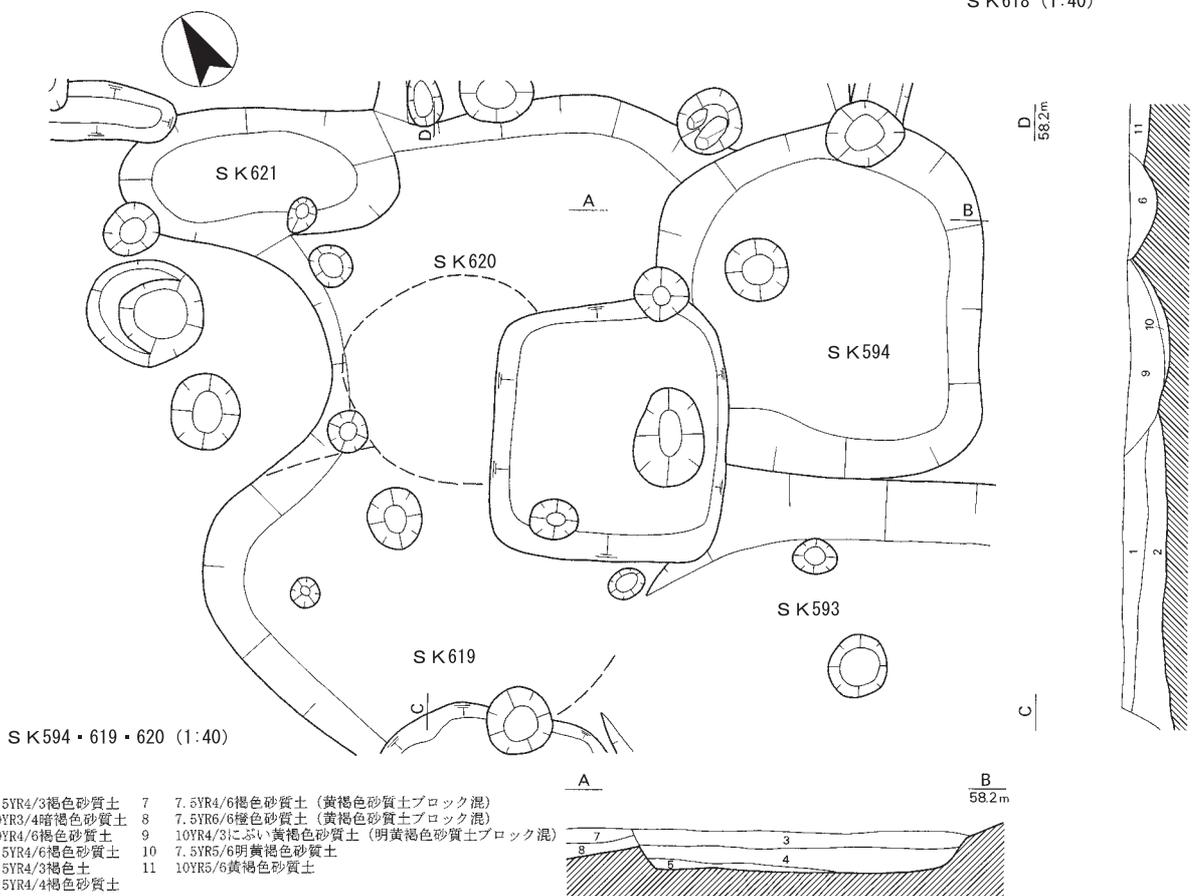
第26図 その他の土坑③



S K 657 (1:40)

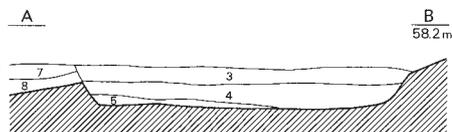
1 10YR5/4にぶい黄褐色砂質土
S K 615 (1:40)

S K 618 (1:40)

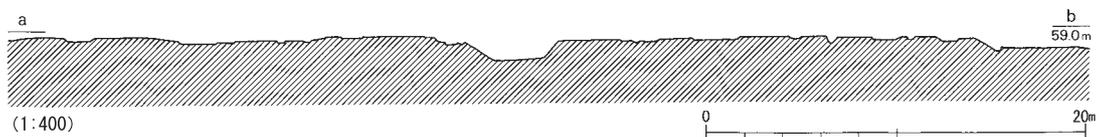
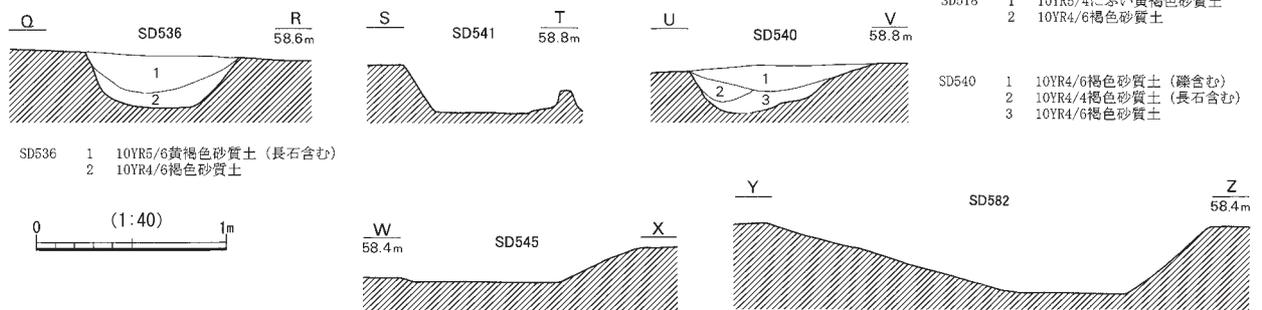
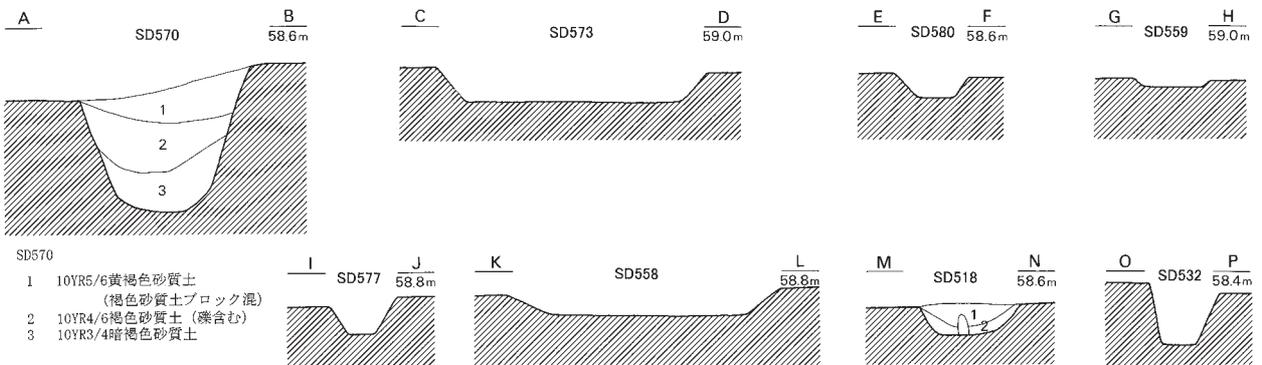


S K 594・619・620 (1:40)

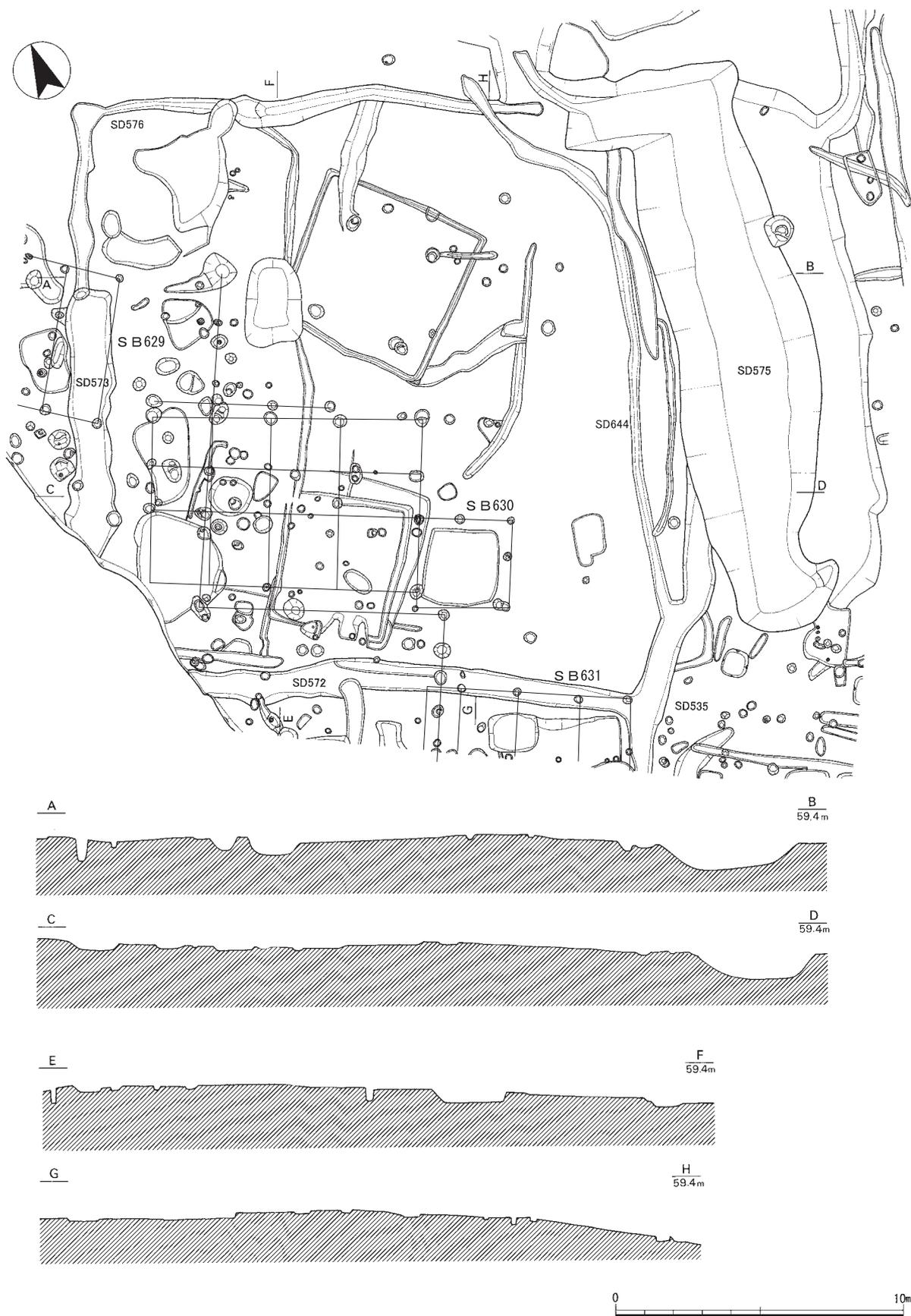
- | | |
|-----------------|-----------------------------------|
| 1 7.5YR4/3褐色砂質土 | 7 7.5YR4/6褐色砂質土 (黄褐色砂質土ブロック混) |
| 2 10YR3/4暗褐色砂質土 | 8 7.5YR6/6橙色砂質土 (黄褐色砂質土ブロック混) |
| 3 10YR4/6褐色砂質土 | 9 10YR4/3にぶい黄褐色砂質土 (明黄褐色砂質土ブロック混) |
| 4 7.5YR4/6褐色砂質土 | 10 7.5YR5/6明黄褐色砂質土 |
| 5 7.5YR4/3褐色土 | 11 10YR5/6黄褐色砂質土 |
| 6 7.5YR4/4褐色砂質土 | |



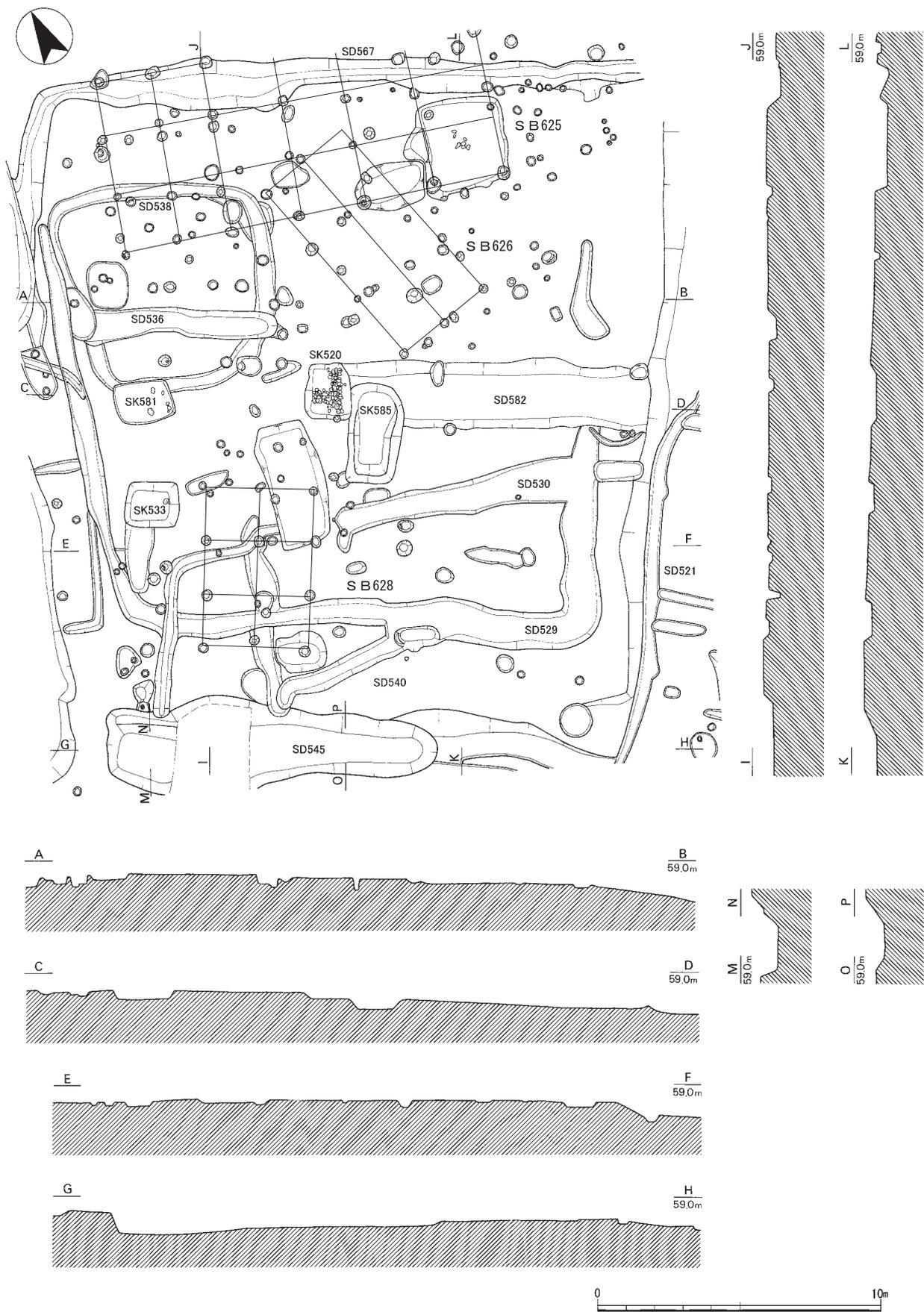
第27図 その他の土坑④



第28図 溝・区画①



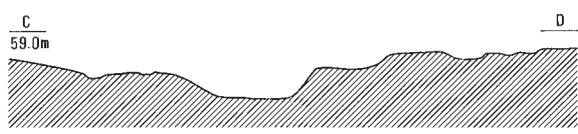
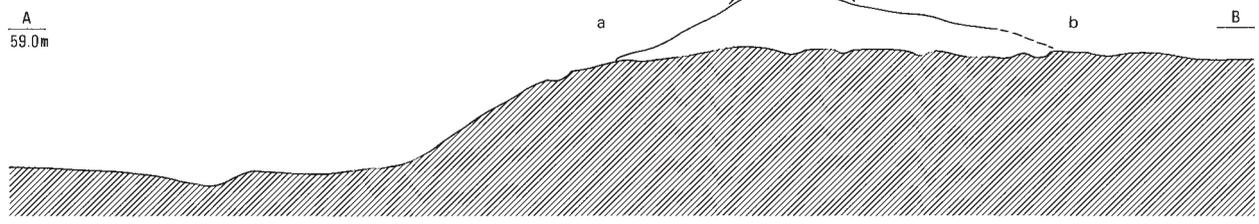
第29图 溝・区画② (区画A、1:200)



第30图 溝・区画③ (区画B、1:200)

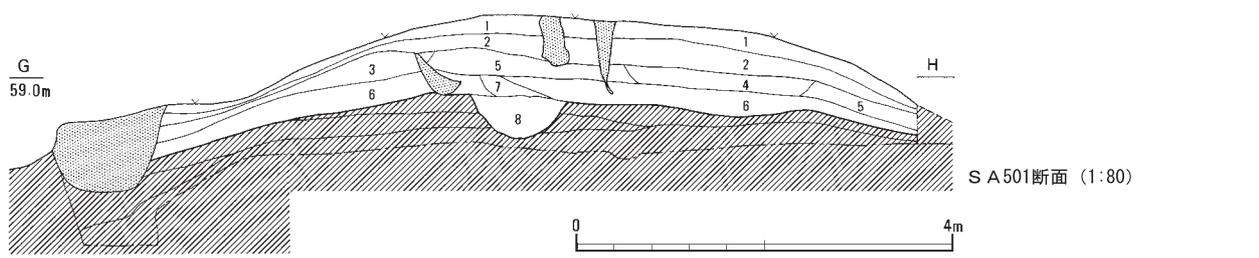


第31图 溝・区画④ (区画C・D、1:200)



※土塁部分は調査前測量図より復原 (1:200)

- S A 501南壁
- 1 10YR5/3いぶい黄褐色土
 - 2 10YR5/6黄褐色砂質土
 - 3 10YR6/8明黄褐色砂質土
 - 4 10YR8/4浅黄褐色砂質土 (3~5cmの礫含む)
 - 5 10YR8/4浅黄褐色砂質土 (5mm~1cmの礫含む)
 - 6 10YR7/6明黄褐色砂質土 (長石含む)
 - 7 2.5YR7/4浅黄褐色砂質土
 - 8 2.5YR7/4浅黄褐色砂質土 (別遺構、1~3cmの礫含む)



S A 501断面 (1:80)

第32図 土塁と虎口

第Ⅳ章 遺物

第1節 出土遺物の概要

①遺物の数量と構成

本次調査で出土した遺物は土器・陶磁器・瓦・石製品・鉄製品で、コンテナ換算で52箱を数える。

これらの遺物の時期は、古墳時代前期・古墳時代後期・中世の3期に大別できる。

中世のうち、鎌倉時代はわずかに山茶碗や瓦器の小片が認められる程度で、遺物量はごく少ない。室町以降は古瀬戸の皿などが僅かに認められるものの、大半は戦国時代の遺物である。瀬戸美濃製品は古瀬戸Ⅳ期～大窯2段階まで（15世紀後半～16世紀前半）のものが多く、前回調査とほぼ同様の傾向が看取される。しかし、大窯3期以降の遺物は少なく、常滑でも、12型式に降るものは無いという若干の差がある。

なお、前報告書では、瀬戸美濃大窯編年を基準とした時期別の出土量、組成を詳細に報告しているが、今回は実施しなかった。遺物の総量が少ないうえ、瀬戸美濃大窯編年と他の遺物とのクロスチェックを行うことのできる一括資料が乏しいからである。しかし、出土土器の組成は1～2次調査と大きく変わるものではないといえる。すなわち、中南勢の中世遺跡に比べて国産陶磁器の比率が高い傾向があり、瀬戸美濃等の陶器産地に近いという北勢地域の地理的特徴が現れているのである。

②整理の方針と方法

図化にあたり、土器は器種や時期を判別しやすい口縁部片、底部片を抽出した。石製品・鉄製品・鍛冶関連遺物は残存度、遺構の時期に関わらず全点抽出した。また、包含層出土遺物については遺構出土資料の補足にとどめることにした。なお、本次調査では近世・近代の遺構は攪乱として扱っている。近世以降の遺物は陶磁器片数点にとどまり、伊坂城廃絶後は完全に耕地化したと考えられる。よって、当該期の遺物は報告しなかった。

写真は図化遺物のうち主要なもののみを撮影し、製作技法の痕跡や焼成具合などの細部を表すように

努めた。写真撮影にあたり、石膏による補填は脆弱部の補強のみにとどめた。

③前報告書以降の研究動向 ～常滑の編年観～

前報告書では、出土した常滑の片口鉢を8～9型式とやや古く位置づけている。その結果、大窯期の瀬戸美濃挿鉢とそれ以前の常滑片口鉢が交替するかなのような調理具の構成を示すことになった。ところが、伊坂城跡における当該期の他の遺物は極めて少なく、鉢の編年観との齟齬が問題として残された。しかしその後、伊坂城跡や桑名市志知南浦遺跡など北勢地域の調査例が増加したことで、軟質焼成の常滑片口鉢が中世末期にまで残存し、近世赤物の挿鉢へとつながることが具体的に明らかになってきた。これらの成果を踏まえ、中野晴久氏は、2005年の編年において、伊坂城跡出土の片口鉢を中世常滑の最終末（12型式）に位置づけている¹⁾。

本次調査の常滑片口鉢・甕の焼成状態をみると、総数の約4割が軟質焼成のもので占められており、やはり清洲城下町Ⅱ期（16世紀中葉）の様相に近いことがうかがえる²⁾。使用による損耗が著しいこの種の鉢が、伝世等で長期にわたり残存し、甕等の貯蔵具よりも古い様相を示すとは考えにくく、伊坂城跡の片口鉢は16世紀代のものと見ておかなければならない。常滑の場合、より型式変遷が明確な甕によって時期を比定するのが有効であり、片口鉢の製作（廃棄）年代は、瀬戸美濃などの編年観を踏まえたうえで復元的に位置づけを行う必要があると考える。片口鉢の編年に関しては、第Ⅴ章で改めて論じることにした。

註

1) 中野晴久「渥美・常滑」『中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～』（発表要旨集）2005年。

2) 鈴木正貴「清洲城下町の遺物様相」『清洲城下町遺跡』Ⅳ、愛知県埋蔵文化財センター、1995年。

第2節 古代以前（古墳時代～古代）の遺物

第33図は古墳時代から古代の遺物である¹⁾。多くは古墳時代後期のものであるが、わずかに古墳時代前期の遺物がみられる。

① 竪穴住居出土遺物（1～31）

1～26はS H 546出土遺物である。大半は古墳時代後期に位置づけられるが、古墳時代前期の1・2・13は、先行するS H 586からの混入遺物であろう。1・2はS字甕、13は3方向に円形の透孔を穿つ高杯の脚部で、以上は廻間Ⅲ式に位置づけられる。3～6はく字状口縁の土師器甕で、口縁部はやや直立ぎみに立ち上がる。7～11は口縁端部をつまみ上げる甕である。12は鍋類の把手で、断面の扁平化が進んでいる。

14～26は須恵器である。杯蓋は猿投産でつまみが付き、器高がやや高いもの（14）、有稜（15～17）、稜が完全に消失し、口縁端部を丸く収めるもの（18・19）があり、型式差がある。天井部のヘラケズリはいずれも狭い範囲に留まり、ヘラ切り未調整のものはない。22・23は無蓋高杯の口縁部である。21は横瓶等の口縁部で、端部を面取りする。24は鉢で、焼け歪みが非常に大きいもの。25は甕の口縁部で、外面にヘラ描の波状文を施す。26は長頸壺で、体部下半をロクロケズリする。以上の遺物は、6世紀後葉から7世紀初頭に位置づけられる。27はS H 579出土の土師器甕で、口縁端部をつまみ上げている。

28～31はS H 586出土遺物である。28は甕の台部、30は有段高杯で、杯部の段はにぶく、緩やかに内湾し立ち上がる。31は上げ底状の壺底部で、この他にも多くの胴部細片があるが図示していない。いずれも古墳時代前期に位置づけられる。

② 柱穴出土遺物（32～38）

柱穴出土遺物は参考程度に示す。35・38を除けば、すべてS H 546・586周辺の柱穴である。32は台付甕の台部で、S H 586に伴うものであろう。35は古代の土師器甕で、胴部が球形を呈する。

③ 溝・土坑出土遺物（39～47）

39・40はS K 550の出土遺物である。39は台付甕の台部で、SH586からの混入遺物であろう。40は

須恵器杯で、立ち上がりが短い。41～45はS K 569出土遺物である。41・42は土師器甕で、口縁端部をつまみ上げている。

43・44は高杯脚部である。43は薄手で短脚のもの、44は長脚2段透しの高杯で、透孔は3方にあけられる。46はS K 574（S H 546竈）出土の土師器高杯である。47はS D 577出土のS字甕で、口縁部の屈曲、肩の張りは弱い。

④ 鍛冶関連遺物

49・54・55は鍛冶関連遺物である。四日市市西ヶ広遺跡、中野山遺跡、北山C遺跡など近隣の遺跡で古墳時代～古代の鍛冶関連遺物が出土していることを鑑み、共伴した古代以前の土器とともに図示することにした。ただし、S D 541・S D 604からは中世の土器も出土しており、S K 550が中世の鍛冶炉であると考えられるなど、ここに中世の所産を含んでいる可能性がある。あくまで参考程度に示すものである。

49・55は鍛冶滓の小片である。底面には酸化土砂が付着し、上面は平らである。滓が激しく流動した跡はなく、鍛錬鍛冶に伴うものであろう。54は輔羽口の先端である。僅かに鉍滓が付着しており、やや強く磁着する。口径はかなり小さいものであると考えられる。

⑤ 遺物包含層出土遺物（56～57）

56は須恵器壺の口縁部である。口縁はゆるやかに外反し、端部を面取りする。57は灰釉陶器の底部片である。

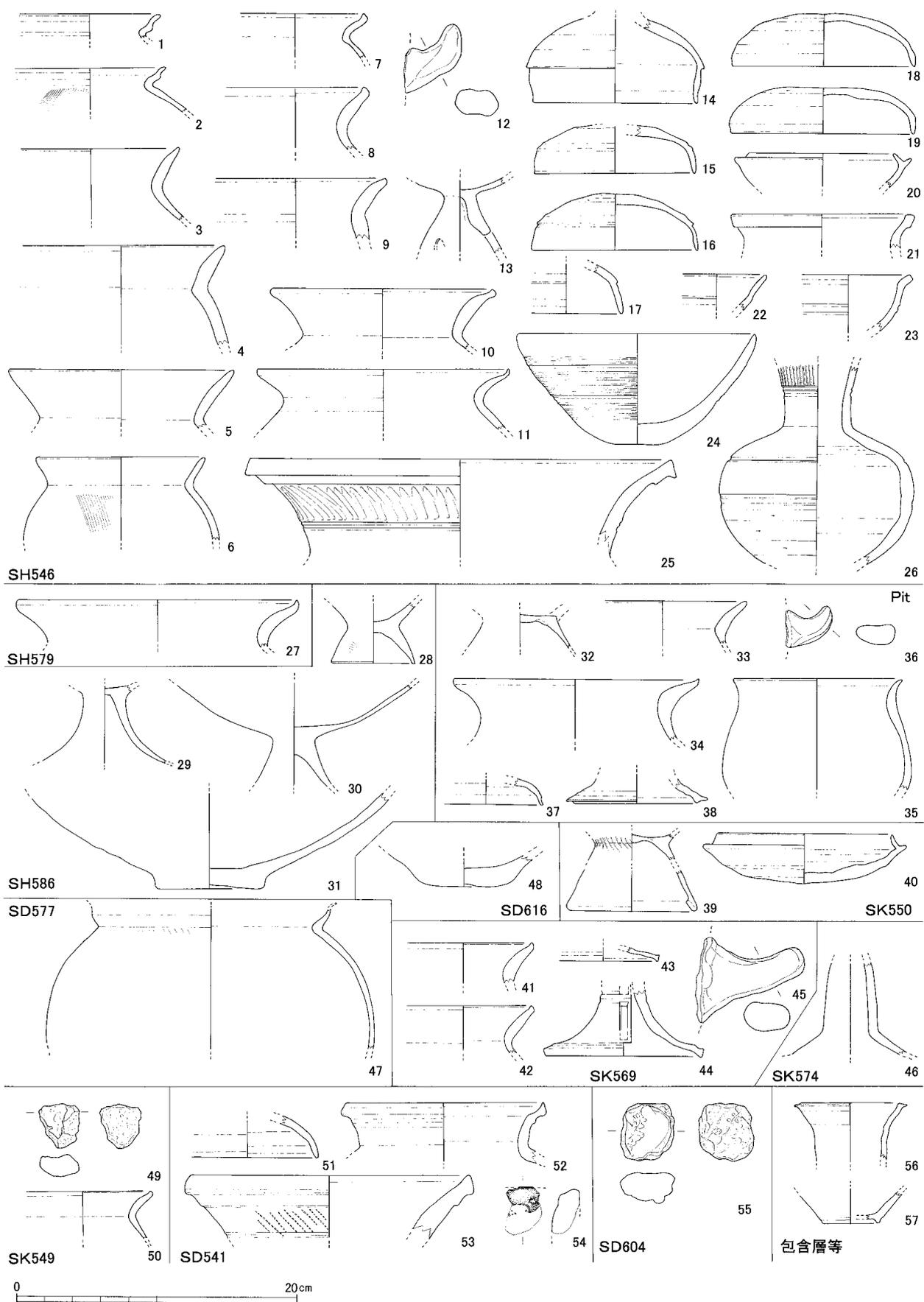
註

1) 遺物の編年観や名称等は下記文献による。

土師器：愛知県埋蔵文化財センター『廻間遺跡』1990年。
上村安生「宇田型甕衰退から伊勢型甕成立過程についての基礎的研究」『S字甕を考える』東海考古学フォーラム、2000年。

須恵器：田辺昭三『須恵器大成』角川書店、1982年。

尾野善裕「猿投窯（系）須恵器編年の再構築」『須恵器生産の出現から消滅』（第1分冊）、東海土器研究会、2000年。
四日市市遺跡調査会『西ヶ谷古窯跡群』1992年。



第33図 出土遺物実測図① (古墳時代~古代)

第3節 中世の遺物

第34～41図は中世の遺物である。

土師器皿・羽釜は伊藤編年Ⅲc期、瀬戸美濃は大窯1～2期に収まり、古瀬戸期や大窯3期以降の遺物のごく少ない。また、常滑（甕）は11型式に比定できるものが多い¹⁾。このように、本次調査の遺物は概ね16世紀前半に収まるものであり、伊坂城の廃城期とされる16世紀後半の遺物は非常に少ないのが特徴である。

①掘立柱建物、柵、柱穴出土遺物（第34図）

58～62はS B 625出土遺物である。58は瀬戸美濃播鉢で、縁帯をもち口縁部が直立するが、口縁部はあまり肥大化していない。大窯1期。61は安山岩製茶臼の下臼片である。遺跡近辺では見られない石材であり、搬入品の可能性が高い。62は砥石で、ホルンフェルス礫の一面を用いている。63はS B

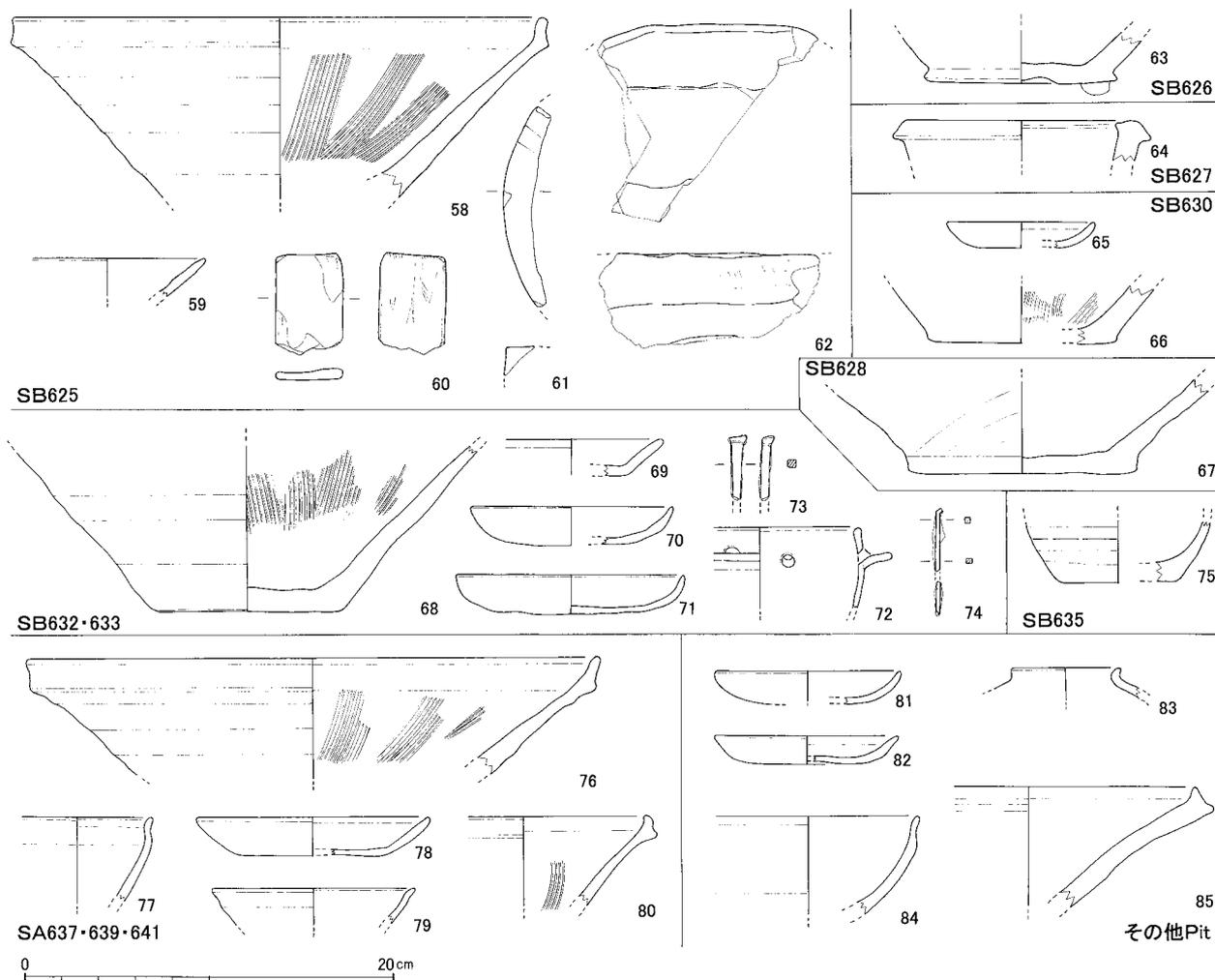
626出土の常滑鉢で、焼成は真焼。底面にトチンが溶着している。64は常滑11～12型式の壺で、強く焼き締まっている。65・66はS B 630出土遺物である。67はS B 628出土の常滑壺底部で、焼成は真焼。内外面ともナデで仕上げる。

68～74はS B 632・633出土遺物。土師器皿は器壁が厚く、口縁部が外反する69、内湾する70・71がある。

73は鉄釘で、鍛打で頭部を成形する。74は棒状の鉄製品である。

75はS B 635出土の瀬戸美濃鉄釉壺。

76～80は柵出土遺物である。76・77はS A 637出土遺物。76は瀬戸美濃播鉢で大窯1、77は天目茶碗で、鉄化粧は薄い。78は土師器皿。79は瀬戸美濃灰釉椀、80は瀬戸美濃播鉢で大窯1。



第34図 出土遺物実測図②（掘立柱建物・柵・柱穴）

81～85はその他の柱穴出土遺物である。83は瀬戸美濃鉄釉壺。84は天目茶碗で、底部は露胎。85は常滑鉢で、口縁端部を強く上方に突出させる。

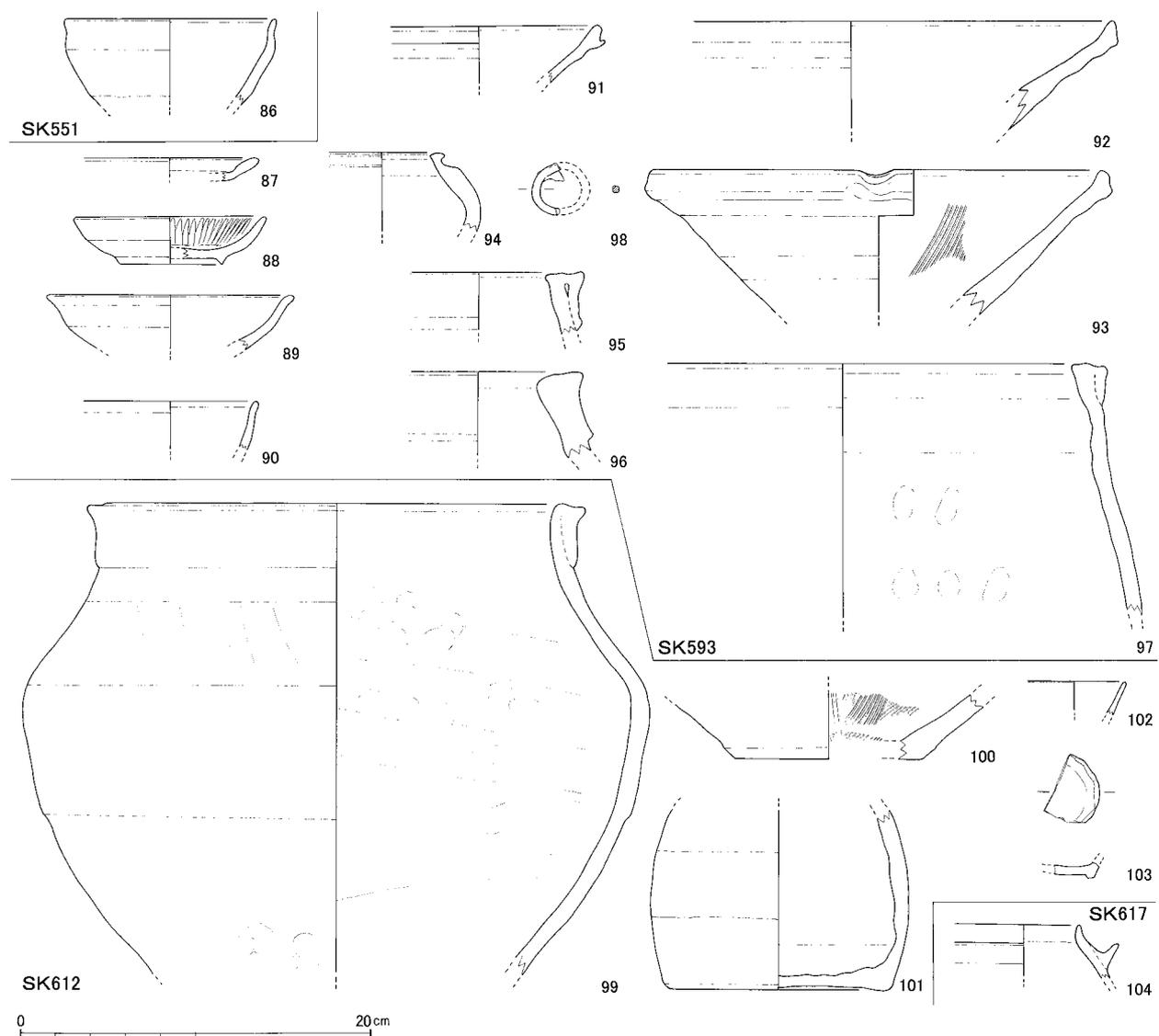
②方形土坑出土遺物（第35図）

86はS K 551出土の天目茶碗で、鉄化粧の錆釉は濃い。87～98はS K 593出土遺物である。遺物量はさほど多くないが、瀬戸美濃大窯1期の陶器と、常滑11期の甕が伴う例として注目される。

87は土師器皿で、口縁部が外側に開く厚手のもの。88～93は瀬戸美濃陶器である。88は内削ぎの灰釉丸皿で、高台内には輪トチンが溶着している。89は灰釉皿、90は天目茶碗。91～93は播鉢で、いずれも口縁部が縁帯化する以前のものである。91

は古瀬戸IV段階か。94～97は常滑製品である。94は肩衝鉢で、硬く焼き締め自然釉が顕著である。95～97は甕で、いずれも軟質のものである。口縁部の退化が進み、折り返しのみとなる。95・97は口縁端部が内側にやや突出している。98は環状の鉄製品である。

99～103はS K 612出土遺物である。99は常滑甕で、10～11型式。焼成は良く、内外面とも暗灰色を呈する。101は瀬戸美濃の鉄釉徳利である。内外面とも鉄化粧し、体部上半は鉄釉掛けとする。102は白磁小杯の口縁部片だが、後世の混入遺物かもしれない。103は天目茶碗を転用した加工円盤である。鉄化粧の錆釉は濃い。



第35図 出土遺物実測図③（方形土坑）

104はS K 617出土の羽釜である。やや厚手で、口縁端部や羽の先を鋭く屈曲させる。

③集石土坑出土遺物（第36図）

墓葬に関わる遺物は、S K 622を除き得られていない。105はS K 520出土の土師器皿、106はSK553出土の瀬戸美濃天目茶碗で、錆釉は濃い。107は花崗岩製の石臼である。

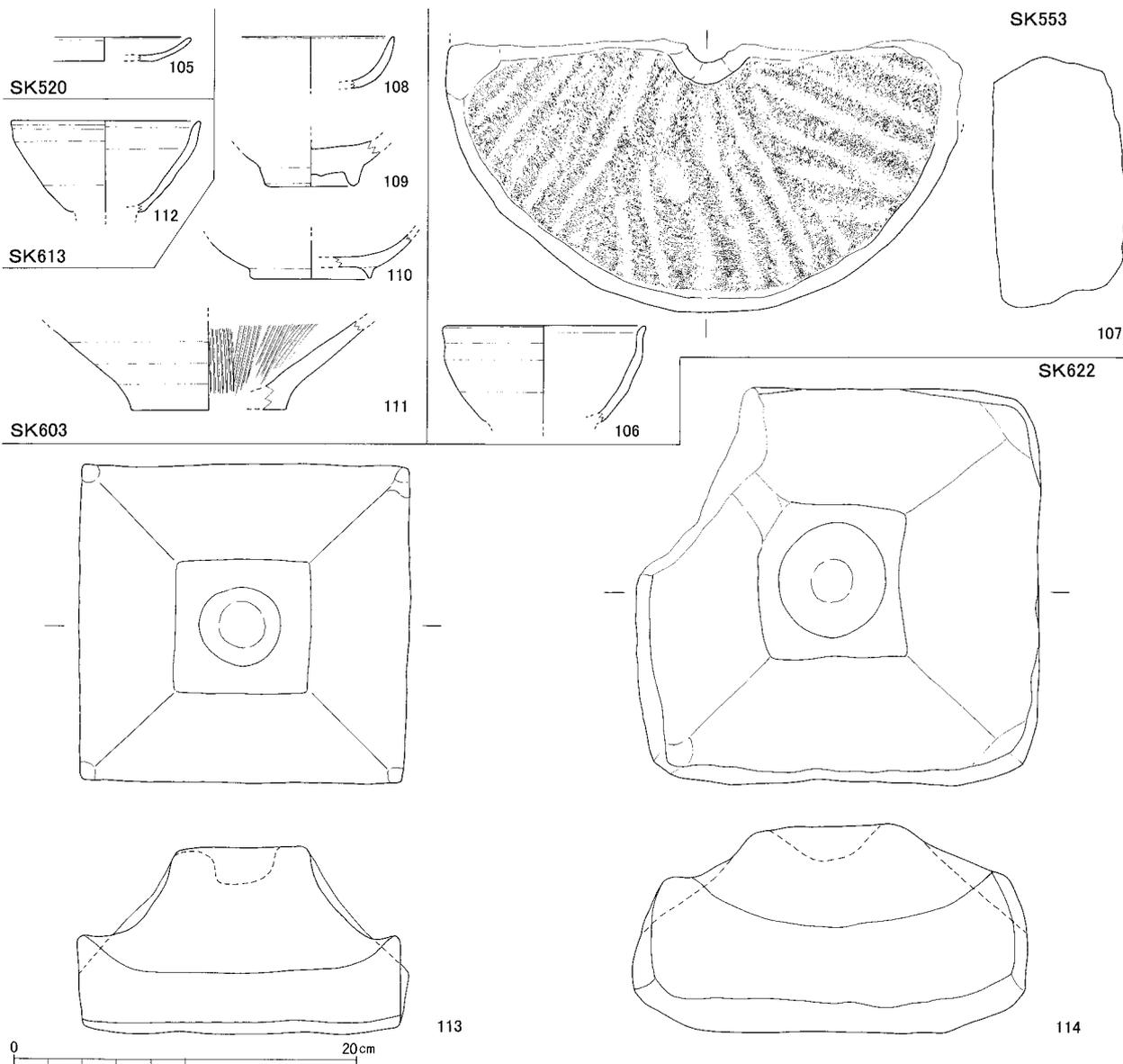
108～111はS K 603出土遺物である。108は土師器皿でやや深い。109は青磁碗である。見込みに草花が刻印されているが、釉が厚いため細部は判別できない。高台畳付は施釉されている。110は尾張5型式の山茶碗で、混入遺物である。

112はS K 613出土の天目茶碗。体部が直線的に

のびる。底部外面の鉄化粧は濃い。

113・114はS K 622出土遺物で、いずれも五輪塔の火輪である。113は塩基性の火成岩（玄武岩か）を用い、色調は緑色を呈する。軒先が直立し、造りが精緻である。全体に丸ノミ叩き痕が目立つが、仕上げは細かな平ノミ叩きによっている。底面は据付時の摩滅が顕著である。114は花崗岩製で、軒の表現や柄の掘り込みが甘く、全体的に丸みが強い。底面～軒部には川原石の自然面が残っており、川原石の円礫を原材としていることがうかがえる。また、全面に丸ノミ叩き痕がみられる。員弁川流域に多くみられるタイプのものである。

④その他の土坑出土遺物（第37～39図）



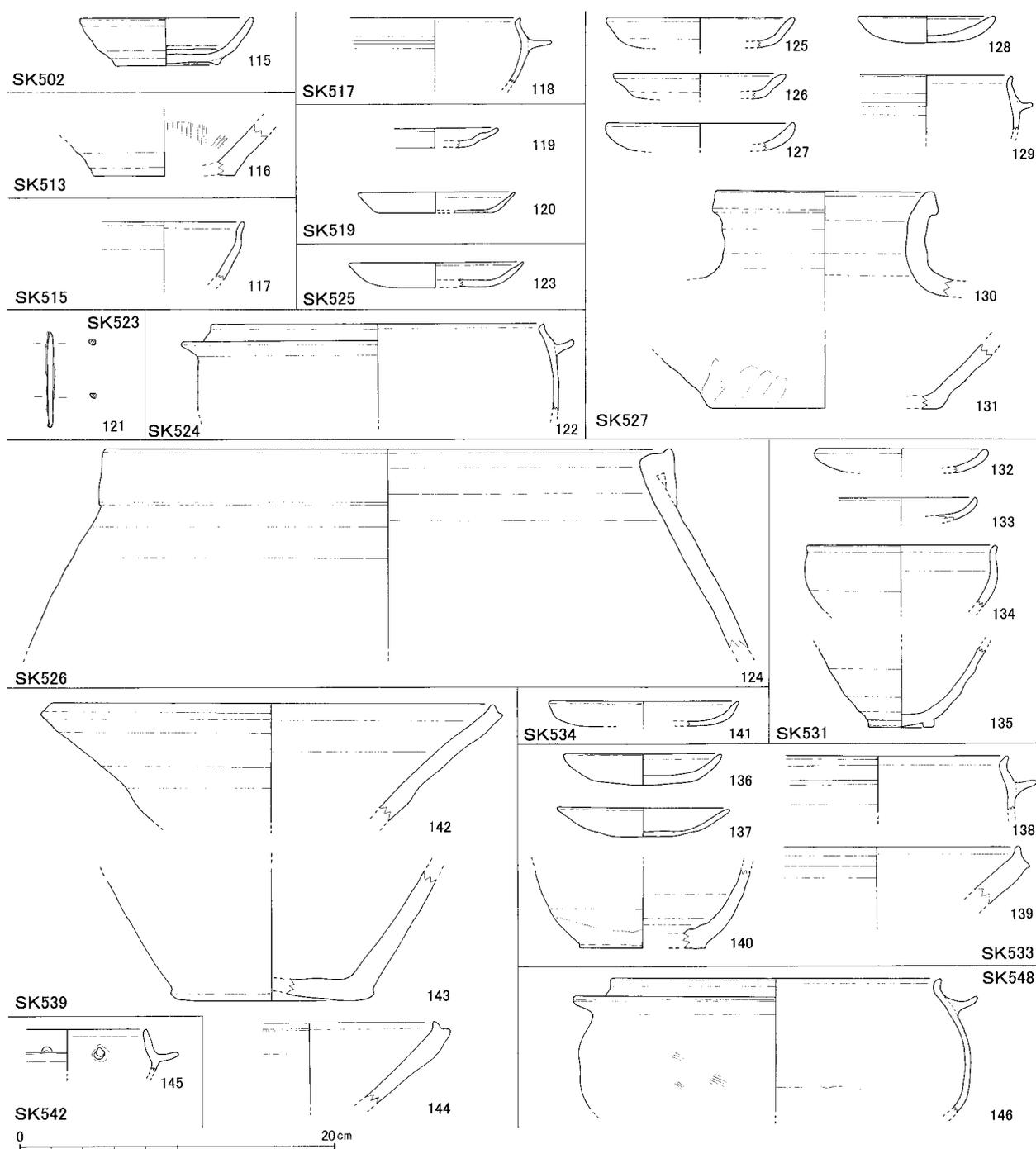
第36図 出土遺物実測図④（集石土坑）

115はS K 502出土の瀬戸美濃灰釉丸皿で、内面に二重の圈線をもち、底部には輪トチンが付着している。大窯2期に位置づけられよう。S K 502は土塁S A 501の除去後に検出した遺構であり、土塁の築造時期は16世紀中葉以降であると考えられる。

121はS K 523出土の鉄製品。124は11型式の常滑甕で、S K 526出土。

S K 527からは、土師器皿の細片が数多く出土し

た(125~128)。全形の復元は困難であったので、口縁部形態のバラエティを示すよう努めた。130は常滑の玉縁口縁壺である。よく焼き締まり、外面は自然釉で覆われる。口縁の肥厚が弱いことから、11~12型式のものともみておきたい。本次調査の出土品では、肩衝鉢や玉縁口縁壺など、小型品・茶器類は強く焼き締まり、自然釉が厚くかかるのが特徴的である。窯詰め位置の調整などによる、甕鉢類との



第37図 出土遺物実測図⑤(その他の土坑)

作り分けがあったのではなかろうか。131は常滑鉢で、内面は使用による摩滅が著しい。

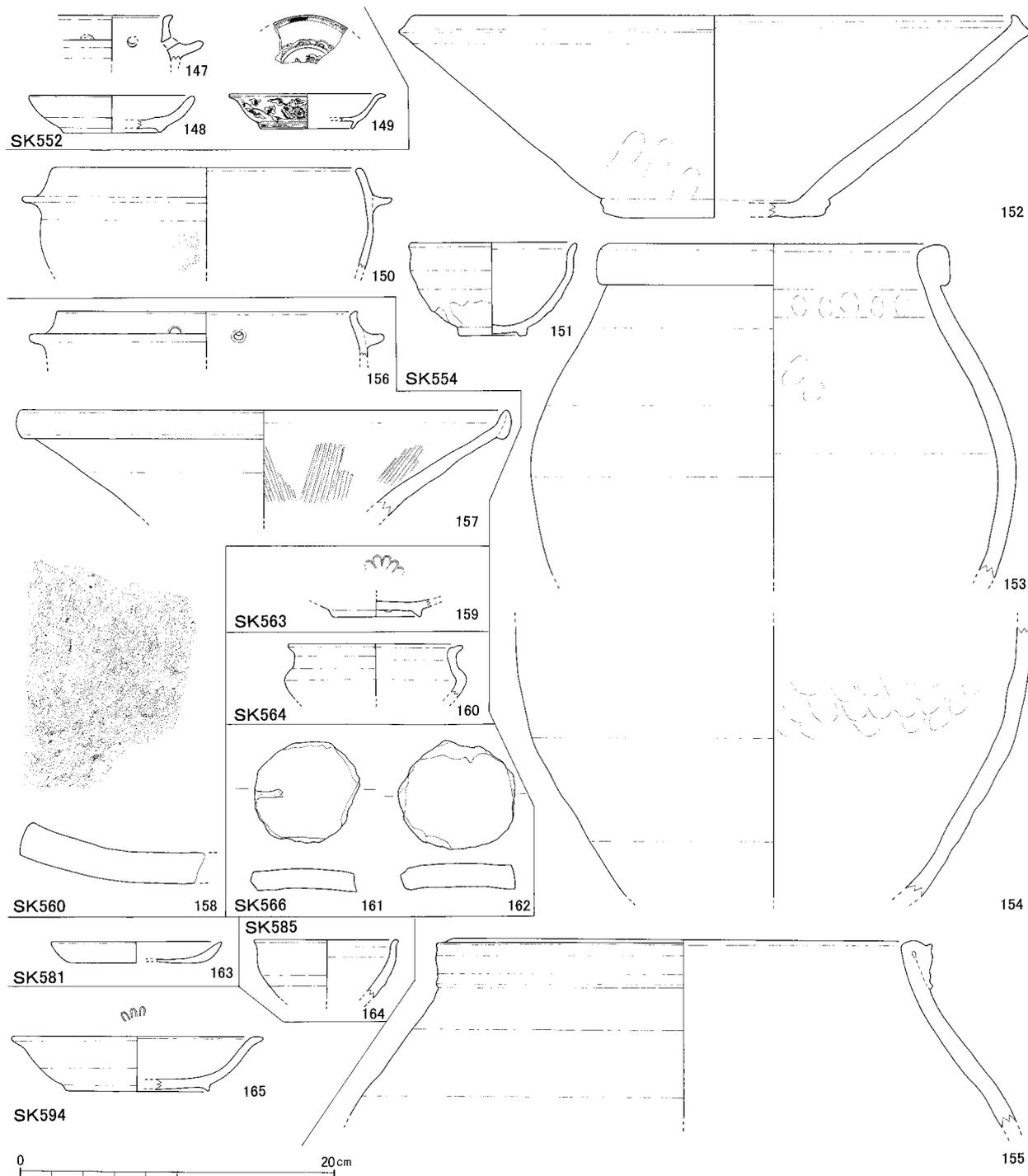
132～135はS K 531出土遺物である。135は天目茶碗で、小ぶりの輪高台をもつ。大窯1～2。

136～140はS K 533出土遺物である。136は厚手の土師器皿で口縁部が内湾する。137は器壁が薄く、口縁端部を尖らせるシャープな造りである。139は常滑鉢で、口縁端部を上方につまみ上げる。

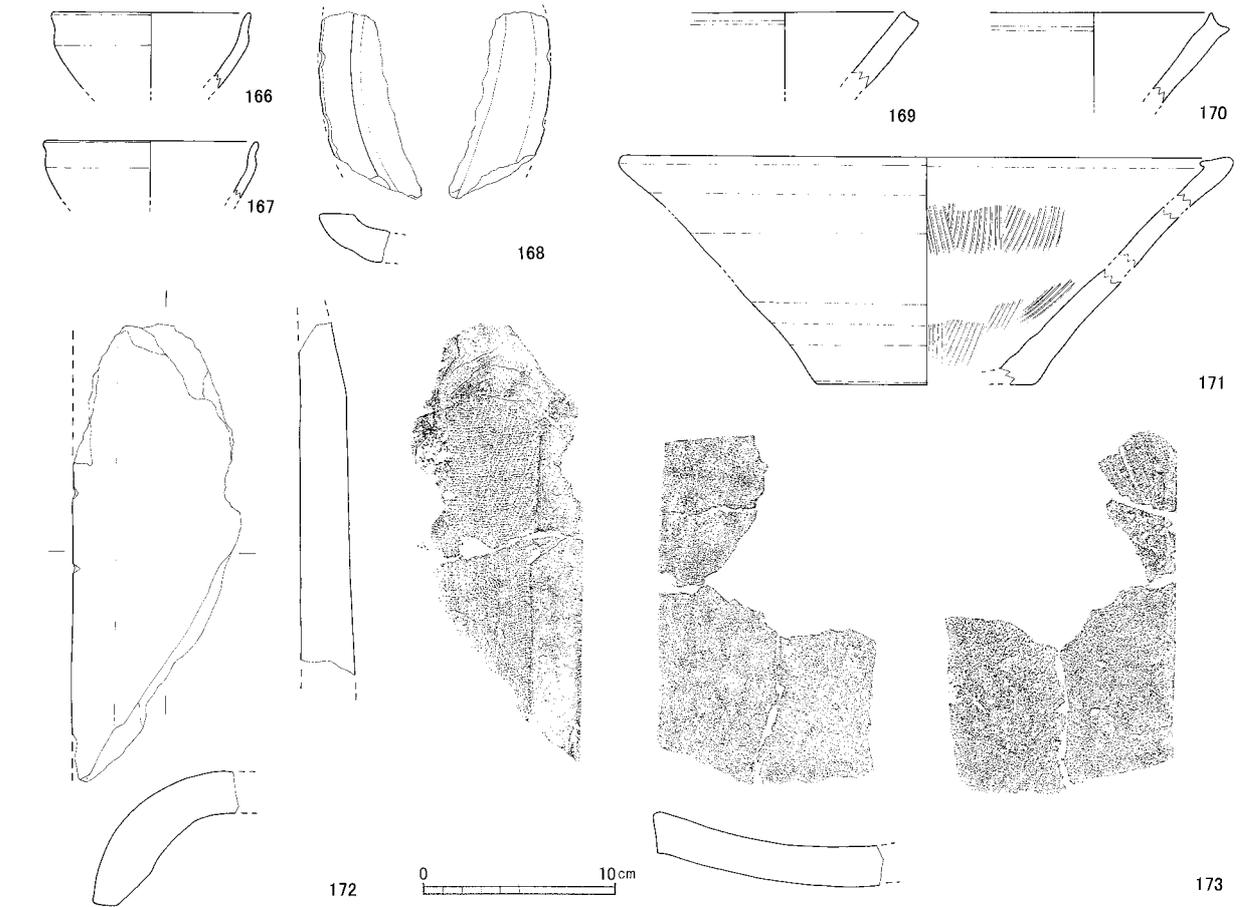
140は瀬戸美濃鉄釉壺。

142～144はS K 539から出土した常滑焼である。142・144は鉢で内面の摩滅が著しい。143は甕または壺底部で、焼成はよく堅緻である。146はS K 548出土の羽釜で、口縁部は内傾し、口縁から羽はナデにより強く屈曲する。

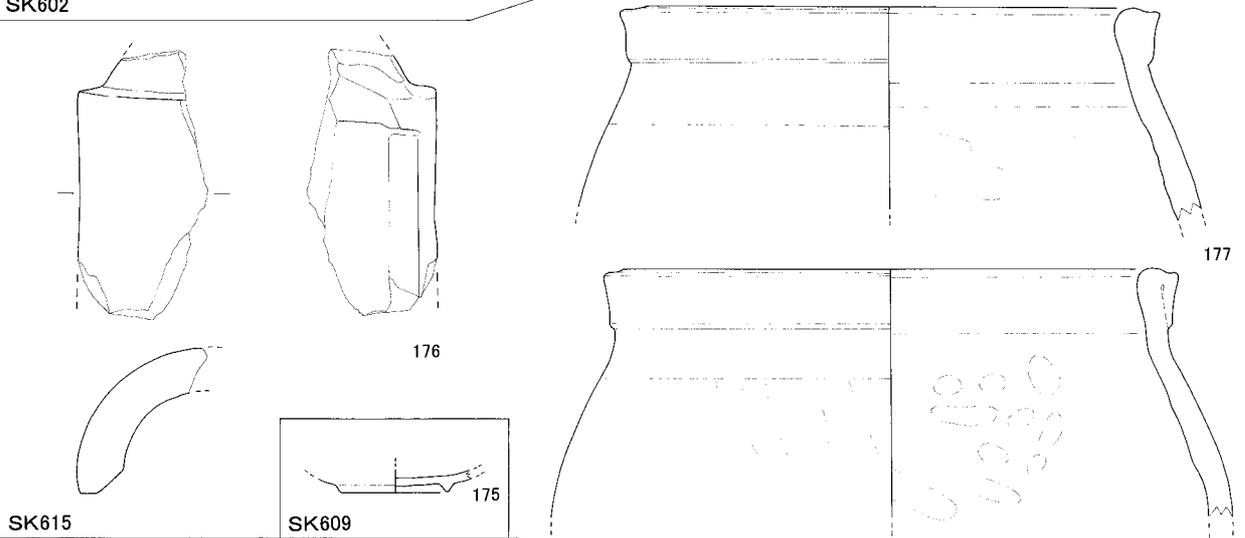
147～149はS K 552出土遺物である。148は灰釉丸皿だが、焼成が甘く釉が溶けていない。149は



第38図 出土遺物実測図⑥（その他の土坑）

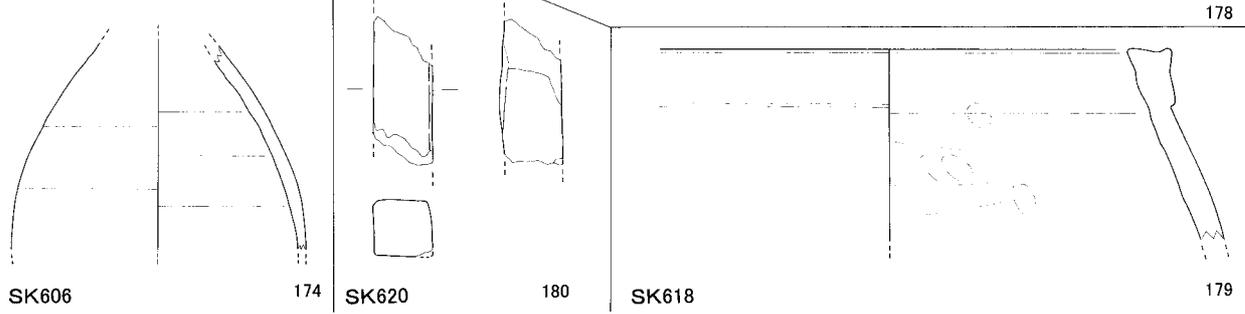


SK602



SK615

SK609

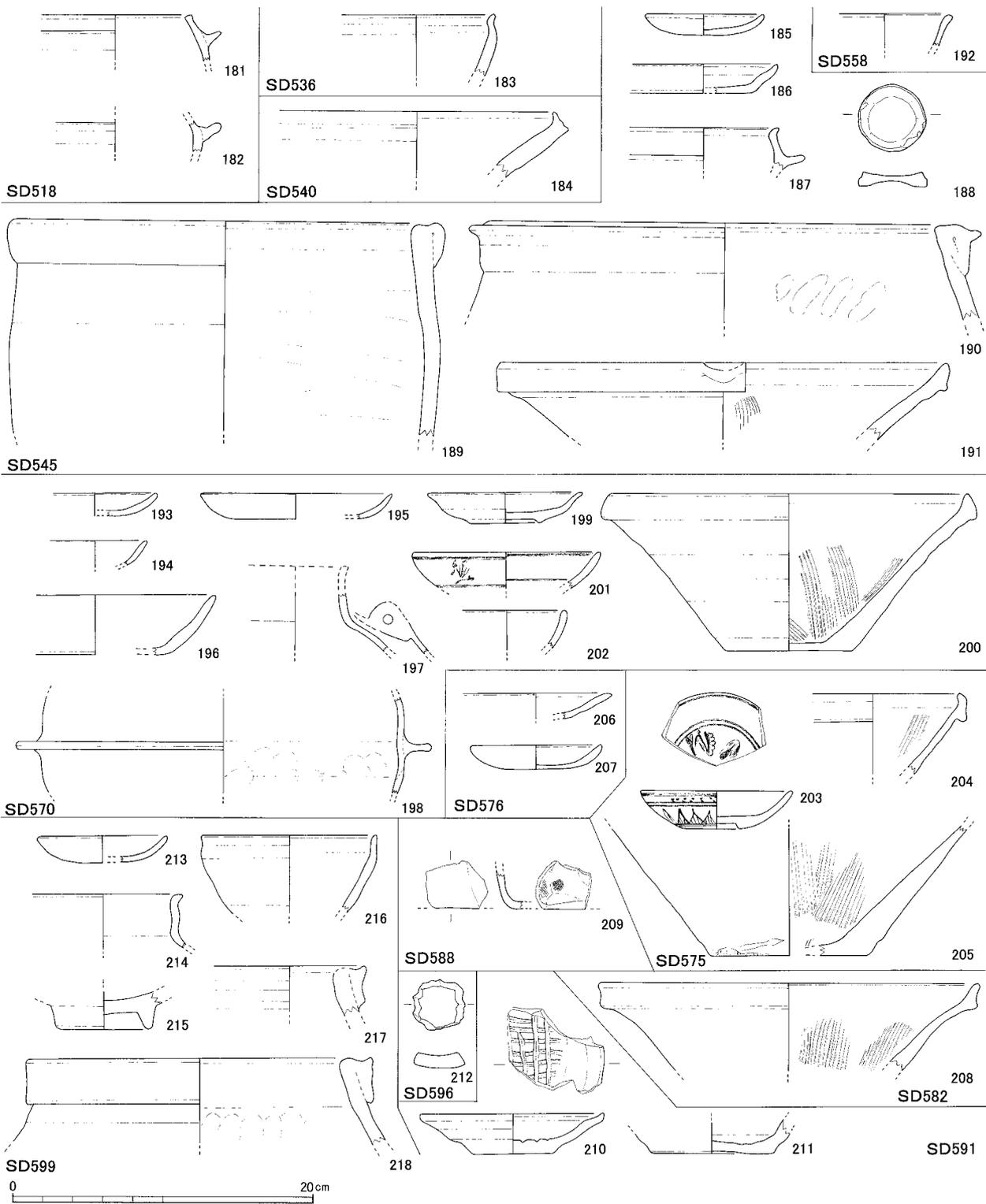


SK606

SK620

SK618

第39図 出土遺物実測図⑦ (その他の土坑)



第40図 出土遺物実測図⑧ (溝)

染付の端反皿で、外面に蓮花・唐草文をあしらう。胎土は緻密で、高台畳付は釉剥ぎする。森分類のII a類に相当する。

150～155はS K 554出土遺物である。150は羽釜、151は瀬戸美濃天目茶碗で、輪高台のもの。大窯1期。152は常滑鉢で、口縁端部をやや内側につまみ上げ、外側はナデにより僅かに拡張する。内面の摩滅は著しい。153は常滑広口壺である。非常に硬く焼き締まり、外面には乳白色の自然釉が固着している。155は甕で11型式。156～158はS K 560出土遺物。157は瀬戸美濃播鉢で、口縁部を折り返して肥厚させる。大窯2。

159は瀬戸美濃灰釉皿で、見込みに印花文。160は瀬戸美濃の袴腰形香炉。161・162はS K 566出土の加工円盤である。いずれも軟質の常滑甕を転用している。164は天目茶碗で、底部の錆釉は薄い。165は瀬戸美濃端反皿で、灰釉の溶けが悪く白濁色を呈する。大窯2。

166～173はS K 602出土遺物である。166・167は天目茶碗、168は茶臼の下白受皿片で安山岩製。61と同一の石材であり、搬入品の可能性が高い。169・170は常滑鉢で、口縁端部の摘み上げは弱い。

171は瀬戸美濃播鉢で、大窯2。172は丸瓦で、凹面には布目・コビキAがみられる。173は平瓦で、凹・凸面ともナデで仕上げる。172・173とも燻しはない。

174はS K 606出土の瀬戸美濃鉄釉壺。175は灰釉皿である。

176～178はS K 615出土遺物である。176は丸瓦で、凹面にはコビキがみられる。177・178は常滑甕で、11型式。口縁端部内面は丸く収める。

179はS K 618出土の常滑甕で、177・178に比べて口縁端部内面が稜をもつことから、やや新しく位置づけられる。180はS K 620出土の砥石でホルンフェルス製。

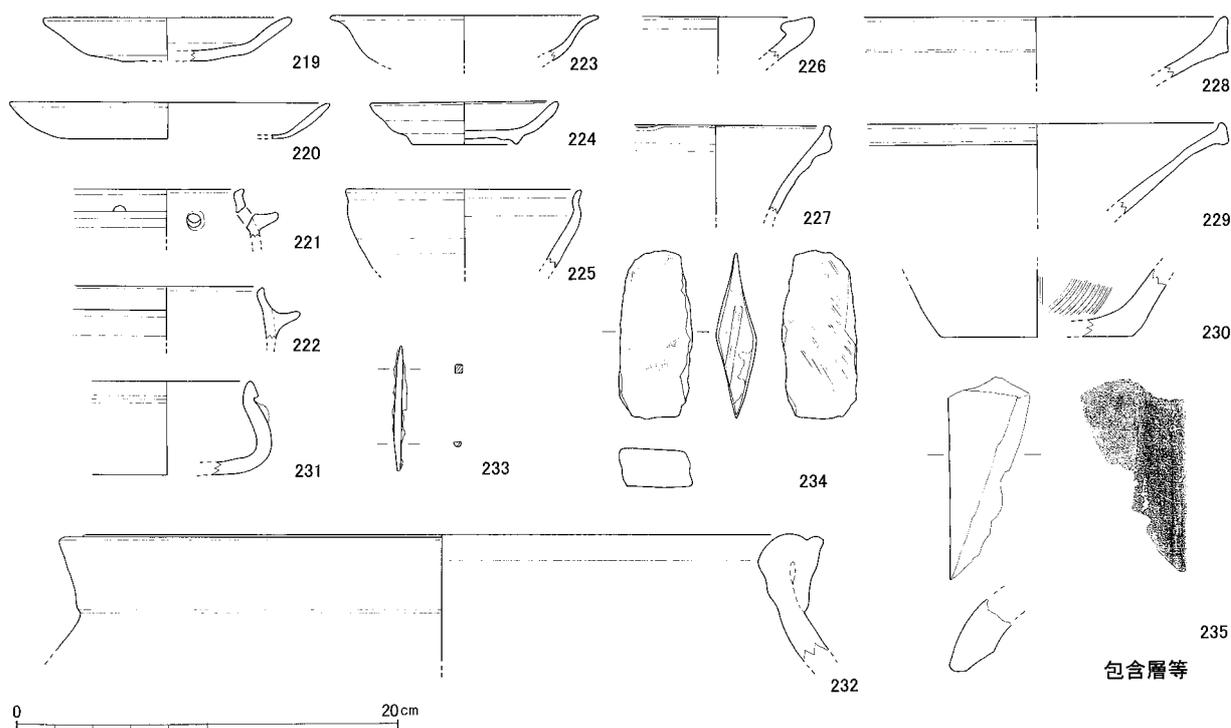
⑤溝出土遺物（第40図）

181・182は羽釜、183は天目茶碗、184は常滑鉢で、口縁端部のつまみ上げが顕著にみられる。

185～191はS D 545出土遺物である。188は加工円盤。錆釉が濃く、内反り高台の天目茶碗を転用している。189は常滑甕で軟質のもの。11型式。190は常滑甕で焼成は良い。191は瀬戸美濃播鉢で、口縁部が僅かに垂下し縁帯化している。大窯1期。

192はS D 558出土の青磁碗口縁部片。

193～202はS D 570出土遺物。196は深手の土師



第41図 出土遺物実測図⑨（包含層等）

器皿。197・198は茶釜。199は瀬戸美濃鉄釉皿で、小さい貼付高台が付く。200は瀬戸美濃播鉢で内面は摩滅が著しい。大窯2期。201は粗製の磁器染付皿である。陶胎で釉の貫入が顕著。202は白磁椀。

203～205はS D 575出土遺物である。203は磁器染付の粗製皿で、外面に三角帯文、内面に草花をあしらう。高台畳付の釉は剥ぎ取っている。釉に透明感はない(森I b類)。

206・207はS D 576出土の土師器皿である。206は口縁部が外反するが、207は内湾し口径も小さい。208はS D 582出土の瀬戸美濃播鉢で大窯1期。

209はS D 588から出土した土製品である。内面には布目圧痕があり、胎土は精良で焼成も良い。近世の型作り成形の玩具類かもしれない。

210はS D 591出土の瀬戸美濃灰釉卸皿で、古瀬戸IV期のものである。211は瀬戸美濃壺。212は瀬戸美濃天目茶碗の体部を転用した加工円盤である。

213～218はS D 599出土遺物である。213は土師器皿で、口縁部が内湾する。214は茶釜の口縁である。215は白磁椀で、高台畳付は露胎。216は瀬戸美濃天目茶碗で鉄化粧には薄い錆釉を用いている。217・218は常滑甕で11型式。

⑥遺物包含層・表土等出土遺物(第41図)

219・220は土師器皿である。220は口径17cmを測る大型の皿で、全面に漆とみられる皮膜が付着している。パレットに用いられたものか。221・222は羽釜である。223・224は灰釉皿、225は天目茶碗。226～230は瀬戸美濃播鉢で概ね大窯1～2、231は常滑の肩衝鉢で94と同様のもの。232は常滑甕で11型式。233は釘状の鉄製品で、断面は方形を呈する。234は淡緑色の凝灰岩製砥石で、断面は菱形を呈し、側面には筋状の研磨痕をもつ。235は丸瓦で、内面に布目圧痕が残る。

(櫻井)

註

1) 遺物の編年観や名称等は下記文献による。

・土師器：伊藤裕偉「中北勢地域の中世土器」『三重県史資料編 考古1』三重県、2005年。

・瀬戸美濃：藤澤良祐「瀬戸・美濃大窯編年の再検討」『瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要』第10輯、瀬戸市埋

蔵文化財センター、2002年。

・常滑：中野晴久「渥美・常滑」『中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～』(発表要旨集)2005年。

・輸入磁器：森毅「遺物」『16世紀後半から17世紀初頭の陶磁器』『難波宮址の研究』第9、大阪市文化財協会、1992年。

・續伸一郎「中世後期の貿易陶磁器」『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社、1995年。

・三杉隆敏・榎原昭二編『陶磁器染付文様辞典』柏書房、1998年。

・石製品：竹田憲治「伊勢の石塔」『東海地域における中世石塔の出現と展開』石造物研究会、2009年。

・三重県埋蔵文化財センター『西ヶ広遺跡(第3・4次)発掘調査報告』2006年。

第V章 総括

第1節 伊坂城跡における本調査地の位置

①古代以前の遺構

a：古墳時代の遺構と集落

古墳時代前・後期には、2～3棟の竪穴住居を1つの単位とした、分散的な居住のあり方を示している。谷を挟んだ北側の対岸に位置する伊坂遺跡においても、古墳時代前期（廻間Ⅲ～松河戸Ⅰ式）の竪穴住居が数棟確認されており¹⁾、単位集団が個別分散的に居住するパターンが共通して認められる。

弥生時代後期には、西ヶ広遺跡、山奥遺跡など大規模に展開、集住する集落が存在するが、こうした集落が古墳時代の当地周辺には見出せない。当該期の集落形態について、引き続き今後の調査で明らかにする必要がある。

b：古代の遺構

古代の遺構は確認できなかったが、若干の遺物が得られており、西ヶ広遺跡などから派生した建物などがわずかにみられる程度であったらう。

②中世の遺構

a：屋敷地の構造と性格

中世の遺構には、伊坂城跡に関連する複数の区画と土塁などの防御施設がある。このうち、区画の性格は屋敷地が想定され、既往の調査と合わせておよそ20前後の区画が想定できる（第42図）。

各区画は、丘陵尾根を方形や短冊形に整然と割り付け、3×4間程度の東西棟の主屋を中心とし、小屋とみられる小規模な建物や柱穴をもつ方形土坑を配する。礎石建物はみられない。建物の南面や東側には若干の空閑地があり、畑地などとして利用されたのであろう。このような屋敷地の基本的な構成は、平野部の一般集落と大きく変わるものではない。そのような屋敷地の性格は、出土遺物の構成にも現れている。各区画から茶臼、茶釜、天目等の茶器や染付等の輸入陶磁類が出土する点は特筆されるが、それらの数量は少なく、むしろ挿鉢や羽釜などの調理具・煮炊具を主体とする。土師器皿などの饗宴具が大量に出土することもない。また、区画AのSB

630には鍛冶関連遺構SK550を伴っており、居住者に職能民が含まれていたことを窺わせる。以上のことから、調査地周辺は、伊坂氏などの国人層を含む集落の成員が、15～16世紀にかけて日常的に生活する場であったと考えられよう。

一方、他の区画とは異なる性格が想定されるのは、区画Bである。当区画の掘立柱建物は、区画溝との関連性が低く、区画中央を走る道状遺構SD582を中心に、集石土坑SK520やSK585、533などの長方形土坑を複数配する点が特徴で、蔵骨器を有しない簡素な中世墓が、通路周辺に集中的に造られていた可能性を考えたい。また、推測の域を出ないものの、方形周溝状の溝SD538は中世墳墓の可能性があり、区画Bは集落外縁に形成された墓域もしくは宗教的な色彩の強い区画であると予想される。

b：集落出入り口としての防御性

防御施設は城館の重要な構成要素であり、本調査地では土塁・虎口がある。既往の調査地に比べ、集落出入り口としての防御性の高さが窺える。虎口は2度の折れをもち内折する。本例と同様に曲輪内部に土塁を築き、2度屈折させる虎口は、市場城をはじめ多くの例がある。また、伊坂城主郭の虎口も内折するくい違い虎口であり、本調査地との共通性が認められる。丘陵の地形や切岸をもっとも効率よく利用する形態として、永禄期以降にこのような虎口が多用されたのであろう。

また、区画A・Bの曲輪北縁は、他の区画に比べ北側に張り出しているが、これは登り口周辺を切岸により整形し、横矢を効かせることで防御性を高めるためであろう。一方、屋敷地の特定区画を土塁などで強固に防御する意図を読み取ることはできず、その役割は伊坂城の主郭が担っていたとみることができる。

このように、既往の調査地点は居住域として、城の主郭周辺は戦闘用としての機能分化が明確であり、今後主郭周辺へ調査が進むにつれ、居住域とは遺構・遺物の様相が大きく変わっていくとみられる。

なお、北勢地域における伊坂城跡、保々西城のような集落形態を「総構え」と呼ぶことがあるが²⁾、権力の集中や居館の成立を背景として戦国末期に発達するそれとは異なり、畿内における環濠集落のような防御性を備えた村落が、北勢地域に顕著な丘陵の地形や、国人層の比較的等質的な階層性のもとで丘陵上に顕在化した、「惣構」³⁾の一種として考えられるべきであろう。

第2節 伊坂城の改修をめぐる

①土塁の築造時期と先行する遺構

本次調査の大きな成果の一つに、土塁 S A 501 の築造時期に関する知見を得たことが挙げられる。土塁下層の S K 502 から瀬戸美濃大窯 2 期の灰釉皿が出土したことから、16 世紀中葉以降に土塁が整備され、虎口周辺の防御性が高められたと考えられる。

②区画の変遷と防御施設の改修

今回の調査では、遺構の先後関係を十分に把握できないケースが多かったが、土塁や道状遺構との関係において、わずかに区画機能の変遷をうかがうことができる。本書第 IV 章において、土塁 S A 501 は区画 B を構成する区画溝や柵を埋めて構築されており、墓域等の宗教的な区画が屋敷地として再整備された可能性を指摘した。また、S D 575 の掘削あるいは拡張に伴い、S B 633 は廃絶したと考えられることから、S D 575 が土塁の整備などと期を一にして、現状のように整備されたとした。以上のような区画の変遷については、やや根拠が弱く、推測に多くをよらなくてはならないが、区画機能の変化を伴う遺構・遺構群の改変が、16 世紀中葉以降、伊坂城の各所で行われていた可能性を提起したい。

③北勢の城館の改修時期をめぐる

土塁の築造時期に関する先の事実は、北勢の城館の築造時期と改修をめぐる議論に関連して重要である。高田徹氏によれば、北勢地域の城館は、軍事的な機能を突出させた主郭と整然と区画された屋敷群を総構えで囲い、一個の完結した空間構成を取る点に大きな共通点がみられるという¹⁾。このうち、市場城や北山城には比較的新しい曲輪の構造がみられるとし、これを「市場城タイプ」と呼んだ。「市場城タイプ」には、天正 12 (1584) 年の小牧・長久手

註

- 1) 三重県埋蔵文化財センター『伊坂窯跡・伊坂遺跡(第 5 次)発掘調査報告』2011 年。
- 2) 高田徹「織豊期における北伊勢四郡の城館」『中世城郭研究』第 8 号、1994 年。
- 3) 福島克彦「戦国期畿内の城館と集落」『新視点中世城郭研究論集』新人物往来社、2002 年。

合戦の際、織田信雄により改修を受けたと文献に伝えられる萱生城が含まれており、当該期の社会的緊張を背景として、天正後期に北勢四郡の城館の改修が行われたとしている。

一方で高田氏は、曲輪の構造などから、伊坂城を市場城タイプに先行する「采女城タイプ」に含め、天正前期まで、つまり永禄期の信長伊勢侵攻から滝川一益期における在地領主の衰亡までの城館であるとした。こうした城館の編年観は、伊坂城が永禄 11 (1568) 年に滅し、伊坂氏が信長に帰順したと伝える記録類とも矛盾するものではない。ただし、現存の遺構から改修の痕跡が読み取れる采女城に対して、伊坂城は「主郭に比高差が近似する部分を削り残し、且つ主郭が方形を呈して複雑な虎口を造り出す」点から、現状の遺構が改修を繰り返したのではなく、当初からの一貫した縄張りにより、一時期に構築されたものと結論づけている。

今回の調査成果は、こうした城館の築造時期や改修の有無についての所見に示唆を与えるものであり、伊坂城においても 16 世紀中葉以降に土塁の構築が行われ、かつ、区画 B のように屋敷地の再編が行われた可能性がある。伊坂城の居住域における防御施設の改修と同様、伊坂城主郭周辺の土塁等が築造当初の姿を保っているのか否か、さらには天正後期以降の改修がなかったのか、今後の主郭周辺の調査で検証していく必要がある。

註

- 1) 高田徹「織豊期における北伊勢四郡の城館」『中世城郭研究』第 8 号、1994 年。



第42図 伊坂城跡調査全体図 (1:1000)

第3節 出土遺物の特徴

①土器・陶磁器の組成と時期

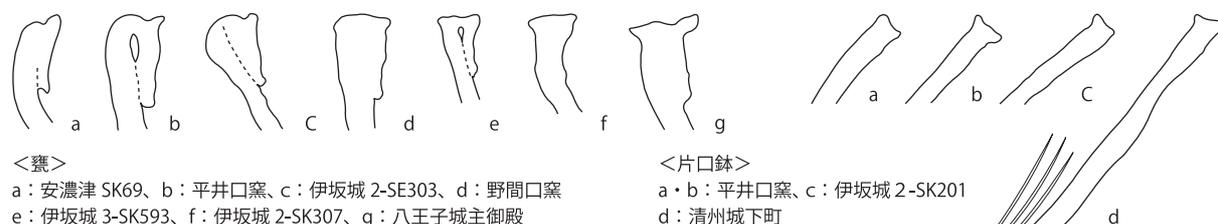
伊坂城における土器・陶磁器の組成は、すでに前報告書で指摘されているように、陶磁器を主体として、土師器等の在来系土器が伴う点に特徴がある。遺構によっては若干土師器皿の出土量が多いSK527のような例があるものの、饗膳具が集中して出土する様子はなく、北勢地域の一般的な様相を示している。その他、茶釜や天目、茶臼等の嗜好品や、輸入陶磁の出土が特筆されるが、出土量は少ない。

主体となる遺物の時期は、既往の調査と同様、北勢系の土師器皿・羽釜は伊藤編年Ⅲc期、瀬戸美濃産陶器は大窯1～2期、輸入陶磁¹⁾は青磁碗・粗製の染付皿などから16世紀前半に位置づけられる。信長の侵攻にともなう北勢地域の緊張期であり、伊坂城が廃絶する16世紀後半の遺物量は非常に少ない。この廃城期の遺物量が少ないという現象は、中世城館に通有のことであり、伊坂城においても廃城や非常時における家財道具の持ち出し、あるいは財の隠匿が行われた可能性を示唆する。

②常滑編年と伊坂城跡出土の常滑焼

さて、上記のような遺物の時期的な構成は、既往の常滑編年にも一石を投げかける。中野晴久氏は、伊坂城跡で出土した軟質焼成の片口鉢を、近世赤物に通じる過渡期の製品として、中世常滑の最末期(12型式)に位置づけた²⁾。ところが、当の伊坂城跡においては16世紀後半の遺物が非常に少ないという問題があり、伊坂城跡の資料をそのまま12型式に位置付けることはできない。

そこで、常滑焼の編年の位置を再確認するため、伊坂城跡の事例を中心として口縁部の形状を指標に分類し(第43図)、甕・片口鉢口縁部の変遷過程と、瀬戸美濃産陶器等との共伴関係を確認した(第2表)。



第43図 常滑形態分類図(1:4)

甕口縁はN字状口縁が退化し、口縁端部内面が徐々に突出していく過程として捉えられる。aは中野9型式、b・cは10、d・eは11型式、f・gは12型式に相当する。片口鉢はナデによる口縁端部の突出、あるいは退化の過程であり、平井口窯における分類を踏襲した³⁾。これに、口縁端部が平坦化し、内面に1本の摺目をもつ近世的なものを加え、dとした。aは9型式以前、bは10～11型式、c・dは12型式に相当する。

さて、消費地出土資料は、伝世や長期使用といったバイアスを含むという問題があるものの、伊坂城跡出土資料に関しては次の2点が指摘できよう。

A: 片口鉢c類は、瀬戸美濃大窯1期・常滑11型式の甕と共伴する。

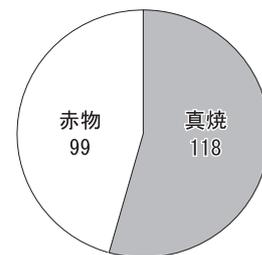
B: 伊坂城跡では、大窯2～3以降、12型式の甕に伴う片口鉢が明確でなく、鉢d類は出土例がない。

このような資料の現状から、伊坂城跡出土片口鉢は、常滑11型式の範疇に含めるべきであると考えるのである。なお、中野氏が12型式の標式資料とした伊坂城跡2次SK201の片口鉢は、同じく11型式の標式資料に挙げられた甕と共伴するものであり、この点でも、片口鉢と甕のセット関係を再考する必要がある。また、常滑の焼成具合をみると、堅緻でよく焼き締まる「真焼」・軟質焼成の「赤物」の比率は、赤物が約4割強を占めており(第44図)、清洲城下町遺跡の城下町Ⅱ期の様相に近いことが指摘できる⁴⁾。このことも、伊坂城跡の常滑甕・片口鉢が11型式に相当するという所見に矛盾しない。

この中野11型式の片口鉢をめぐるのは、標式資料である野間口窯の位置づけが問題となろう。当該資料は口縁部b類にあたり、築瀬裕一氏が指摘するように、型式学的には10型式の範疇に収めるべきであると考え⁵⁾。

第2表 常滑甕・片口鉢の変遷表

出土資料	土師器 伊藤	瀬戸美濃 藤澤	常滑(甕) 中野	甕							片口鉢					
				a	b	c	d	e	f	g	a	b	c	d		
安濃津SK69	III a	古瀬戸後Ⅱ～Ⅲ	9	■												
安濃津SZ60	III b	古瀬戸後Ⅳ	10		■											
安濃津SK192	III b	古瀬戸後Ⅳ														
西ヶ広	III b	古瀬戸後Ⅳ														
伊坂城跡2-SE303	III c	大窯1～2	10			■										
伊坂城跡3-SK554	III c	大窯1	11				■									
伊坂城跡2-SK201		大窯1	11					■								
伊坂城跡3-SK593	III c	大窯1	11						■							
伊坂城跡2-SK307	III d	大窯2～3	12							■						
伊坂城跡2-SK334	III d		12								■					
清洲城下町(Ⅲ期)		大窯4	12													■



第44図 常滑真焼・赤物の比率

③石製品の生産と流通

伊坂城出土の石製品には在地石材を使用するもの
の他、搬入品が多くみられる。搬入品には茶臼、凝
灰岩製砥石があり、尾張・美濃の事例などから、広
域流通品である可能性が高いと考えられる。

この他特筆すべきことに、石塔類の石材に関する
新たな知見がある。北勢地域周辺の五輪塔や宝篋印
塔に利用される石材は、「^{こうついし}河戸石」と俗称され、広
域的に流通した可能性が指摘されている⁶⁾。この
近世以降大いに利用された河戸石とは、養老山地周
辺の北勢南濃層群に産する硬質砂岩のことで、石基
が暗灰色で、円磨度の高い黒色の泥岩粒を頻繁に含
むという特徴がある。また、鉱物組成では石英・長
石が約8割を占めている⁷⁾。

ところが、既往の調査も含めた伊坂城跡の五輪塔
の石材は、花崗岩を除けばいずれも塩基性の火成岩
であることがわかった。同様の製品は四日市市米田
遺跡でも出土しており⁸⁾、伊勢湾岸を中心に分布
すると推測される。これと対照的に、員弁周辺では
花崗岩製品が卓越する。前者の石材故地の候補には、
北勢地域の緑色岩帯が挙げられるが、これまでに石
丁場の存在は知られていない。これら石塔類が、特
定の石材産地から一元的に流通したのか、多角的・

在地的な多様性を示すのか、石材の観察が可能な出
土資料をもとに検討を進める必要があるだろう。

註

- 1) 小野正敏「15、16世紀の染付碗、皿の分類とその年代」『貿易陶磁研究』2、1982年。
- 2) 中野晴久「渥美・常滑」『中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～』（発表要旨集）2005年、同「常滑窯の研究～近世赤物について～」『知多古文化研究』10、1996年。
- 3) 榎崎彰一・青木修「常滑窯研究報告1」『瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要』7、1999年。
- 4) 鈴木正貴「清洲城下町の遺物様相」『清洲城下町遺跡』IV、愛知県埋蔵文化財センター、1995年。
- 5) 築瀬裕一「中世後期の片口鉢の編年について」『芹沢長介先生追悼 考古・民族・歴史学論叢』芹沢長介先生追悼論文集刊行会、2008年。
- 6) 竹田憲治「伊勢の石塔」『東海地域における中世石塔の出現と展開』石造物研究会、2009年。竹田氏は河戸石の広域流通について、なお検討を要するとしている。
- 7) 吉田史郎他『桑名地域の地質』地質調査所、1991年。
- 8) 四日市市遺跡調査会『米田遺跡』2000年。四日市市教育委員会のご厚意で資料を実見させていただいた。

第4節 今後の課題

現地の発掘調査では、城の改修を想定した上で、
建物の重複関係や区画溝との先後関係を十分に把握
できなかったことは反省点の一つである。今後は、
城の改修に伴う機能の変化や遺構群の時期変遷に重
点を置き、調査を進める必要がある。

遺物では、陶磁器を始めとする様々な遺物の様相
が明らかになってきたが、伊坂城跡の主郭周辺との
比較検討が課題である。常滑編年や石材の流通など
派生する問題も多いが、また稿を改めて論じたい。

(櫻井)

第3表 遺構一覧表

竪穴住居

遺構名	時期	調査区	グリッド	長 (m)	幅 (m)	深さ (m)	面積 (m ²)	備考・関連遺構
S H546	古墳後期	I 区	L-b8	5.0	4.4	0.2	22.0	竈 (S K574)
S H579	古墳後期	I 区	L-d5	6.0	5.9	0.1	35.4	
S H584	古墳～古代	I 区	L-h8	6.2	-	-	-	
S H586	古墳前期	I 区	L-c7	8.0	4.7	0.1	37.6	2棟の建物が重複か?

掘立柱建物

遺構名	時期	調査区	グリッド	梁×桁 (間)	梁行 (m)	桁行 (m)	面積 (m ²)	主軸方位	備考・関連遺構
S B624	中世	I 区	L-m5	3 × 3	3.6	4.0	14.4	N-30°-E	
S B625	中世	I 区	L-j5	3 × 6	6.3	13.6	85.6	N-78°-W	主屋、S K517(屋内土坑)
S B626	中世	I 区	L-k6	2 × 3	3.7	7.5	27.7	N-17°-W	
S B627	中世	I 区	L-k3	2 × 2	4.0	4.5	18.0	N-13°-E	土塁下層の遺構
S B628	中世	I 区	L-i8	2 × 3	3.9	5.7	22.2	N-26°-E	
S B629	中世	I 区	L-a4	3 × 3	5.1	6.5	33.1	N-52°-W	
S B630	中世	I 区	L-b6	3 × 4	6.0	9.3	55.8	N-65°-W	S K554 (屋内土坑)
S B631	中世	I 区	L-c9	3 × 3	6.5	7.3	47.4	N-62°-W	S K551 (屋内土坑)
S B632	中世	I 区	L-e11	2 × 4	3.5	8.0	28.0	N-61°-W	S K513・514 (屋内土坑)
S B633	中世	I 区	L-f10	3 × 3	4.5	4.8	21.6	N-61°-W	
S B634	中世	II 区	L-e16	2 × 4	3.8	8.8	33.4	N-31°-E	
S B635	中世	II 区	L-d17	2 × 4	4.6	8.5	39.1	N-68°-W	
S B643	中世	II 区	L-d17	2 × 4	4.1	7.6	31.1	N-68°-W	
S B656	中世	I 区	L-a16	- × 3	-	4.9	-	N-29°-E	

※主軸方位は座標北を基準とし、東西偏角90°以内で表示した。棟方向の判断がつかない場合は、南北方向を主軸とした。

土塁・柵

遺構名	時期	調査区	グリッド	長 (m)	幅 (m)	備考・関連遺構
S A501	中世	I 区	L-h2	21.4	7.2	土塁。下層に遺構あり
S A636	中世	I 区	L-n11	7.1	-	
S A637	中世	I 区	L-j5	11.8	-	
S A638	中世	I 区	L-j3	16.8	-	
S A639	中世	I 区	L-k5	17.8	-	
S A640	中世	I 区	L-k6	17.8	-	
S A641	中世	I 区	L-b6	7.8	-	
S A642	中世	I 区	L-c5	11.5	-	

方形土坑

遺構名	時期	調査区	グリッド	長 (m)	幅 (m)	深さ (m)	備考
S K528	中世	I 区	L-m12	2.7	2.3	0.45	
S K551	中世	I 区	L-d10	4.6	3.3	0.2	壁溝あり
S K593	中世	II 区	L-h21	2.8	2.2	0.4	
S K612	中世	II 区	L-f17	3.6	3.4	0.3	
S K617	中世	II 区	L-e16	3.0	2.2	0.1	長軸上に柱穴

集石土坑

遺構名	時期	調査区	グリッド	長 (m)	幅 (m)	深さ (m)	備考
S K 520	中世	I 区	L-k 8	2.0	1.6	0.3	
S K 553	中世	I 区	L-d 10	1.7	1.4	0.4	
S K 603	中世	II 区	L-f 18	1.5	1.3	0.4	
S K 613	中世	II 区	L-i 19	-	-	0.5	北側に集石 S X 655
S K 622	中世	II 区	L-e 18	0.9	0.8	0.3	五輪塔火輪を廃棄

その他の土坑

遺構名	時期	調査区	グリッド	長 (m)	幅 (m)	深さ (m)	備考
S K 502	中世	I 区	L-j 2	2.1	1.3	0.26	土壇墓か
S K 513	中世	I 区	L-f 12	2.2	1.6	0.2	
S K 514	中世	I 区	L-f 12	2.6	2.2	0.28	S B 632の屋内土坑
S K 515	中世	I 区	L-m 8	2.0	2.0	0.08	
S K 517	中世	I 区	L-m 6	3.3	3.1	0.4	S B 625の屋内土坑
S K 519	中世	I 区	L-l 5	2.8	2.0	0.12	土壇墓か
S K 523	中世	I 区	L-m 12	1.4	0.9	0.3	
S K 524	中世	I 区	L-k 6	0.9	0.7	0.3	
S K 525	中世	I 区	L-k 6	0.4	0.4	0.1	
S K 526	中世	I 区	L-k 6	1.9	1.2	0.03	
S K 527	中世	I 区	L-m 10	1.8	0.8	0.22	
S K 531	中世	I 区	L-i 7	1.9	0.9	0.1	
S K 533	中世	I 区	L-i 8	1.9	1.6	0.46	
S K 534	中世	I 区	L-i 9	-	1.0	0.14	
S K 539	中世	I 区	L-k 10	1.6	0.9	0.2	
S K 542	中世	I 区	L-h 9	1.3	0.9	0.08	
S K 548	中世	I 区	L-c 5	3.2	2.0	0.12	
S K 549	古墳	I 区	L-c 11	1.7	1.4	0.1	
S K 550	中世	I 区	L-c 8	1.1	0.6	0.2	鍛冶炉か
S K 552	中世	I 区	L-d 11	2.0	1.9	0.15	
S K 554	中世	I 区	L-d 8	2.7	2.5	0.15	S B 630の屋内土坑
S K 560	中世	I 区	L-b 7	3.6	3.0	0.2	
S K 563	中世	I 区	L-c 6	3.1	2.0	0.34	土壇墓か
S K 564	中世	I 区	L-b 9	2.8	1.1	0.22	
S K 566	中世	I 区	L-i 10	2.0	1.4	0.43	
S K 569	古墳	I 区	L-b 6	3.0	2.0	0.1	
S K 574	古墳	I 区	L-c 9	0.9	0.6	0.15	S H 546竈、法量は内法
S K 581	中世	I 区	L-i 7	1.8	1.3	0.3	
S K 585	中世	I 区	L-k 8	3.6	1.8	0.7	土壇墓か
S K 594	中世	II 区	L-h 21	1.9	1.2	0.24	
S K 602	中世	II 区	L-e 21	2.0	1.6	0.46	
S K 606	中世	II 区	L-f 16	1.1	0.8	0.1	
S K 609	中世	II 区	L-g 20	1.4	0.8	0.3	
S K 611	中世	II 区	L-e 19	2.4	2.3	0.2	
S K 615	中世	II 区	L-e 17	1.2	1.1	0.14	
S K 618	中世	II 区	L-d 16	2.4	1.8	0.1	
S K 619	中世	II 区	L-h 21	-	-	0.3	
S K 620	中世	II 区	L-h 20	-	-	0.25	
S K 657	中世	II 区	L-b 16	1.9	1.0	0.12	

溝

遺構名	時期	調査区	グリッド	延長 (m)	幅 (m)	深さ (m)	備考
S D518	中世	I 区	L-i 3	16.0	0.5	0.2	土塁下層の遺構
S D521	中世	I 区	L-m10	16.0	0.5	0.1	
S D529	中世	I 区	L-l 10	39.5	1.6	0.1	
S D530	中世	I 区	L-k 9	8.4	0.8	0.2	
S D532	中世	I 区	L-i 7	4.0	0.4	0.3	
S D535	中世	I 区	L-f 9	13.3	0.8	0.07	
S D536	中世	I 区	L-j 7	6.6	0.8	0.7	
S D537	中世	I 区	L-g 12	4.9	0.7	0.1	
S D538	中世	I 区	L-i 6	23.5	0.8	0.2	方形周溝状の溝、墳墓の可能性
S D540	中世	I 区	L-j 10	4.5	0.8	0.25	
S D541	中世	I 区	L-i 10	3.2	0.8	0.25	
S D545	中世	I 区	L-k 11	18.2	4.0	0.8	
S D558	中世	I 区	L-b 10	6.0	1.3	0.1	
S D559	中世	I 区	L-b 8	3.7	0.35	0.05	
S D567	中世	I 区	L-i 5	26.0	1.8	0.25	
S D570	中世	I 区	L-a 3	9.0	0.9	0.65	
S D572	中世	I 区	L-b 9	15.5	1.1	0.1	
S D573	中世	I 区	L-b 5	8.7	1.4	0.2	
S D575	中世	I 区	L-g 6	20.0	5.0	0.9	道状遺構
S D576	中世	I 区	L-b 4	23.0	0.9	0.15	
S D577	古墳	I 区	L-d 8	8.5	0.4	0.2	
S D580	古墳	I 区	L-d 5	4.8	0.3	0.1	
S D582	中世	I 区	L-k 8	10.5	2.3	0.35	道状遺構？
S D588	中世	II 区	L-h 18	65.0	0.5	0.1	
S D591	中世	II 区	L-b 22	8.6	0.8	0.25	
S D596	中世	II 区	L-b 22	4.0	0.5	0.1	
S D599	中世	II 区	L-e 20	19.0	0.65	0.15	
S D607	中世	II 区	L-h 19	21.0	1.8	0.4	
S D608	中世	II 区	L-d 17	9.0	1.1	0.1	
S D614	中世	II 区	L-g 17	2.5	0.4	0.1	
S D616	古墳	II 区	L-d 17	-	-	0.05	
S D644	中世	I 区	L-f 9	20.7	0.5	0.14	
S D652	中世	II 区	L-a 19	9.5	0.6	0.1	

第4表 遺物観察表 (※項目中の「RNO」とは、当センターで用いている実測図の通番のことである)

土器・瓦・土製品

NO	RNO	種類	器種	産地 系統	小地区	遺構	残存度	口径	底径	器高	技法 文様	施軸	胎土	焼成	色調 (外面)	特記事項
1	10-2	土師器	甕	L-c8	SH546	口縁部1/12	—	—	—	—	ハケ	—	良	—	にぶい橙	
2	9-7	土師器	甕	L-d8	SH546	口縁部1/12	—	—	—	—	—	—	やや良	—	にぶい黄橙	
3	11-6	土師器	甕	L-d8	SH546	口縁部1/6	—	—	—	—	—	—	やや粗	—	明黄褐	
4	12-6	土師器	甕	L-c8	SH546	口縁部1/8	—	—	—	—	—	—	やや良	—	にぶい黄褐	
5	12-2	土師器	甕	L-d8	SH546	口縁部1/12	—	13.4	—	—	—	—	やや粗	—	浅黄橙	
6	11-7	土師器	甕	L-c8	SH546	口縁部1/3	—	12.0	—	—	ナデ・ハケ	—	やや粗	—	淡赤橙	
7	9-8	土師器	甕	L-d8	SH546	口縁部1/12	—	—	—	—	ヨコナデ	—	やや良	—	にぶい黄橙	
8	11-5	土師器	甕	L-d8	SH546	口縁部1/12	—	—	—	—	—	—	やや粗	—	浅黄橙	
9	11-8	土師器	甕	L-d8	SH546	口縁部1/12	—	—	—	—	—	—	やや粗	—	浅黄橙	煤付着
10	12-1	土師器	甕	L-d8	SH546	口縁部1/12	—	16.0	—	—	—	—	やや粗	—	明黄褐	
11	11-9	土師器	甕	L-c8	SH546	口縁部2/3	—	18.0	—	—	ナデ	—	良	—	にぶい黄橙	
12	12-5	土師器	鍋類	L-c8	SH546	把手	—	—	—	—	—	—	良	—	灰白	
13	10-3	土師器	高杯	L-c8	SH546	胴部片	—	—	—	—	—	—	良	—	浅黄橙	三方向に円形透穴
14	11-2	須恵器	杯蓋	L-d8	SH546	1/3	—	11.8	—	—	口クロナデ・ケズリ	—	良	—	灰白	
15	11-3	須恵器	杯蓋	L-d8	SH546	1/4	—	11.6	—	—	口クロナデ	—	良	—	灰白	
16	11-1	須恵器	杯蓋	L-d8	SH546	2/3	—	11.8	—	4.1	口クロナデ・ケズリ	—	良	—	灰褐	
17	11-4	須恵器	杯蓋	L-c8	SH546	1/12	—	—	—	—	口クロナデ・ケズリ	—	良	—	灰	
18	9-3	須恵器	杯蓋	L-c8	SH546	1/4	—	13.0	—	3.3	口クロナデ	—	良	—	灰	
19	9-1	須恵器	杯蓋	L-d8	SH546	完形	—	13.2	—	3.3	口クロナデ	—	良	—	明	
20	9-5	須恵器	杯(身)	L-d8	SH546	口縁部1/12	—	12.6	—	—	口クロナデ	—	良	—	明	明オリープ灰
21	9-6	須恵器	壺	L-d8	SH546	口縁部1/12	—	13.0	—	—	口クロナデ	—	良	—	灰	
22	12-3	須恵器	高杯	L-d8	SH546	口縁部小片	—	—	—	—	口クロナデ	—	良	—	灰	
23	9-4	須恵器	高杯	L-c8	SH546	口縁部1/12	—	—	—	—	口クロナデ	—	良	—	灰	
24	9-2	須恵器	鉢	L-d8	SH546	1/4	—	—	—	—	口クロナデ・カキメ	—	良	—	暗オリープ灰	ゆがみ大きい
25	10-1	須恵器	甕	L-d8	SH546	口縁部1/4	—	30.0	—	—	ヨコナデ・直織文・波状文	—	良	—	灰白	
26	12-4	須恵器	長頸壺	L-d8	SH546	2/3	—	—	—	—	口クロナデ・ケズリ	—	良	—	オリープ黒	
27	22-3	土師器	甕	L-e6	SH579	口縁部1/12	—	20.0	—	—	—	—	やや粗	—	にぶい黄橙	
28	24-1	土師器	台付甕	L-d8	SH586	台部	—	6.0	—	—	ナデ・ハケ	—	やや良	—	橙	
29	24-2	土師器	高杯	L-d8	SH586	胴部片	—	—	—	—	ナデ	—	良	—	橙	
30	23-1	土師器	高杯	L-d8	SH586	胴～杯部片	—	—	—	—	—	—	良	—	明黄褐	
31	23-2	土師器	壺	L-d8	SH586	底部	—	5.9	—	—	ナデ	—	やや粗	—	浅黄橙	
32	39-5	土師器	台付甕	L-c8	Ph5	3/4	—	—	—	—	—	—	良	—	浅黄	
33	41-3	土師器	甕	L-c6	Ph1	口縁部片	—	—	—	—	—	—	良	—	淡赤橙	
34	40-1	土師器	甕	L-b7	Ph5	口縁部1/6	—	17.4	—	—	ヨコナデ	—	良	—	浅黄橙	
35	41-2	土師器	甕	L-k3	Ph2	口縁～胴部1/12	—	12.0	—	—	—	—	良	—	橙	
36	41-1	土師器	鍋類	L-d9	Ph2	把手	—	—	—	—	—	—	やや良	—	灰白	
37	39-6	須恵器	杯蓋	L-b8	Ph7	口縁部小片	—	—	—	—	口クロナデ	—	良	—	灰	
38	41-7	須恵器	高杯	L-e16	Ph1	胴部片	—	—	8.8	—	口クロナデ	—	良	—	灰	
39	13-3	土師器	甕	L-c8	SK550	台部	—	—	—	—	ハケ	—	良	—	橙	
40	13-2	須恵器	杯(身)	L-c8	SK550	1/3	—	12.4	—	3.6	口クロナデ・ケズリ	—	良	—	灰	
41	38-6	土師器	甕	L-b7	SK569	口縁部小片	—	—	—	—	ナデ	—	やや良	—	黄橙	
42	38-3	土師器	甕	L-b7	SK569	口縁部小片	—	—	—	—	ナデ	—	やや良	—	淡黄	
43	38-1	須恵器	杯蓋	L-b7	SK569	口縁部小片	—	—	—	—	口クロナデ	—	良	—	黒褐	
44	15-6	須恵器	高杯	L-b7	SK569	胴部1/2	—	11.2	—	—	—	—	良	—	灰白	三方向に長方形透穴
45	37-2	土師器	鍋類	L-b7	SK569	把手	—	—	—	—	—	—	やや良	—	浅黄橙	
46	21-1	土師器	高杯	L-c9	SK574	胴部1/2	—	—	—	—	—	—	良	—	にぶい黄橙	
47	22-1	土師器	甕	L-e8	SD577	口縁部1/6	—	—	—	—	—	—	やや粗	—	浅黄橙	
48	36-2	土師器	壺	L-d17	SD616	底部片	—	6.5	—	—	—	—	やや粗	—	灰白	
50	38-4	土師器	甕	L-e11	SK549	口縁部小片	—	—	—	—	—	—	やや粗	—	橙	
51	7-3	須恵器	杯蓋	L-i10	SD541	口縁部小片	—	—	—	—	口クロナデ	—	良	—	灰白	
52	6-9	須恵器	壺	L-i10	SD541	口縁部小片	—	14.0	—	—	口クロナデ	—	良	—	黄灰	

NO	RNO	種類	器種	産地系統	小地区	遺構	残存度	量量cm 口径 底径 器高	技法 文様	施釉	胎土	焼成	色調(外面)	特記事項
53	7-2	須臾器	蓋		L-i10	SD541	口縁部片	20.0	ロクロナデ・刺突文	—	やや良	良	灰	
54	59-2	土製品	輪羽口		L-i19	SD541	先端部片	—	—	—	良	良	灰	
56	46-3	須臾器	蓋		L-c9	包含層	口縁部小片	8.0	ロクロナデ	—	良	良	灰白	
57	39-1	灰軸陶器	小碗		L-k5	表土掘削	底部1/4	4.0	ロクロナデ	鉄軸	良	良	黒	
58	47-1	陶器	擂鉢	瀬戸美濃	L-k5	SB625-P1	口縁部1/6	29.0	ロクロナデ	—	良	良	浅黄橙	
59	47-3	土師器	皿		L-m5	SB625-P2	口縁部小片	—	—	—	良	良	暗赤褐	トチン付着
63	52-3	陶器	鉢	常滑	L-h8	SB626-P1	底部1/4	10.0	ヨコナデ	—	やや粗	良	黒褐	
64	52-2	陶器	壺	常滑	L-i3	SB627-P1	口縁部1/2	14.0	ヨコナデ	—	やや粗	良	浅黄橙	
65	41-6	土師器	皿		L-c7	SB630-P1	口縁部小片	8.0	ヨコナデ	—	良	良	暗赤灰	
66	53-3	陶器	擂鉢	瀬戸美濃	L-c7	SB630-P2	底部1/4	10.0	ヨコナデ	鉄軸	やや粗	良	褐	
67	44-4	陶器	壺	常滑	L-i10	SB628-P1	底部完存	12.4	ナデ	—	良	良	暗赤灰	使用による磨耗顕著
68	54-1	陶器	擂鉢	瀬戸美濃	L-g11	SB632-P1	体部・底部1/2	10.0	ヨコナデ	鉄軸	良	良	橙	
69	53-6	土師器	皿		L-g11	SB632-P1	口縁部1/6	2.1	—	—	良	—	にぶい橙	
70	53-4	土師器	皿		L-f11	SB632-P2	口縁部1/4	11.0	—	—	良	—	橙	
71	53-5	土師器	皿		L-f11	SB632-P2	1/2	12.4	—	—	良	—	橙	
72	53-1	土師器	羽釜		L-f12	SB632-P3	口縁部1/2	—	ナデ	—	良	—	にぶい橙	煤付着
75	52-4	陶器	壺	瀬戸美濃	L-e18	SB635-P1	口縁部1/6	6.0	ロクロナデ	鉄軸	良	良	黒褐	
76	49-1	陶器	擂鉢	瀬戸美濃	L-h6	SA637-P1	口縁部1/4	31.0	ロクロナデ	鉄軸	やや粗	良	赤黒	
77	48-5	陶器	天目茶碗	瀬戸美濃	L-j5	SA637-P2	口縁部小片	—	—	鉄軸・錆軸	良	良	赤黒	
78	48-4	土師器	皿		L-i9	SA639-P1	1/2	12.4	ナデ	—	良	—	浅黄橙	
79	48-1	陶器	碗	瀬戸美濃	L-b6	SA641-P1	口縁部1/6	11.0	—	灰軸	良	良	灰白	
80	48-2	陶器	擂鉢	瀬戸美濃	L-b6	SA641-P1	口縁部小片	—	ロクロナデ	鉄軸	やや良	良	黒	
81	40-7	土師器	皿		L-h9	Pt1	口縁部1/3	10.2	ロクロナデ	—	良	—	橙	
82	41-4	土師器	皿		L-h9	Pt1	1/4	—	ヨコナデ	—	良	—	浅黄橙	
83	39-4	陶器	壺	瀬戸美濃	L-e11	Pt3	口縁部1/2	10.0	ナデ	鉄軸	良	良	赤黒	
84	40-2	陶器	天目茶碗	瀬戸美濃	L-e10	Pt1	1/12	—	ロクロケズリ	鉄軸	良	良	黒褐	胴部下半は露胎
85	44-2	陶器	鉢	常滑	L-h22	Pt1	口縁部小片	—	ナデ・ヨコナデ	鉄軸	やや粗	良	橙	使用による磨耗顕著
86	14-1	陶器	天目茶碗	瀬戸美濃	L-d10	SK551	1/8	12.0	ロクロケズリ	鉄軸・錆軸	やや良	良	黒	
87	25-2	土師器	皿		L-h21	SK593	口縁部小片	—	—	—	やや良	—	黒褐	
88	26-5	陶器	皿	瀬戸美濃	L-h21	SK593	1/3	11.0	内削ぎ	灰軸	良	良	灰白	
89	26-3	陶器	皿	瀬戸美濃	L-h21	SK593	口縁部片	14.0	—	灰軸	良	良	灰白	
90	25-5	陶器	天目茶碗	瀬戸美濃	L-h21	SK593	口縁部小片	—	—	鉄軸	良	良	黒褐	
91	25-6	陶器	擂鉢	瀬戸美濃	L-h21	SK593	口縁部小片	—	—	鉄軸	やや良	良	黒褐	
92	25-7	陶器	擂鉢	瀬戸美濃	L-h21	SK593	口縁部小片	—	—	鉄軸	やや良	良	黒褐	
93	26-1	陶器	擂鉢	瀬戸美濃	L-h21	SK593	口縁部1/3	27.6	ロクロナデ	鉄軸	やや良	良	黒褐	
94	26-2	陶器	鉢	常滑	L-h21	SK593	口縁部片	—	ヨコナデ	自然釉	やや良	良	黄灰	
95	25-3	陶器	甌	常滑	L-h21	SK593	口縁部小片	—	ロクロナデ	—	やや粗	良	にぶい橙	
96	25-4	陶器	甌	常滑	L-h25	SK593	口縁部小片	—	ロクロナデ	—	やや粗	良	にぶい橙	
97	25-1	陶器	甌	常滑	L-h21	SK593	口縁部片	—	ヨコナデ	—	やや粗	良	浅黄橙	
99	33-1	陶器	甌	常滑	L-g18	SK612	口縁部1/2	28.4	ナデ・板ナデ	—	やや粗	良	黒褐	
100	32-2	陶器	擂鉢	瀬戸美濃	L-g18	SK612	底部1/4	—	ロクロナデ	鉄軸	やや粗	良	赤黒	使用による磨耗顕著
101	31-6	陶器	壺(徳利)	瀬戸美濃	L-g18	SK612	底部完存	10.6	ロクロケズリ	鉄軸・錆軸	良	良	赤黒	
102	32-4	磁器	杯?		L-g18	SK612	口縁部小片	—	ロクロケズリ	透明釉	良	良	灰白	近世以降?
103	32-3	加工円盤			L-g18	SK612	完形	—	—	—	良	良	灰白	天目茶碗を転用
104	31-5	土師器	羽釜		L-e16	SK617	口縁部小片	—	ナデ	—	良	—	にぶい褐	
105	38-5	土師器	皿		L-h8	SK520	小片	—	—	—	良	—	灰白	
106	14-3	陶器	天目茶碗	瀬戸美濃	L-d10	SK553	1/2	11.8	—	鉄軸・錆軸	良	良	黒褐	
108	27-10	土師器	皿		L-f19	SK603	口縁部片	—	—	—	やや良	—	にぶい黄橙	
109	27-11	磁器	青磁碗	中国	L-f19	SK603	底部片	—	花文	青磁釉	良	良	緑灰	
110	27-8	陶器	碗	山茶碗	L-f19	SK603	底部1/2	—	ロクロナデ	鉄軸	良	良	灰	
111	58-2	陶器	擂鉢	瀬戸美濃	L-f19	SK603	底部1/6	7.0	ロクロナデ	鉄軸	良	良	暗赤灰	使用による磨耗顕著
112	32-1	陶器	天目茶碗	瀬戸美濃	L-i20	SK613	口縁部1/6	11.0	ロクロケズリ	鉄軸・錆軸	良	良	にぶい褐	

NO	RNO	種類	器種	産地 系統	小地区	遺構	残存度	量量cm		技法 文様		施釉	胎土	焼成	色調 (外面)	特記事項
								口径	底径	器高	器径					
115	1-1	陶器	皿	瀬戸美濃	L-2	SK502	1/3	11.0	6.4	3.0	直線文	灰釉	良	オリープ黄	トチン付着	
116	2-4	陶器	搦鉢	瀬戸美濃	L-f12	SK513	底部1/6	-	9.0	-	-	鉄釉	良	オリープ黒	-	
117	1-4	陶器	天目茶碗	瀬戸美濃	L-m8	SK515	口縁部小片	-	-	-	ナデ	鉄釉	良	黒褐	-	
118	2-5	土師器	羽釜		L-m7	SK517	口縁部小片	-	-	-	-	-	良	にぶい橙	-	
119	1-5	土師器	皿		L-m8	SK519	口縁部小片	-	2.2	-	-	-	良	にぶい褐	-	
120	2-3	土師器	皿		L-h6	SK519	1/6	10.0	7.4	1.3	-	-	良	にぶい橙	-	
122	2-1	土師器	羽釜		L-h6	SK524	口縁～胴部	21.0	-	-	ナデ	-	良	浅黄橙	-	
123	2-2	土師器	皿		L-h6	SK525	1/6	11.0	6.0	1.6	ナデ	-	良	にぶい橙	-	
124	3-1	陶器	甕	常滑	L-h6	SK526	口縁部1/6	36.0	-	-	-	-	良	褐灰	-	
125	5-3	土師器	皿		L-m10	SK527	口縁部1/4	12.0	-	1.9	ヨコナデ	-	良	明黄褐	-	
126	5-4	土師器	皿		L-m10	SK527	口縁部1/2	11.0	-	1.6	ヨコナデ	-	良	橙	-	
127	5-5	土師器	皿		L-m10	SK527	口縁部1/2	12.0	-	-	ヨコナデ	-	良	明黄褐	-	
128	5-6	土師器	皿		L-m10	SK527	口縁部1/2	-	-	1.7	-	-	良	橙	-	
129	4-2	土師器	羽釜		L-m10	SK527	口縁部小片	-	-	-	ナデ	-	良	にぶい橙	煤付着	
130	4-1	陶器	壺	常滑	L-m10	SK527	胴部1/4	13.8	-	-	-	鉄釉・錆釉	良	暗オリープ	-	
131	3-2	陶器	鉢	常滑	L-m10	SK527	底部1/2	-	14.8	-	ナデ	-	良	黄褐	使用による磨耗顕著	
132	4-8	土師器	皿		L-17	SK531	口縁部1/2	11.0	-	1.5	ナデ	-	良	にぶい黄橙	-	
133	4-7	土師器	皿		L-17	SK531	口縁部1/2	-	-	-	ナデ	-	良	黒	煤付着	
134	4-5	陶器	天目茶碗	瀬戸美濃	L-17	SK531	口縁部1/2	12.0	-	-	-	-	良	黒	-	
135	4-4	陶器	天目茶碗	瀬戸美濃	L-17	SK531	底部完存	-	4.2	-	-	-	良	黒	-	
136	6-4	土師器	皿		L-18	SK533	1/2	10.0	-	2.0	-	-	良	にぶい黄橙	-	
137	6-3	土師器	皿		L-18	SK533	1/3	11.0	-	1.8	ヨコナデ	-	良	にぶい黄橙	-	
138	6-2	土師器	羽釜		L-18	SK533	口縁部小片	-	-	-	ナデ	-	良	浅黄橙	煤付着	
139	6-1	陶器	鉢	常滑	L-18	SK533	口縁部小片	-	-	-	ヨコナデ	-	良	褐	-	
140	57-2	陶器	壺	瀬戸美濃	L-18	SK533	底部1/4	-	-	-	ロクロナデ	-	良	にぶい赤褐	-	
141	6-5	土師器	皿		L-19	SK534	口縁部小片	12.0	-	1.6	-	-	良	浅黄橙	-	
142	7-1	陶器	鉢	常滑	L-k10	SK539	口縁部1/6	29.0	-	-	ヨコナデ	-	良	暗赤褐	使用による磨耗顕著	
143	58-1	陶器	甕	常滑	L-k10	SK539	底部1/4	-	12.6	-	ナデ	-	良	赤褐	-	
144	6-7	陶器	鉢	常滑	L-k10	SK539	口縁部1/2	-	-	-	ヨコナデ	-	良	橙	使用による磨耗顕著	
145	7-4	土師器	羽釜		L-h9	SK542	口縁部小片	-	-	-	ヨコナデ	-	良	にぶい黄橙	-	
146	13-1	土師器	羽釜		L-d4	SK548	口縁部1/6	21.0	-	-	ナデ・ハケ	-	良	にぶい褐	煤付着	
147	14-4	土師器	羽釜		L-d11	SK552	口縁部小片	-	-	-	ヨコナデ	-	良	にぶい黄橙	-	
148	14-2	陶器	皿	瀬戸美濃	L-d11	SK552	1/3	10.4	-	2.4	-	灰釉	良	灰白	-	
149	14-8	磁器	染付皿	中国	L-e11	SK552	1/4	9.9	5.8	2.25	青花	透明釉	良	明青灰	-	
150	15-1	土師器	羽釜		L-d9	SK554	口縁～胴1/3	19.6	-	-	ヨコナデ・ハケ	-	良	浅黄橙	煤付着	
151	14-7	陶器	天目茶碗	瀬戸美濃	L-d9	SK554	1/4	10.6	4.4	4.4	ロクロケズリ	-	良	黒	-	
152	18-1	陶器	鉢	常滑	L-d9	SK554	1/2	38.2	14.2	13.0	ヨコナデ	-	良	橙	使用による磨耗顕著	
153	19-1	陶器	壺	常滑	L-d9	SK554	口縁部1/2	21.0	-	-	ヨコナデ	-	良	暗赤褐	-	
154	59-1	陶器	甕	常滑	L-d9	SK554	胴部1/2	-	-	-	-	-	良	赤黒	-	
155	17-1	陶器	甕	常滑	L-d9	SK554	口縁部1/4	36.2	-	-	ヨコナデ	-	良	にぶい褐	-	
156	15-3	土師器	羽釜		L-b7	SK560	口縁部1/6	19.0	-	-	ヨコナデ	-	良	にぶい黄橙	-	
157	20-2	陶器	搦鉢	瀬戸美濃	L-b7	SK560	口縁部1/4	31.0	-	-	ロクロナデ	-	良	暗赤灰	使用による磨耗顕著	
158	56-1	瓦	平瓦		L-b7	SK560		-	-	-	-	-	-	-	-	
159	15-4	陶器	皿	瀬戸美濃	L-d6	SK563	底部小片	-	-	5.5	印花文	-	良	灰オリープ	-	
160	15-5	陶器	香炉	瀬戸美濃	L-b9	SK564	口縁部1/6	11.0	-	-	-	-	良	極暗赤褐	-	
161	15-8	加工	円盤		L-j10	SK566	完形	-	-	-	-	-	-	-	常滑甕を転用	
162	15-7	加工	円盤		L-j10	SK566	完形	-	-	-	-	-	-	-	常滑甕を転用	
163	22-2	土師器	皿		L-18	SK581	口縁部1/6	11.0	7.8	1.85	ヨコナデ	-	良	浅黄橙	-	
164	21-4	陶器	天目茶碗	瀬戸美濃	L-h9	SK585	口縁部1/8	9.0	-	-	-	-	良	黒	-	
165	26-4	陶器	皿	瀬戸美濃	L-h21	SK594	口縁部1/4	14.0	9.1	3.6	印花文	-	良	灰白	-	
166	28-1	陶器	天目茶碗	瀬戸美濃	L-e21	SK602	口縁部1/3	10.4	-	-	-	-	良	褐	-	
167	28-2	陶器	天目茶碗	瀬戸美濃	L-e21	SK602	口縁部1/4	11.2	-	-	-	-	良	褐	-	

NO	RNO	種類	器種	産地 系統	小地区	遺構	残存度	法量cm		技法 文様	施釉	胎土	焼成	色調(外面)	特記事項
								口径	器高						
169	27-9	陶器	鉢	常滑	L-e21	SK602	口縁部片	-	-	ロクロナデ	-	良	橙	使用による磨耗顕著	
170	27-7	陶器	鉢	常滑	L-e21	SK602	口縁部片	-	-	-	-	良	橙	使用による磨耗顕著	
171	29-1	陶器	摺鉢	瀬戸美濃	L-e21	SK602	小片	11.2	-	-	-	良	黒褐		
172	30-1	瓦	丸瓦	瀬戸美濃	L-e21	SK602	1/2	-	-	布目・コビキA・ナデ	-	良	灰		
173	28-4	瓦	平瓦	瀬戸美濃	L-e21	SK602	1/2	-	-	ナデ	-	良	灰		
174	31-4	陶器	壺	瀬戸美濃	L-f16	SK606	胴部片	-	-	ロクロナデ	鉄釉	良	黄褐		
175	32-5	陶器	皿	瀬戸美濃	L-g20	SK609	底部1/4	5.8	-	-	灰釉	良	オリーブ黄		
176	34-1	瓦	丸瓦	瀬戸美濃	L-e17	SK615	小片	-	-	布目・コビキA・ナデ	-	良	灰		
177	35-1	陶器	甕	常滑	L-e17	SK615	口縁部1/4	28.4	-	ナデ・板ナデ	-	良	にぶい赤褐		
178	35-2	陶器	甕	常滑	L-e17	SK615	口縁部1/6	30.0	-	ナデ・板ナデ	-	良	にぶい赤褐		
179	36-1	陶器	甕	常滑	L-d16	SK618	口縁部片	-	-	ヨコナデ	-	良	にぶい黄褐	煤付着	
181	1-6	土師器	羽釜	常滑	L-t4	SD518	口縁部小片	-	-	ナデ	-	良	にぶい黄褐	煤付着	
182	1-7	土師器	羽釜	常滑	L-t5	SD518	小片	-	-	ナデ	-	良	黄橙	煤付着	
183	6-6	陶器	天目茶碗	瀬戸美濃	L-t7	SD536	口縁部小片	-	-	-	鉄釉	良	極暗赤褐		
184	6-8	陶器	鉢	常滑	L-t10	SD540	口縁部小片	-	-	ヨコナデ・板ナデ	-	良	浅黄橙		
185	7-5	土師器	皿	常滑	L-t11	SD545	1/4	8.0	1.4	-	-	良	灰白		
186	7-6	土師器	皿	常滑	L-h10	SD545	口縁部小片	-	-	ヨコナデ	-	良	黒	煤付着	
187	7-7	土師器	羽釜	常滑	L-h11	SD545	口縁部小片	-	-	ヨコナデ	-	良	黒	天目茶碗の高台を転用	
188	8-3	加工円盤			L-t11	SD545	完形	-	-	-	-	良	黒		
189	57-1	陶器	甕	常滑	L-h10	SD545	口縁部1/12	-	-	ロクロナデ	-	良	にぶい赤褐		
190	8-2	陶器	甕	常滑	L-t11	SD545	口縁部	34.0	-	ヨコナデ	-	良	灰褐		
191	8-1	陶器	摺鉢	瀬戸美濃	L-h10	SD545	口縁部1/6	29.6	-	ロクロナデ	鉄釉	良	黒褐		
192	15-2	磁器	青磁碗	中国	L-b10	SD558	口縁部小片	-	-	-	青磁釉	良	明オリーブ灰		
193	16-6	土師器	皿	常滑	L-b3	SD570	1/4	-	1.5	-	-	良	橙		
194	16-5	土師器	皿	常滑	L-b3	SD570	口縁部1/4	-	-	-	-	良	黄		
195	16-7	土師器	皿	常滑	L-b3	SD570	口縁部1/6	12.8	1.8	ナデ	-	良	浅黄		
196	16-4	土師器	皿	常滑	L-b3	SD570	口縁部1/12	-	4.1	ナデ	-	良	浅黄		
197	16-2	土師器	茶釜	常滑	L-b3	SD570	口縁部	-	-	-	-	良	浅黄		
198	37-1	土師器	茶釜	常滑	L-b3	SD570	胴部片	-	-	ナデ	-	良	浅黄橙		
199	16-1	陶器	皿	瀬戸美濃	L-e3	SD570	1/3	10.2	4.8	ロクロケズリ	鉄釉	良	褐		
200	20-3	陶器	摺鉢	瀬戸美濃	L-b3	SD570	1/4	25.6	8.3	ロクロケズリ	鉄釉	良	暗赤灰	使用による磨耗顕著	
201	20-1	磁器	染付皿	中国	L-b3	SD570	口縁部1/12	12.4	-	青花・直線文	透明釉	良	淡黄		
202	16-3	白磁	碗	中国	L-b3	SD570	口縁部1/12	-	-	-	透明釉	良	灰白		
203	21-2	磁器	染付皿	中国	L-g9	SD575	2/5	10.2	2.5	青花・直線文・山形文	透明釉	良	灰白		
204	21-3	陶器	摺鉢	瀬戸美濃	L-g9	SD575	口縁部片	-	-	ロクロナデ	鉄釉	良	褐灰		
205	21-6	陶器	摺鉢	瀬戸美濃	L-g7	SD575	底部1/6	-	10.6	ロクロナデ	鉄釉	良	赤灰	使用による磨耗顕著	
206	20-4	土師器	皿	常滑	L-d4	SD576	口縁部1/6	-	-	ヨコナデ	-	良	褐灰		
207	20-5	土師器	皿	常滑	L-d4	SD576	口縁部1/6	8.8	4.4	ヨコナデ	-	良	浅黄橙		
208	21-5	陶器	摺鉢	瀬戸美濃	L-m9	SD582	口縁部2/5	25.2	-	ロクロナデ	鉄釉	良	赤灰		
209	37-3	土製品			L-f20	SD588	口縁部片	-	-	布目・ナデ	-	良	灰白		
210	24-5	陶器	卸皿	瀬戸美濃	L-e23	SD591	1/6	12.1	5.2	卸目・ロクロナデ	灰釉	良	浅黄		
211	24-3	陶器	壺	瀬戸美濃	L-b22	SD591	底部片	-	8.0	ロクロナデ	鉄釉	良	オリーブ黒	天目茶碗を転用	
212	26-6	陶器	加工円盤	常滑	L-e22	SD596	1/8	-	-	-	-	良	橙		
213	27-6	土師器	皿	常滑	L-e20	SD599	口縁部片	8.6	1.8	ナデ	-	良	浅黄橙		
214	27-5	土師器	茶釜	常滑	L-e20	SD599	口縁部片	-	-	ヨコナデ	-	良	浅黄橙		
215	27-2	磁器	白磁碗	中国	L-e22	SD599	底部片1/2	-	6.0	-	-	良	明緑灰		
216	27-1	陶器	天目茶碗	瀬戸美濃	L-d22	SD599	口縁部1/6	11.7	-	ロクロケズリ	透明釉	良	にぶい褐		
217	27-3	陶器	甕	常滑	L-e21	SD599	口縁部小片	-	-	ヨコナデ	-	良	暗赤褐		
218	27-4	陶器	甕	常滑	L-e21	SD599	口縁部1/6	23.0	-	ヨコナデ	-	良	暗赤褐		
219	39-3	土師器	皿	常滑	L-t20	包含層	1/3	13.0	2.3	ナデ	-	良	灰白		
220	41-5	土師器	皿	常滑	L-f11	包含層	口縁部1/6	17.0	11.5	1.9	-	良	黒	漆塗布	
221	46-4	土師器	羽釜	常滑	L-b8	包含層	口縁部小片	-	-	ナデ	-	良	にぶい黄橙	煤付着	

NO	RNO	種類	器種	産地 系統	小地区	遺構	残存度	法量cm		技法 文様	施釉	胎土	焼成	色調(外面)	特記事項
								口径	器高						
222	40-3	土師器	羽釜			表土	口縁部1/12	—	—	ヨコナデ	—	良	にぶい橙		
223	40-6	陶器	皿	瀬戸美濃	L-14	包出中	1/12	14.0	—		灰釉	良	灰白		
224	44-5	陶器	皿	瀬戸美濃	L-g19	包含層	1/12	9.8	5.6		灰釉	良	灰オリープ		
225	44-7	陶器	天目茶碗	瀬戸美濃	L-g20	包含層	口縁部1/12	12.4	—		鉄釉	良	黒		
226	39-8	陶器	搦鉢	瀬戸美濃	L-e21	包出中	口縁部小片	—	—	ヨコナデ	鉄釉	良	黒褐		
227	46-5	陶器	搦鉢	瀬戸美濃	L-e21	包出中	口縁部小片	—	—	ヨコナデ	鉄釉	良	赤黒		
228	39-7	陶器	搦鉢	瀬戸美濃	L-119	包含層	口縁部1/12	—	—	ヨコナデ	鉄釉	良	黄橙		
229	43-1	陶器	搦鉢	瀬戸美濃		排土	口縁部1/12	—	—		鉄釉	良	黒		
230	43-2	陶器	搦鉢	瀬戸美濃	Aトレ2	包含層	底部1/4	—	10.0		鉄釉	良	にぶい黄褐		
231	44-3	陶器	肩衝鉢	常滑	L-g18	包含層	1/6	—	5.0	ヨコナデ	—	良	褐		
232	43-3	陶器	甕	常滑		包含層	口縁部1/12	20.0	—	ヨコナデ	—	良	橙		
233	42-2	瓦	丸瓦		L-g20	包含層				布目・ナデ	—	良	灰		

石製品

NO	RNO	器種	地区	遺構	法量			石材	特記事項
					長	幅	厚さ		
60	45-1	砥石	L-17	SB625-P3	5.4	3.6	0.5	凝灰岩	
61	47-2	茶臼	L-17	SB625-P3	11.0	1.5	1.5	安山岩	
62	52-1	砥石	L-17	SB625-P3	11.8	10.9	5.2	ホルンフェルス	
107	55-1	石臼	L-d10	SK553	30.0	16.0	7.8	花崗岩	
113	51-1	五輪塔(火輪)	L-e18	SK622	19.3	18.8	11.1	玄武岩	丸ノミ・平ノミ痕
114	50-1	五輪塔(火輪)	L-e18	SK622	23.3	23.3	12.4	花崗岩	自然面残存
168	28-3	茶臼	L-e21	SK602	10.0	3.6	1.5	安山岩	
180	32-6	砥石	L-h20	SK620	7.7	3.1	3.0	ホルンフェルス	
234	42-1	砥石	L-e18	包含層	8.9	3.9	2.0	凝灰岩	

鉄製品

NO	RNO	器種	地区	遺構	法量			特記事項
					長	幅	厚さ	
49	13-4	鉄製品	L-c11	SK549	3.3	2.9	1.6	
55	32-7	鉄製品	L-g20	SD604	4.0	3.7	2.2	
73	60-3	鉄製品	L-g4	SB632-P4	3.6	0.5	0.4	
74	60-5	鉄製品	L-e12	SB632-P4	6.0	0.3	0.3	
98	60-4	鉄製品	L-h21	SK593	3.0	2.0	0.4	
121	60-1	鉄製品	L-m12	SK523	6.2	0.4	0.4	
233	60-2	鉄製品	L-f18	包含層	6.8	0.4	0.5	

写 真 图 版



調査前風景 (北側斜面、北東から)



調査前風景 (I区、中央高まりは土塁)



伊坂城跡全景（東から、右奥の高まりが主郭）



調査地全景（西から、伊勢湾を望む）



I区全景 (北から)



II区全景 (北西から)



I区全景 (上が北東)



区画A (上が西)



区画B (上が東)



II区全景 (区画C・D、上が西)



S H546・586 (北から)



S K574 (S H546竈、北から)



S H579 (南東から)



S H584 (北から)



北側斜面・土塁全景（北から）



北側斜面・登り口（北から）



S A 501全景 (東から)



S A 501断割断面 (南東から)



S K 554 ・ S B 630 (東から)



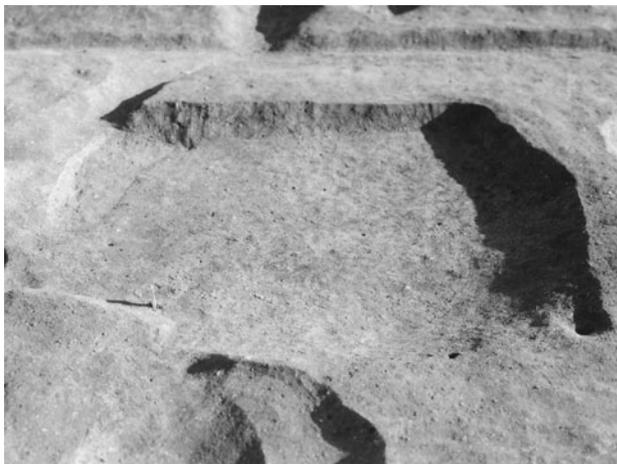
S K 517 (北から)



S K 593 (北西から)



S K 617 (北西から)



S K 612 (西から)



S K 551 (北から)



S K 520 (東から)



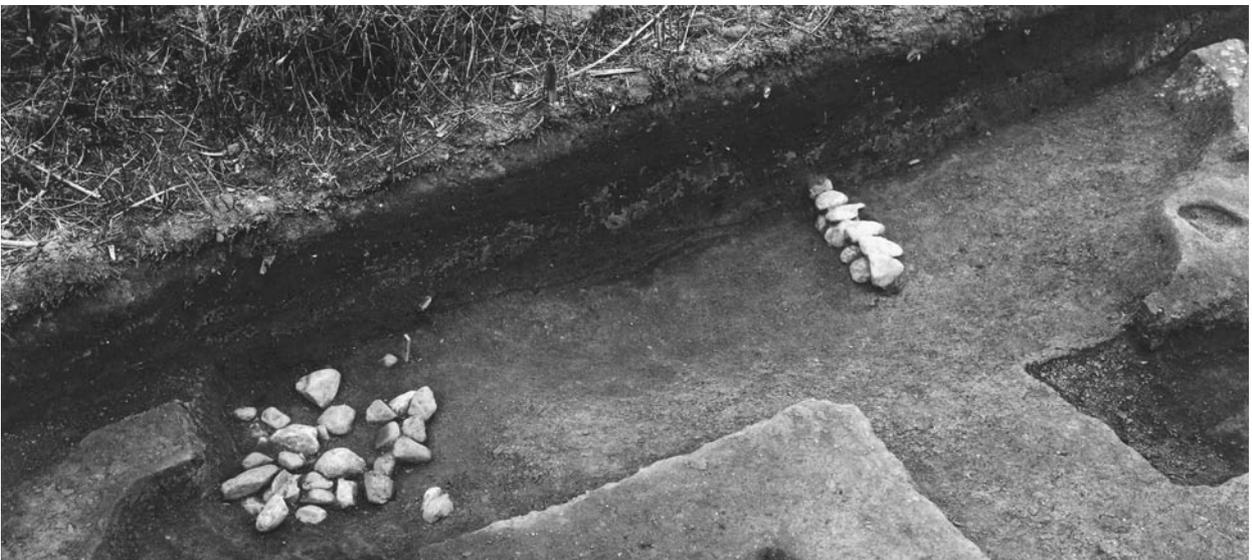
S K 553 (南から)



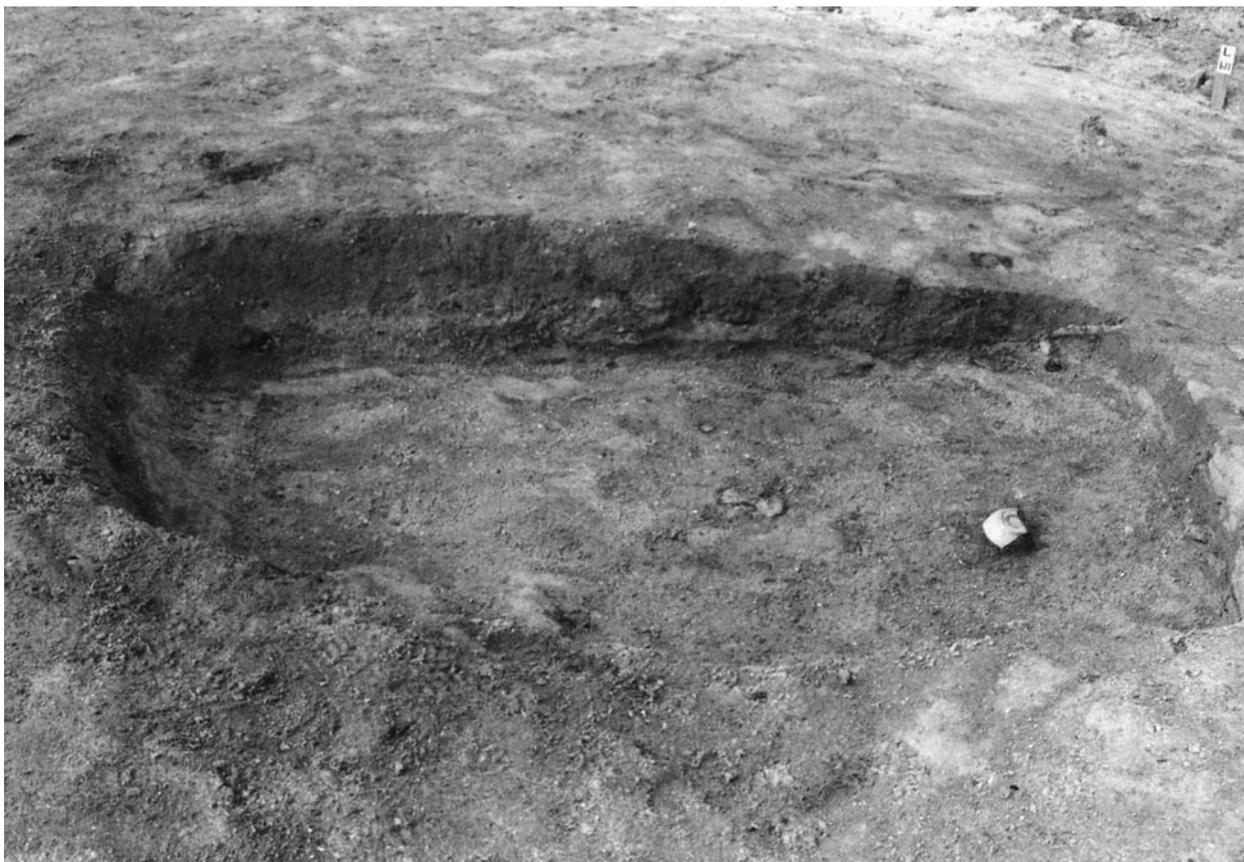
S K 603 (南から)



S K 622 (北から)



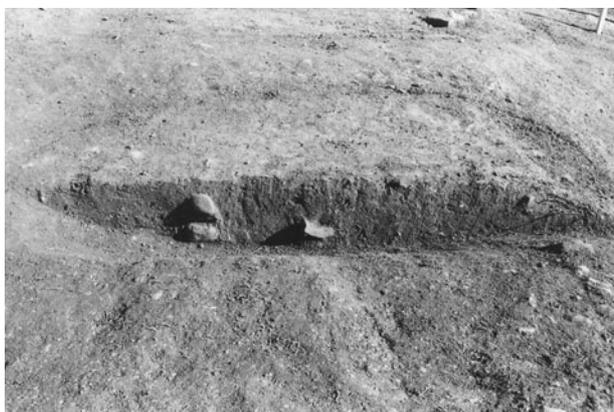
S K 613 (西から)



S K 502 (南から)



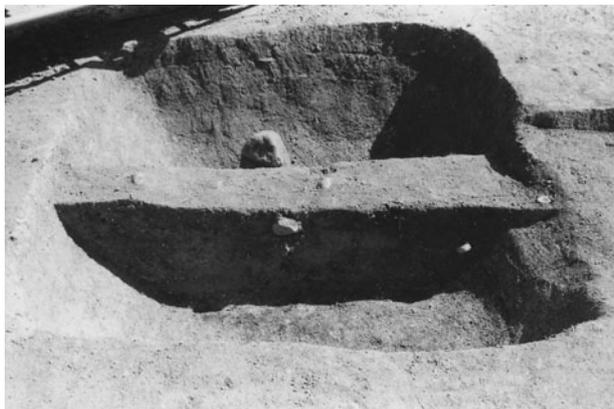
S K 502断面 (西から)



S K 527 (南から)



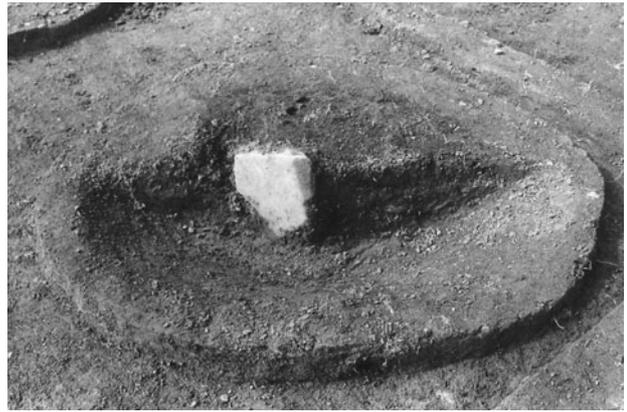
S K 531 (西から)



S K 533 (西から)



S K 539 (西から)



S K 550 (東から)



S K 563 (北から)



S K 611 (北西から)



S K 593・594・619・620 (北から)



S D 575 (南から)



S D 575遠景 (南から)



S D 545 (西から)



S D 570断面 (東から)



S D 545断面 (西から)



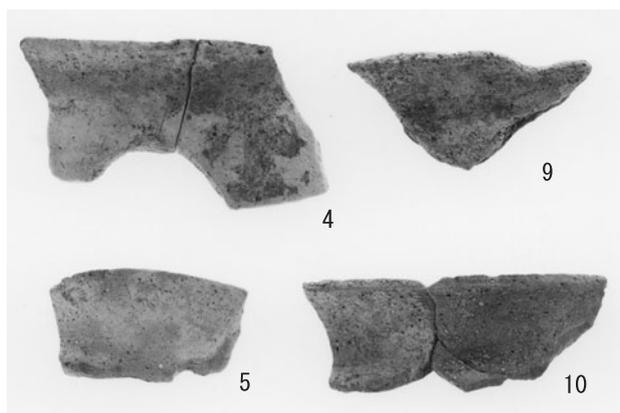
S D 607断面 (東から)



S D 538 (東から)



2



4

9

5

10



11



13



14



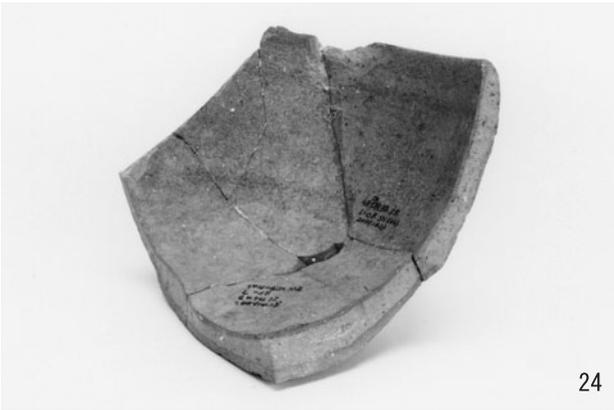
16



19



25



24



26



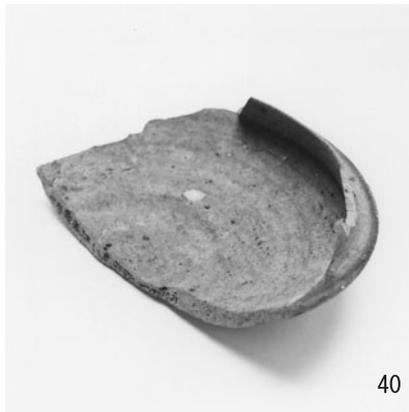
30



31



28



40



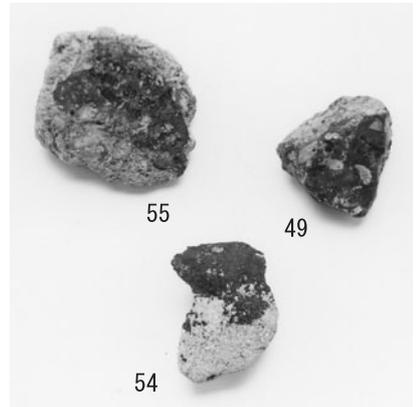
45



47



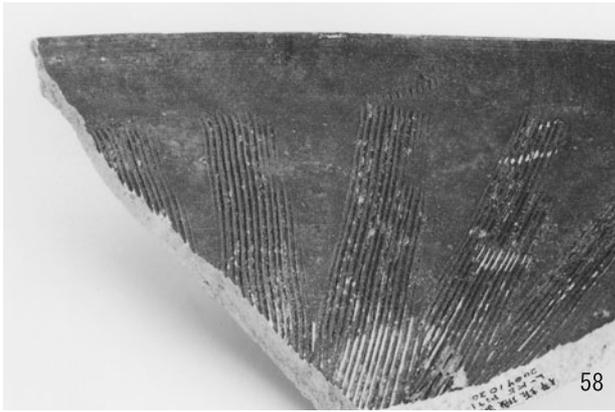
48



55

49

54



58



60



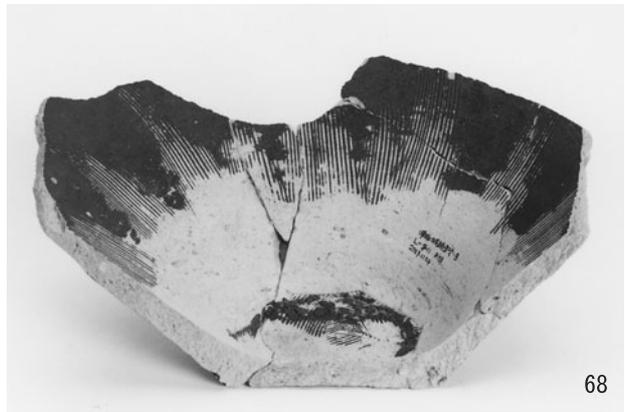
62



63



67



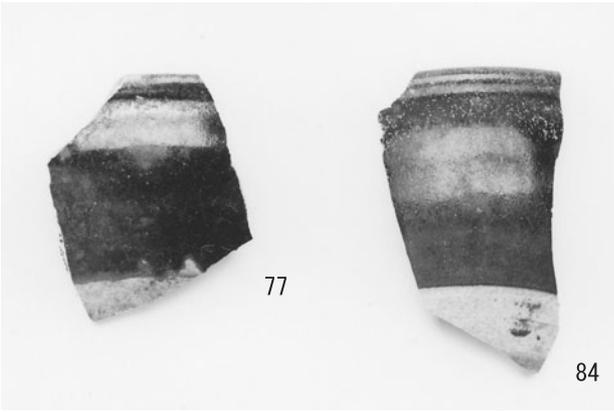
68



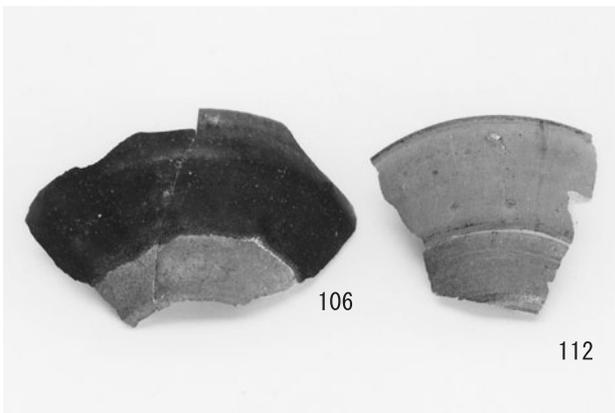
72



76



出土遺物 71・77・78・81・84・88・97・99



出土遺物 101・106・107・109・112~115・122



124



130



135



136

137



144

142

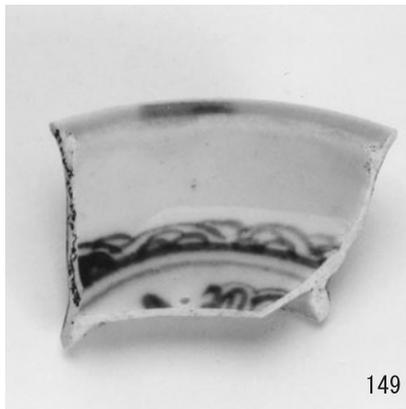
139



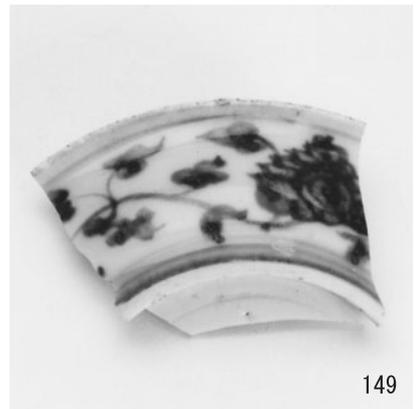
143



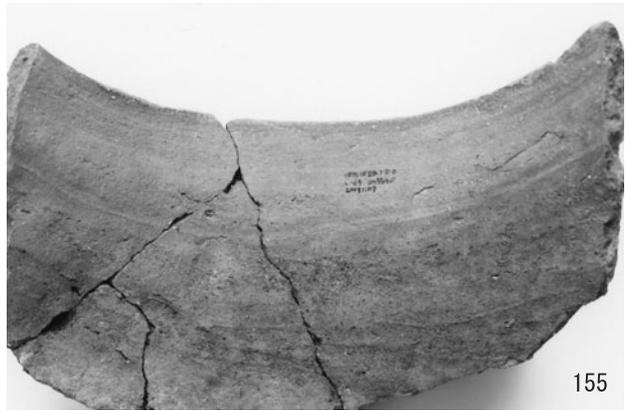
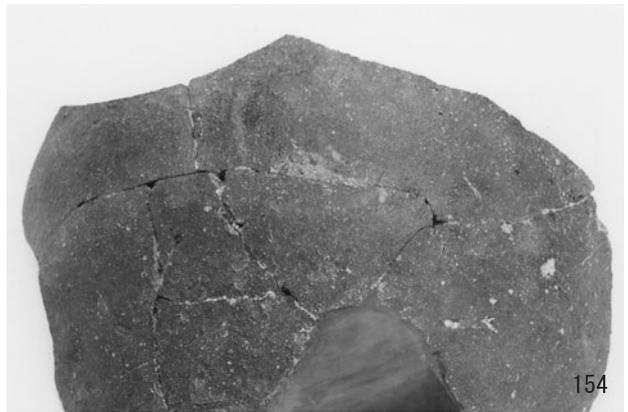
146



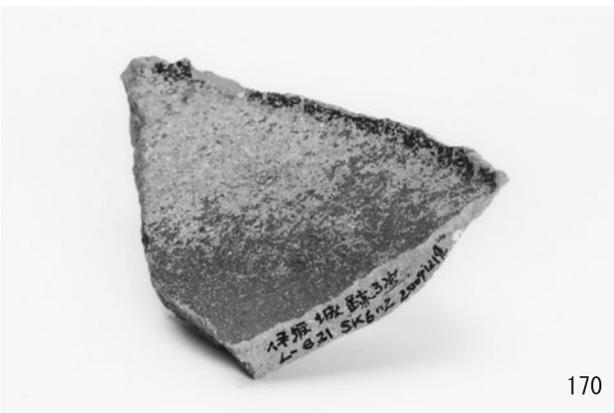
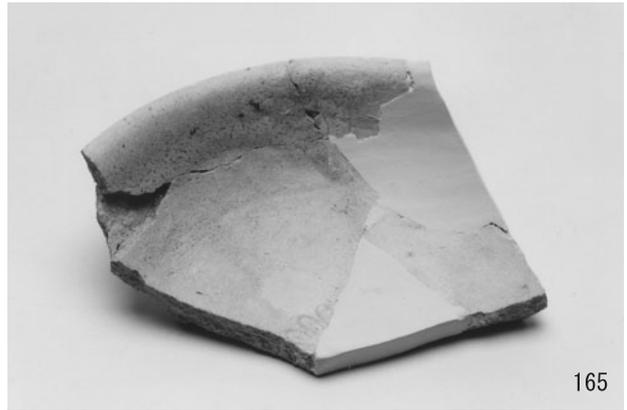
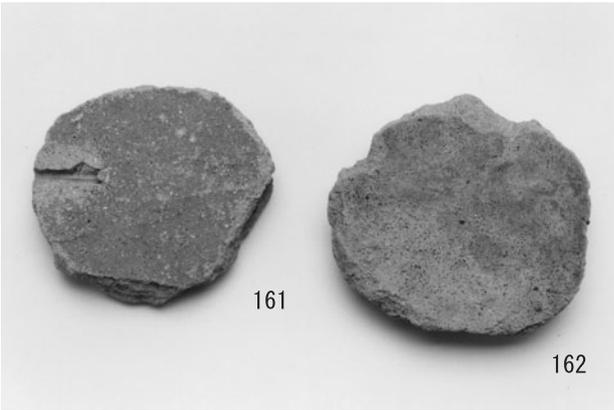
149

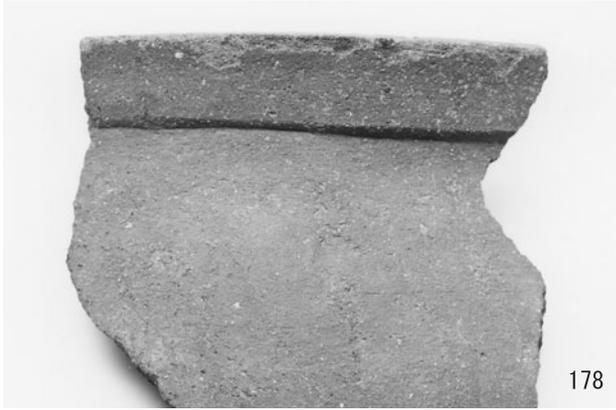


149



出土遺物 150~155





178



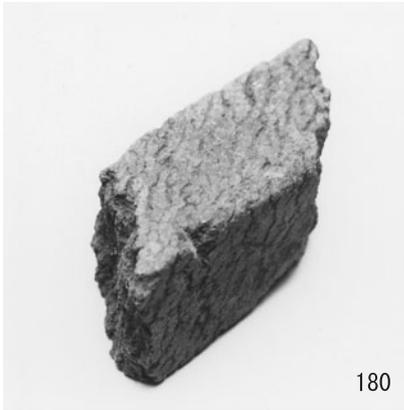
178



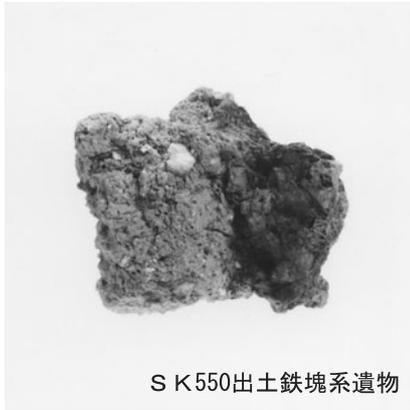
179



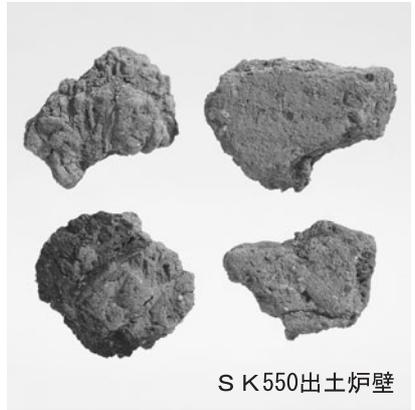
179



180



S K 550出土鉄塊系遺物



S K 550出土炉壁



184



188

212



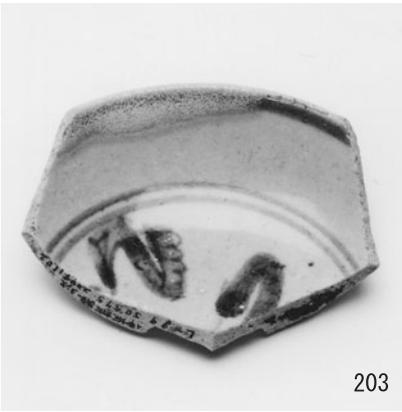
199



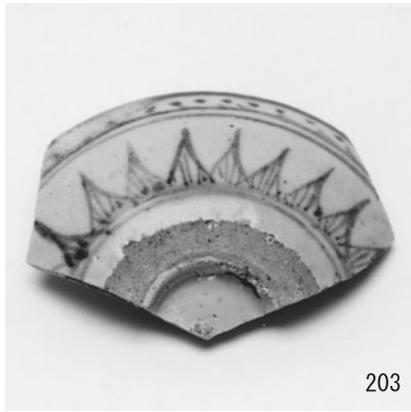
189



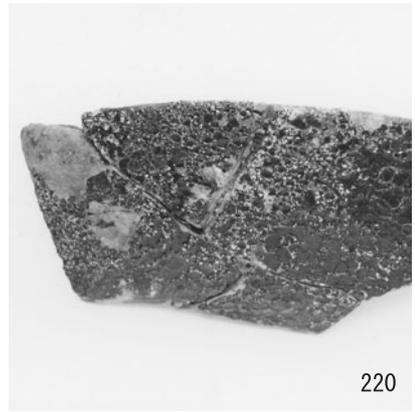
200



203



203



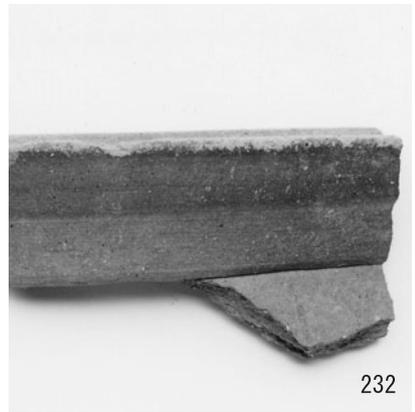
220



218



231



232



234



74

73

98

121

233

報告書抄録

ふりがな	いさかじょうあと（だいさんじ）はくつちようさほうこく							
書名	伊坂城跡（第3次）発掘調査報告							
副書名								
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	323-2							
編著者名	東谷洋平・岩脇成人・櫻井拓馬・鈴木規之・穂積裕昌							
編集機関	三重県埋蔵文化財センター							
所在地	〒515-0325 三重県多気郡明和町竹川503 TEL 0596-52-1732							
発行年月日	西暦2012（平成24）年3月19日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
いさかじょうあと 伊坂城跡	よっかいちし いさかじょう 四日市市伊坂町 あさふるやしき 字古屋敷	24202	246	35° 02' 18"	136° 37' 30"	20090719 ~20100129	4,490	近畿自動車道名 古屋神戸線（四 日市JCT～亀山 西JCT）建設事 業
種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項		
城館跡	古墳時代～ 戦国時代	竪穴住居 土塁・掘立柱建物 土坑・溝ほか		土器 陶磁器 鉄製品 石造物				
要約	伊坂城主郭の南東に連なる丘陵平坦面上において、戦国時代の屋敷地・土塁を確認した。虎口の土塁は、16世紀前半の遺構埋没後に形成されていることから、16世紀後半に伊坂城の一部改修が行われた可能性が高い。ただし、伊坂城廃城期とされる当該期の遺物は希薄であった。							

三重県埋蔵文化財調査報告323-2

伊坂城跡（第3次）発掘調査報告

2012年3月

編集・発行 三重県埋蔵文化財センター

印刷 光出版印刷株式会社
